

新しい家庭科

ウイ

自分らしさをこそ—解き放てつくられた役割意識—



1984 増刊号



○ 発刊のことば ○

地球という星に住む

全宇宙に たった一人の私

永却の歴史の流れの中の

いまを生きる たった一人の私

ちっぽけだけど この存在は重いんだ

「私らしく生きたい」ささやかな願いさえ
だいそれたもののように思ってしまった
今日まで来たけれど



いま 私は知った

自分らしく生きること

熱い願いをかける仲間がいることを

自分らしく生きるとは

私ひとりのわがままな欲望ではなくて

仲間とともに

人間が 人間らしく生きる道を

探るものだということを



お食事は丸テーブルで、
なかなか好評！



新館で夜のひととき



森林浴をしながら反省会

いよいよフォーラムが始まります



子どもたちのせいぞろい
にわか保田さんと



この脚線美！？！

'84年 *we* 夏季フォーラムプログラム

8 / 6 (後)		8 / 7 (前)	
1:00	受付		早朝ミニハイク (希望者)
2:00	開会、オリエンテーション	9:00	受付
2:30	〈全体会〉 吉田清彦さんと語り合おう "「食」を見直す中から 教育を考える"	9:30	〈全体会〉 基調講演 小沢有作さん "近代学校を 問いなおす —「家庭科」に こんにち的な 意味や内容を—"
5:00		11:00	話し合い
5:15	夕食、入浴	12:00	昼食
7:00	〈テーマ別の交流〉 1. 家庭科の部屋 2. 子どもたちの部屋 3. 女と男の部屋 4. 親と教師の部屋		
9:00			



8 / 7 (後)		8 / 8 (前)	
0:30	受付		
1:00	〈分科会〉 1. 21世紀の男と女の関係 —役割分業のない社会って— 2. 親と教師が本音を語り合うには 3. 教師と生徒の人間関係をどう結ぶか 4. おしきせの教育 —いま生徒は何を求めているか— 5. 野外コース	9:00	ちよっとやってみませんか (体操・民舞・コーラスなど)
5:00		9:30	受付
5:15	夕食		〈全体会〉 フォーラムを顧みる 分科会報告 話し合い
6:00	各地の読者会から	11:00	いま、家庭科をどうする
7:00	自由行動 〈この指とまれ式交流会〉も	12:00	閉会
		午後	実行委員と有志による 反省会



自分らしさをこそ

一解き放て、つくられた役割意識一

I、自分らしさをこそ一解き放て、つくられた役割意識一

△レビュー△

「女と男の部屋」で…………… 武田憲幸、武田恭子

「親と教師の部屋」で…………… 植垣 一彦

△私のテーマを妻でる△

●「女らしさ」「男らしさ」から解放された社会…………… 中嶋 里美

二十一世紀の男と女の関係…………… 13

参加して…………… 18

●子供たちはもうかなり追いつめられている…………… 川名はつ子、葵和美

親と教師が本音を語り合うには…………… 21

参加して…………… 25

●感情的交流を生徒と結ぶために…………… 加藤千恵子

教師と生徒の人間関係をどう結ぶか…………… 27

参加して…………… 31

●いま、生徒は何を求めているか…………… 梶原 公子

おしきせの教育…………… 32

発表した高校生から…………… 37

参加して…………… 38

△身も心も解き放つ△

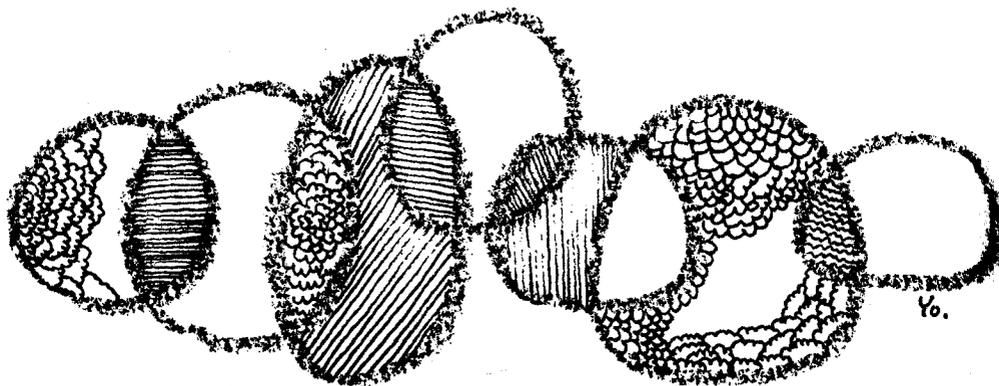
気楽にやってみました…………… 福田 緑

御殿場の自然は広いよ…………… 磯部 幸江

II、学びつつ、語り合う

「答え」は一つではない

○実行委員長として 石川由紀 102 ○実行委員の一人として 松本法子 103
○参加者の声 105



「食」を見直す中から「教育」を考える……………吉田 清彦 44
 近代学校を問い直す……………小沢 有作 54

III、いま、家庭科をどうする

●「家庭科の部屋」で……………入江 一恵 78

討論から……………80
 参加して……………83

●家庭科の現状をどう切り開く……………芦谷 薫 84
 討論から……………85

VI、語りつつ、連帯を深める

●「子どもの部屋」で……………青木喜代江 88、丸山新男 90

●子どもたちと私……………市川敦子 91、酒井貴子 92、半田めぐみ 93
 子ども連れて参加して……………94

●「この指とまれ」交流会をやってみて……………横山れいこ 96

●フォーラムを顧みる……………押切 郁 99
 最後の全体会で……………100

○発刊のことは 半田たつ子
 ○84年Wc夏季フォーラムプログラム

表紙デザイン 加藤由美子
 口絵、本文中写真・小林志夫／磯部幸江
 目次イラスト・馬場洋子 本文イラスト・野中浩一

I、自分らしさをこそ —— 解き放て、つくられた役割意識 ——

〈プレリュウド〉

「女と男の部屋」で

武田 憲 幸
武田 恭 子

女と男の部屋、そこに集まったのは女性二五名、男性七名（二歳の坊やを含む）でした。「夫婦である」ということで任された進行役でしたが、参加者の方々から突きつけられた問題には、「夫婦である」状況の中で疑うこともなかったことや、「夫婦である」ことで個々に隠蔽されてきた性の役割分業にも迫るものがあり、ことに婚姻制度を疑問視するあたりが、結婚して日の浅い私たちには消化しきれないものも含んでいました。

何が語られたか

日ごろ女と男の問題で感じていることをまじえて自己紹介をということで話は始まり、実に個性的で生きている状況も多彩な参加者から問題提起されました。個々の発言を次の五つの柱にしぼり、まとめてみたいと思います。

。職場の「お茶くみ」

。家事育児の性別役割分業

。学校教育における男女差別

。なぜ結婚するのか、婚姻制度とは何なのか

。男たちは何を語り合っているか、仕事とは何なのか

職場の「お茶くみ」

ある参加者によれば、二十年來の問題であるといえます。それがいまだに語られる。それに根の深さを感じます。

「転勤してきた校長が『この学校は自分でお茶をくむのかね』と言った」

「お茶くみは女性がやる。女性がいない時は一番位の低い男性がやる。これは階層の問題だ」





「お茶くみを拒否する、すると他の女性がやってしまう。結局同じ女性がやってしまうのだ」

「若い男性に、特に自分の湯のみを自分で片づけることができない人が多いように思う」

自立し、共に生きていく、そのためにここに集まった人たちは、お茶くみは女性の仕事と決めつける性別役割分業をまず否定しようと考えた。ところが、社会（職場）の中の定められた位置で、その歯車の一つとなった方が「うまくやっていける」。そうして生じてくる集団との調和が私たちが求める「共に生きる」状況とは違うということ、主張しうるだけの実践

を、自分が、日々の人々とのかわりあいの中で本当になしえているだろうかと考えます。

家事育児の性別役割分業

女と男が一緒に暮らす中で、役割を固定化させる要素に、大きく二つあることが、参加者の話の中で指摘されました。

一つは、家事のうち単なる単純作業とはいえない食事作りのことです。

「食事作りは共に生活していく中で相手を喜ばすという点でとても大きな意味をもつと思う。これが役割分担上とても大きな問題となる」。

「夫は、食のことはやらないが、他はうまくやる」

食事作りに関する男性側の教育訓練の欠如が問題であり、つれ合いに調理学校に通ってもらおうという発言もありました。

さてもう一つは、妊娠出産に伴うものです。妊娠出産の際の負担が男女で異なることは、生物学的に当然です。しかし、妊娠出産、そしてその後の育児に男がどうかかわっているのか、多くの男たちはそのための規範をもたないように思えます。そしてその全精力を仕事にからめとられていく、男も女も個々の状況の中に閉じ込められていく重大なきっかけといえそうです。

学校教育における男女差別

教員は口では「男女平等」の建て前を言う。しかし私生活での実践はほど遠く、生徒たちに真実の男女平等の姿を教えられない。女生徒にそのもてる能力をすべて發揮させうるような指導ができていないのです。地元御殿場から参加した高校教員が、

「学校と家では言っていることやっていることが自分は違う」。その告白をその場に参加していた教員たちは、どのように受け止めたでしょうか。

高校三年の女生徒が、「男女の賃金差別について知りたい」と発言していました。しかし、彼女が求めた答えは、この話し合いでは出されませんでした。女性としての権利も、労働者としての権利も学ぶことなく、ただ「いいところに就職したいなら、こんな成績ではダメだ。どんな資格をもっているか」「上（企業）には逆らえないのだ。上に望まれるようになれ」といわんばかりにたたき込まれる。これが就職指導の現状だと思います。企業が求める女性像をたたき込むための教育訓練（マナー教室など）が、最近あちこちでなされているようです。そのためのテキストめいた本もベストセラーになっていると聞きます。今まで企業が重宝に使ってきた「女性らしさ」が最近失われてきたためだといえます。

生きる糧をうるために、現実には順応していく、建て前としても一応男女平等だと教えられ、信じてきた女生徒たちは、挫折するか、洗脳されるか、それでもしたたかに生きるのか、女も多くの男たちのように魂まで売り物にしていく。その岐路に立たされていると思えます。少なくとも学校では、「就職に有利だ」という言葉は使わず、よりよく生きるために考えねばと思います。

なぜ結婚するのか、婚姻制度とは何なのか

「一人歩きの会」の神崎さんが「なぜ結婚するのか」という問題提起をされました。正直なところ意表をつかれた思いでした。その場に夫婦として参加しながら考えたこともないことでした。神崎さんの発言に共鳴するように、他にも数名の方々が婚姻制度に対する疑問をなげかけました。

「男に都合のよい社会であることは否定できない。結婚によって男は甘えてしまえ」

「結婚によって女性の覇気がなくなるのを感じる」

「婚姻制度は売春制度をひき継ぐものだとすることに目をつぶれない」

「結婚によって男は権力的になる」

そして、「結婚は卒業した」という発言もありました。

結婚前の女性は結婚に対して幻想を抱いているとの指摘、

私もそれは事実だと思いません。しかし、

「好きな男に対して『してあげたい』そうすれば自分もうれしいということがある。自分のやっていることは何だろう」男に対してであれ、女に対してであれ、自分を犠牲にし、相手のためになり、自分も満足する。そういう感情は否定できないと思います。その意味では、

「自分がしてあげれば、相手もしてくれるのでは」

という楽観論もわかるような気がします。しかし、それが幻想といわれるゆえんは、結婚を個人レベルの問題としてしかとらえていないからでしょうか。社会とのかかわりを考えず、恋愛と同一視しているからでしょうか。

「住宅ローンの支払い口座を妻の通帳からひきおとすよう、指定してあったのだが、いつの間にか、何の連絡もなく夫の口座からおろされていた」

「子供の学校から持ってくる書類の保護者欄は、いつも父親名が入る」

社会は、日常の細々したところまで、夫の役割、妻の役割を分別し、二人の間に土足で踏み込んでくるものだと考えさせられました。

男たちは何を語り合っているのか、

仕事とは何なのか

「差別されている側の女たちは、何でもさらけ出して話をし

ている。男の側は地に足をつけた話をしているのか」

そんな問いに対して、元サラリーマンの平井さんは、「サラリーマン時代、月二〇時間は残業をしていた。その時は仕事がおもしろくてしかたがなかった。たまに友人と飲む機会にうちの話をすると、『酒がまずくなる』といわれた」と話しました。彼は転勤の話がでた時、妻や子に「おとうさん一人で行って来い」と言われ、仕事をやめる決心をしたそうです。「おもしろくてしかたがなかった」仕事をやめる、ということ、相当な覚悟であったろうと思うし、実際ドロッパアウトした彼に対する周囲の風当たりもきつかったようです。しかし、彼はやめた。そして前よりは人間らしく生きていけるだろうと思います。

今「仕事がおもしろくてしかたがない」まさに仕事中毒の男たちを、どうやって当たり前の生活にひきもどしたらよいのでしょうか。男たちの執着する仕事の中身は、かつての労働の中にあつた互いに支え合う喜び、人間らしく生きることの充足感を与えるものでしょうか。女と男のかかわりあいをこれほどまでに歪めながら――。

二時間という時間の中で、多くの問題が提起されました。個々について十分討議を深めることはできませんでしたが、自分自身の生活をふり返り、日々の実践はどうあるべきかを具体的に、鋭く突きつけられたと思えました。

「親と教師の部屋」で

植垣 一彦

私にとって夏の唯一の研修であった「84 We夏季フォーラム」も終わりひと息ついていた頃、八月十五日付（から四回分載）毎日新聞「教育を追う——『改革』私の意見」欄に、半田たつ子さんへのインタビュー記事が掲載されてあるのを親しみを感じて読んだ。半田さんの後は、基調講演で伝統社会の民衆の生活文化を家庭科に繰り込むことを力説された小沢有作さんの「意見」が掲載され、時期を得た絶妙のタイミングとその取り合せに、酷暑の中ひとりうれしかった。

その半田さんの三回目のものは、家庭と学校のありように焦点が絞られていて、「親と教師の部屋」で語り合った余韻にそっくり重なり合い、とりわけ興味深かった。

たとえば、「ちよっと変だなと思うことには異議申し立てができる個を学校でも家庭でも育てなければなりませんね」という管理教育への抵抗姿勢には、「まさにその通り」と思わず相槌を打ったのだが、さすがに、「親と教師の部屋」に集まった人たちにとってそうした異議申し立ては前提であつ

て、むしろ、その後の展開の困難に対する苛立たしさが多く語られたといっている。

参加者十三名。便宜的に「親」と「教師」に分けるとすれば、親四名、教師九名（うち親でもある人六名）。

翌日も同じ「部屋」が設けられることを考慮して、まずは自己紹介を兼ねて交流をという具合に会は進行した。

自己紹介は、親は「対教師体験」とでも言うべき具体的な事例を語り、教師の方は「対親体験」といったようなこれまでの関係を披瀝する、という方法が採られた。

まず進行役の植垣が、クラスのお母さんたちと子どもたちの支援のもとに不当な担任外しを撤回させたという数年前の貴重な体験を紹介することで、口火を切った。

植垣は、こうした体験や現場実感から、学校内部の体たらくぶりにある種の悲哀を感じつつ、変革のエネルギ



を真に担うのは親と子どもたちなのではないかという提起を試みた。

静岡の県立高校家庭科教師の尾栢米子さんは、学校場面上における生徒の姿を親と共有するために、「ホームルーム通信」というものの発行計画を表明し、一方親の立場として、娘さんの通う小学校の管理的な面にホトホト参っているが打開への取っ掛かりがつかめない、という悩みを語った。

「フオーラムの爆弾男」の異名を持つ(?)横浜の塚越さんは、子どもたちへの温かいまなざしにあふれる学級通信「ゆりかもめ」を媒介にして親たちとホットな関係を保持していることを語り、彼の人柄をも忍ばせてくれた。

これらふたりの「通信」をめぐる取り組みは、さきの半田さんのインタヴュー記事に則して言えば、子どもことは「双方で補い合うのが一番いい」ということの実際化であって、親と教師を結びひとつの確かな方法として示唆的である。

ただ、その「通信」には、次のような課題をも負わせておきたい。それは、「通信」を通して親と教師が子ども認識や学校認識をどう変えていくのか、という課題である。これは、自分の実践の無意識の合理化という「通信」の陥りやすい傾向から自らを峻別するためにも、自覚的でありたい。

東京の山田則子さんは、彼女の妹のお子さんにふりかかっ

た「学校事故」について語った。担任教師の対処の緩慢さと学校側の不誠実ぶりは、高校教師という自らの立場の目からは決して視えなかった、と彼女は言う。

たとえば、家に帰って初めて骨折に気付いたというような話をしばしば聞くが、トラブルを回避するためのセコイ下心からでは決してなく、「事故」への対応はそれがどんな些細なものであれ、わが子に対するごとく誠意を込めて心を配りたいものである。

静岡の福室秀子さんは、商業高校実習助手としての視点から、教師集団の覇気のなさやその身分に安住する怠惰ぶりも率直に語った。さらに、不安定な「助手」の身分の問題についても言及する心積りであったのだが、時間の都合で果たせなかった。この場を借りてお詫びしたい。

小学生のお子さん二人を持つ東京の青木喜代江さんは、ウイ書房の編集を手伝う傍ら、地域のこども文庫活動にも熱心である。その文庫に知り合いの教師を招いて話を聞く企画を立ててはみるが、「人さまの前でお話だなんてとんでもない……」と拒まれてばかり。教師の事大主義がどうにも解せぬと語る。また、「算数のここがわからない」という子どもが厳然といる事実を前にして教師はなぜ救おうとしないのか、という疑問も青木さんは持ち続けている。

東京江東区でこの四月から初めて障害児学級の担任をして

いる鈴木まき子さんは、教師生活十一年間の中で、最も充実し、最も緊張し、そして最も感動の多かったのがこの一学期だったと振り返った。蚕の世話をする中で言葉を増やしていくひとりの子ども成長を、その子の親と共に涙して喜び合う彼女は、「ここに本当の教育がある」と熱っぽく語ってくれた。

自己紹介も半分を回ったちようどの頃、それまで知っているコトバを懸命に拾っておとなたちの話に聴き入っていく尾栢さんのお子さんは、さすがに睡魔には勝てず、お母さんの膝の上でスヤスヤ。

埼玉で高校の非常勤講師をする仲西香さんは、息子さんの通う中学が、マスコミでも取り沙汰されたことのある「問題」校。ところが、「問題」なのはどうかやら教師の側のようで、「これが先生か!？」と疑いたくなるようなことに多く出会った、と語ってくれた。この仲西さんの感受は、「先日、テレビで管理教育の実態を見ましたが、戦時中に私たちが受けた軍国主義教育よりひどいものでした。これが民主主義社会での義務教育かと目を疑ったほどです」と、さきのインタヴューで半田さんが指摘するのと恐らく同質のものと思われる。東京の中野敬子さんは、転勤多く、そのためもあって教師と特に深い付き合いはしてこれなかった、と控え目な報告。しかしその裏は、「深い付き合いに値する教師なんてそうザ

ラにはいません」という教師への鋭い批判とお見受けした。

埼玉の錦真理さんは高校で数学を教える。この日の彼女は、小学三年生のお子さんの通う学校への異議申し立てでパワ―全開。集団登校や生活点検の問題など、個人が潰されていく集団的規律という名の怪物に対して、あるいは「一斉にそろふこと」の美学（半田さんのインタヴュー）に対して、彼女の申し立ては鋭く迫る。ところが、これらの問題点を学級懇談会などで指摘すると、「お陰様でうちの子は良くなりました、問題なのは錦さんあなたの方です」といった手合のオベンチャラさんが必ず出てくる、と憤まんやる方なしの彼女。

かつて私どもは、確かに隣近所の上級生や下級生たちと群れて学校に行った。そしてその群れは、日常的な遊びの群れの延長であり、共同する必然性を持っていた。つまり、日常的な群れがいわば集団登校を自然に保証していたのであって、決してその逆ではない。しかるにこの集団登校というやつは、タテ集団の教育的有効性を語りつつ、その管理的発想はスケて見える代物である。学校やおとなたちの「やらせ」からは、弊害を生みこそすれ、本物なぞ生まれぬことは自明に属する。

「無意識に行われていた」ものと、「学校で意図的にやられ

たものとは性格もだいぶ違います」と、半田さんがインタビューで述べていたのはここでも合点がいく。

錦さんのこの報告は、次の静岡の定時制高校教師竹内康人さんによって、さらに一般化して受け継がれた。

竹内さんは言う。学校という所は管理的なことをやることでしか集団づくりをしていない。なるほど集団づくりの一定の必要性は認めざるを得ない、とすれば、集団づくりに付きまとう管理的側面というのをどこまで許容しどこから許容しないのか、この兼ね合いがなかなか難しいではあるまいか——というように。

彼の本質を外さぬ物静かな語り口は、参加者をつっかり魅了し、「次の日も「親と教師の部屋」にきつと出てね」との熱い要請を受けたほどであった。

東京の蔡和美さんは、「夏休み中も続けるべし」というお子さん二人の学校の「生活点検表」に頭を悩ましていた。私もそのコピーを見せてもらってひどく驚いた。

ウンチを「朝した」ら2点、「その日のうちにした」ら1点、「しなかった」ら0点、といった按配に点数に換算し、十項目ほどの合計点を毎日記せというのである。さっそく彼女は、納得いかぬ旨の手紙を担任に書いた。担任からも即返事が来た。当然のことだが、「何が何でも出せとは言えない」

とのこと。それならそうと、配布する時点で、クラスの子どもたち全員にその旨を言うべきであろう、と私などは考える。幸い彼女は、担任と友好的にこの問題をめぐる考え方の違いを交流できたのだが、「教師に物言いすることの勇氣は大変なものです」としみじみ語った。

それにしても、ウンチの色や形まで「点検」する学校もあるそうだが、待てよ、汲み取り式トイレの場合どうすんのかな。いやはや、まことにクサイ話ではある。

このような蔡さんの話を、ひとつひとつうなづきながら聞いていたのが東京の松本法子さん。彼女のお子さんの学校にもやはり「生活点検表」があるという。彼女は、お子さんがジワジワと学校枠に縛られ、学校の色合いに変色していくのが恐い、と語った。くつたくな自分の生活スタイルと流儀を持つ彼女にしてみれば、わが子が学校によって次第にスポイルされていくのを見るのは、堪え難いことであるに相違ない。

だいたい以上のような自己紹介を基調にして、活発な中にも実になごやかな交流が行われていった。私たちのこうした議論を聞きながら、尾栢さんのお子さんは夢の中でおそれなく、「肝心なことは、「大人の考えを子どもに押しつけないことです」(半田さんのインタビュー)と呟いていたに違いない。



二十一世紀の男と女の関係

——役割分業のない社会って——

武田恭子さん、武田憲幸さん夫妻の司会で始まった。参加者三十四名。

最初に、中嶋さんより、今回の分科会へむけて寄せられた、「男女の役割分業のない社会とは？」というテーマで十名の方に書いていただいたものの要約がされた。レジュメを書き寄せて下さった人も、この分科会に参加された人も、まだ、世界中どこでも実現されていない性別役割分業のない社会に、夢を馳せつつ、しかし、そういう社会を創

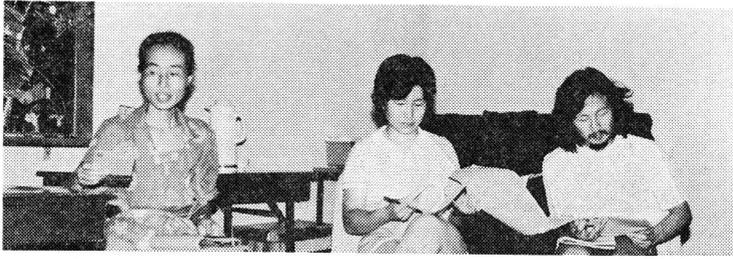
って行く担い手である自分を感じながら、一人一人の持つて来た、悩みや体験や主張、試行錯誤をぶつけ合った。

I 「食」をめぐる

まず、役割分業を克服して行こうと努力する過程で、一番の壁は、食事、である。他の事は分担できても、こゝと食事をつくること、においては、なかなか男性の主体的協力が得られない、という現状が参加者の間から出て来た。

又、ある男性は、「心の奥では、周囲の家庭と比較して、オレは、ずっといろいろやってやっている、という意識がぬぐい切れない」という正直な言葉を漏らされた。





そこから話の輪が広がって行く。

「私は、冷蔵庫の中身を何にも心配しないで出かけられるようになった時、ああ、うちのお父ちゃんも本当に自立してくれたんだな、と思った」という方は、「やってやっている、という意識では、まだ役割分業意識から自由になっていない」といって、「男性も、愛する妻のための弁当(愛妻弁当)をつくっても良いのではないか。同じように子供たちも」と。

続いて、「アレを買って来い、コレをやれ、と命令されてやるのでは、子供と同じ。これでは悲しくありませんか? 言われる側もおもしろくないだろう」と批判の混ざった率直な疑問が出された。又、料理を作るにしても、壁に貼られた「今週のメニュー」に沿って、材料のちゃんと用意された中で作ったり、添加物のいっぱい入った加工食品にちよっと手を加えるだけの料理では、本当に「食」を担っていると

はいえないと思う、という意見も出た。材料の算段から、調理、後かたづけと、一連の仕事を主体的にやってもらわないと、女は却って大変になる、とも。

これらの意見に対して、カップルで参加された男性は、「食事に関して男性が主体的にやることは、そんなに難しいことではない」と。彼は、まず、二人の職業が比較的、時間に縛られないものであり、子供もまだいない、という好条件の元での生活であることを断わって、「今のところ、食に関してもうまく行っている」といわれる。そして、相手の疲れた表情や、出勤前何分、という時間に合わせて、食事や弁当を、それも内容の充実した(!?) ものを作っている、と。

どれだけその人が、「食」について主体的に関与してゆけるか、は、男であろうと女であろうと、「食べることにどれだけ食欲か」「関心が深いか」にかかっている、と。女の人 はやり過ぎ。それが、男性から食事の練習の場を奪っていることになる、と。

男性に主体的に料理を作るようになってほしかったら、女性 が、じっとがまんして作らないこと、が一番近道である。冷蔵庫をカラッポにして、自分はこっそり何かを食べながらがんばって、断固として作らないこと。すると、「先におなかの空いた方」が、必ず作り出すはずである、と。「大人の男が、食べ物を作れないことは、決して、ない!」

そういう中で、男性が料理を作り始めた時、大切なことは、女性は、すぐ食べること、と褒めること、喜ぶことである、と。又、後かたづけも、少々きたなからうと臭かろうと、目をつぶって手を出さないこと。「先に手を出した方が負け」である、と力説される。

しかし、カツコイイことをいいながらも、彼自身、心の奥では、「特殊な行為をやっている」という意識からまだ自由ではない、といわれる。又、女の方にも、「領域を侵されている」という意識が根底にはある、という声も出た。

同じく男性から、以前は義務としてイヤイヤやっていたので、いつまでたっても料理が身につかず、女房も文句ばかり言っていた、と。しかし、今は、自分がおいしいものを食べたい、と思った時に、一生懸命作るようにしているので、少しずつでも、自分の料理が定着して来た。期待していないので、相手はその分、うれしい声をあげる。そういうことを、お互いにやり合う中で、主体的に「食」にかかわって行けるようになるのではないか、と。

以上から難しい、といわれる「食」の問題。しかし、一人が自分自身の中に潜む役割分業意識と対決し、自ら解き放って行こうと、生活の場で試行錯誤を繰り返す中で、光も見えて来るのではないか。男性に家事をやらせること、が目的ではない。男女共、本当に豊かな生活の主人公になる為

の、それは手段である。

又、大学で男の生徒さんに、料理教室を試みた、という女の先生は、それが好評で、男性も料理を作ることが好きだと分かった、といわれる。これは、男の側からいうと、「生活教育を受ける機会から疎外されている」ことになる。家庭科の男女共修をすすめる運動をはじめ、男女いっしょに生活力を体得できる機会を、社会的にもっと広くもっと深く、張りめぐらせましょう、と。

Ⅱ 労働問題をめぐって

役割分業を克服して行こうと、カッパルで努力する時、避けて通れないものとして、男性の働きバチ的過剰労働の問題が、大きくクローズアップされて来る。司会の武田さんは、「夫の仕事が教師など、時間的に比較的恵まれている場合は、家事育児を協力できやすいが、利潤追求を第一の目的とする一般企業の場合、非人間的に働かされている男性の労働状況を抜きにしては、考えられないのでは？」と問題を進められる。

そこで、「ハイ」と手をあげた女性は、二人で全て、半・半で分担し合う生活の中で、子供を産むことを決心し、引き続き育児も半・半でする、という時、夫の方が仕事を辞めなければ実行できないと分かった、という。それで、「彼は仕

事を辞めた」と。この場合、彼に、この仕事でなければ絶対イヤだ、という気持ちがなく、又、立身出世を人生の目的とするような価値観の持ち主でなかったことが、それを可能にした条件であった、と。

彼女たちには、明らかに経済的安定より、二人で充分仕事育児にかかわる時間を大切にすることによって、本当に豊かな楽しい生活をつくりあげて行こう、とする真摯な選択が見える。それは、二人の間での長い時間をかけての、話し合い（時にはぶつかり合いも？）の中で、生まれて来たものである。

彼女の体験を受けて、「二人があつて、仕事がある」という考え方が大切である、という意見も出された。「仕事があつて、二人がある」という現在の一般的な生活では本末転倒である、と。二人の愛やかかわりを中心に、二人で何を育てて行くか、を問題にしながら、柔軟に仕事の条件を変えて行く姿勢が大切である。経済的に一見豊かで快適な生活より、生活の中身や質を大切に、そういう価値観に、私たちは頭を切り換えなければいけない時期に来ている、と。

それにつけ加えて、「そういう生き方をすることは、出世コースから外れることだから、少々の生活のレベルダウンを覚悟しなければやって行けない厳しいものである」という声もあがつた。

ここで、パートナー（男性）が、育児のために仕事を変えた、という例について、若い人たちはどういうふうに受け止められたか、という司会者からの質問が出された。

それに対応して、夫が仕事をかけがえのないものとしていた場合、いっしょに住むことを崩してもしかたがないのではないだろうか、という意見が出た。又、「何を大切にするか」という時、男の人の価値観が勝つてしまう現実がある、とも。「父が企業人間であることで、その恩恵をたっぷり受けて育つて来た」といわれる若い女性は、「それゆえ、今の豊かな生活を守るために働く、という意識が、まだ強い」と正直な声。

又、少し年輩の女性は、長い間男女平等を目ざしてやって来たが、夫の方が生活に合せて職を変えた、ということを、「それは私たちの世代ではできなかったこと」として、「進んだものだなあ」と喜ばれる。

「仕事を辞めないで続けて行くことを大切に、その方向で努力する必要があるのではないか」という意見も出て、「生きがいを持って働くことと、時間的制約について工夫して行くべきだ」と。同様に、「男の人も職場で、子供のことなどを話し合える場づくりが必要であろう（前日、平井雷太さんが子供の話をして、〃酒がまずくなる〃といわれたことに関連して）」という声。組合でも、婦人部だけの問題ではなく、

男の人も共に考える大切なことである。労働時間を減らし、内容を点検し、自分を生かしながら楽しく仕事ができるような状況をつくって行く必要がある、と。

又、ほんの一握りの人たちであるが、男性の側からも、育児休暇を！という声をあげて、運動を始めている人たちがあり、頼もしい限りである、という報告が出された。「自分たちの労働の中身に満足しつつ、育児休暇もとうとうとするささやかな闘いが出て来ていることに、一筋の光を見るようだ」と。

Ⅲ 展望

話は、役割分業にとらわれない新しい夫婦の形、男女のかかり方へ、と進んで行く。

そういう中で、「自立して一人になって、老後まで考える時、家族と同様、又はそれ以上に周囲とのコミュニケーションが大切になって来る」という意見の女性は、「夫婦関係において、常に『他人である』ことを意識していないと、つい甘えてしまう。依存心を克服するためにも、対等な人格同士である、ということをや女の側からも厳しく実践して行く必要があると思う」と。

又、「家庭って何？」「夫婦って何？」と常に問う中で、そのあるべき姿を二人で模索し、創って行くべきであろう。愛

し合う同士が、二人で何を育てて行くかをこそ問題にすべきである、という意見も出た。

最後に、「経済的な価値観からでなく、生活の本当の質を男女で考え直すところへ来ている」「生活の質を問いつながら、社会と闘うことが必要。その時、男女はお互いの大変さを分かち合い、支え合いして、その輪を拡げて行くこうではないか」「男女が共に手を取り合って、たち向かうべき相手は、強大なものであるので、まず両方の意識のギャップを埋めるためにも、是非、今日のような集会へカップルで参加すべきである。つれ合いや仲間や、同性にも何回もあらゆるチャンスを見逃さず、働きかけて、『We』の運動を、もつとしっかりと根を張った大きな波にして行きましょう！」と数人から口々に、『まとめ』が出された。

二十一世紀は、私たちと私たちの仲間のものである！！

(まとめ・平井和子)

参加して

◆教師の甘さが目につきました。労働時間が長すぎて、家事の分担などたとえしたくても出来ないというキビしい都市労働者の置かれている状況を、分かっているみたいですよ。先生方って。

教師同士のご夫婦には、毎日帰りの遅い夫を持ち、子育てに一人ガンバツている母親なんて実感として全く分らないみたい。同じ先生でも夫が企業に勤めている人は、よく分かかって下さったようですけど。

『妻たちの思秋期』なんて、若い教師の皆さんには全くお呼びでないようですが、でも子供たちの置かれている状況を理解する上で、母親の、夫婦の、日本の今の社会のキビシさを知る必要があるんじゃないかと思うんだけど……。子供かわいいだけではもうやってい

けない。「青年心理学」だの、「教育原理」だの教師たり得る時代ではもうとっくになくなってはいるはずなのに、一年間の育児休業や夏休み、冬休みなどで、比較的時間の余裕のある先生方に、今の競争社会のスサマジさを理解しろと言う方が所詮無理なんでしょうか？

今回は周囲に教師以外の人が少なかったためか教師批判になってしまいました。それに会場準備の都合上からも会場を二〜三年とか一ヶ所に決めて下さると、行く方も準備する方もやりやすいと思うのですがいかがでしょうか。(何にもお手伝いせず、従って準備の舞台裏を知らないの言いたい放題言わせていただいています)東山荘は本当に素晴らしい。食事が手作りでおいしかったことも、大感激したことの一つです。来年も同じ場所に是非して下さい。

教師の視野の狭さ、度量のなさを改めて感じさせられた今回のフォーラムだったので、こんなことなら、はじめから親と教師が本音を語り合う分科会に出ればよかったなんて考えてます。どのテーマも一日や二日でとても語りつくせるものではありませんから、来年も又、どうかこの続きをよろしく願います。

す。(東京・蔵合里子)

◆いろいろな分科会に出たかったのですが、残念です(「性別役割分業」の分科会・交流会のみに出ましたが、それがおもしろくなかった、という意味ではありません)。

性別役割分業(観)の廃棄に向けて、一つ思うことを書きます。働くことを楽しくするのは、その個人にとつての仕事の中身を楽しいものとする、と同時に、職場の中で個人だけでなく、その職場に働く者、みんなにとつて、楽しい職場をつくること、でもあると思います(あたり前のことですが)。このことと、個の生活のレベルで、男も女も、共同生活を楽しく生き生きとしていくこととのかわりをどうつけるか。個の生活を生き生きと楽しいものとするに比重がかりすぎた場合、その人にとって、働くことは生活の資をかせぐだけの手段にしかすぎなくなりません。いわば「分断された孤独な稼ぎ人」です。もちろん、地域の中で、仲間たちと様々なサークルを通じて、その人の「生の発想」は可能ですし、するべきことですが……。働くことを、先に述べた意味で楽しくすること、そのとりくみが同時に行われるべき、と思

ます。性別役割分業（観）の廃棄とからめて言えば、個の生活を家事・育児に十分にかかりつつ生きる男女が、「楽しく」働ける職場をさらに拡大していくとくみが必要では？ と思うのです。

（静岡・武田憲幸）

◆役割分業の分科会に出ました。もちろん、すばらしい意見たくさんありましたけど……何か足りないような気がしました。愛が足りないんじゃないかな……と思いました。

たとえば仕事に自分を合わせるのではなくて自分に仕事を合わせることを考えなければならぬ、というのは、そのとおりでと思いきいけれど、みんなは、自分については全く考えていないのではないかしら。男性側に対して要求するばかりのような気がします。今まで女性が受けてきた差別を、男性にしてやろうというような考えなのではないか、という気さえます。もともと男と女にこだわらなくてもよいのでは……？

家庭の中で、誰かが食事を作るのを待っているというのは、本当にどういことかしらと思えました。まるで何もできない夫を教育するというイミではよいと思えますけど、父

母妹自分の四人が誰もつくり始めないというのは、まさしく愛がないこと。お互いに思いやる気持ちがあるんだったら、男女に関係なく、自然な形でできるのではないでしょう。甘いかしら？

（一参加者）

◆分科会の報告の中で、中嶋さんが、平井さんの「相手に対して何も期待しないし、相手もこちらに期待しない。たまに相手がごほんの用意でもしてくれようものなら、もう感謝激雨アラレ……」という言葉を紹介され、フォーラム中最も印象に残った話の一つです。私はそれを聞いた時、一瞬「期待しない」の逆説的言い回しに感じられてしまい、表現のサッパリ具合とはウラハラに、かえってどろどろしたもの思い浮かべてしまいました。みしく思ってしまったのです。

でもこれは、直接にその方のお話をお聞きしたわけではありませんので、私が一方的に判断をすることはできませんね。チャンスがあれば、直接その考えをお聞きしたいと思ったことです。立ち向かう何ものかがある時、避けてまったく反対側へ行くのは、一つの方法ではあっても、考え方によっては、さみし

く安易なしかたではないのか……と思うし、真の解決法とは思えない部分があると思ってしまうのです。

読者会なんかがあれば、一年に一回などといわずに、そこにいるんな人たちとお話できるんだなあ……と思ってしまった。

群馬にも作るーか!?

それとも埼玉での会にイソソと参加しましょうか。ちよつと本気で考えてみる価値ありそおだ……。しかし、できるかなあ？ ああ、近くに会のある人はいいなア。

（群馬・加藤由美子）





親と教師が本音を語り合うには

私ごとだが、姪が体育の時間に首を打ち、三カ月の入院生活を送っている。事後の処置のまづさに加えて、保身と自己弁護に汲々とする校長と担任。話を聞いて、ムラムラと怒りがつき上がってくる。その怒りの大きさに我ながら驚き、親ならば、なおいっそうの思いであろうと思いやった。それまで私自身、おずおずと手探りで探ってきた生徒の親との関係だが、子に対する親のおもいは、教師のそれとは異質なのだと思感した。

さて、そんな思いでのぞんだ「親と教師が本音を語り合うには」の分科会。親なる人十人、教師七人、保父一人。親と教師をかねる人四人なので、総勢十四人。「自分の子供の教師がここにおるんだったら出せないけど、おらんだから、やっばり本音出したいナー」「出してヨー」で出てきた親の本音のいくつかを。

群馬の加藤さんは、子供の入院で入学式に欠席。前もって校長に電話連絡したのに、スカートと忘れられていて、クラスも決まらず、連絡もなし。担任が病院まで来て言うのは「親がもつとこまめに連絡していたら」。学校に手落ちがなかったことを強調するばかりで、謝罪の一言もない。こちらは頭にくるけど、目の前にいるのは、これから世話になる教師本人。ぐっと押えて「よろしくお願いします」と言ったものの、腹がたって仕方が



ない。教師が帰ってから、教育委員会に、どういう指導をしているのかと訴えた。子供人質論。あれじゃ、子供がかわいそうだから、自分の子供を守りながら先生にも言いたいことを言う、先生とも仲よくやることを考えて努力しているとのこと。

兵庫の河上さん。子供を保育園に預けて、もつとこうした方がいいのではなど、本音を出していった。そしたら父母会などで私の人格や親としての資格まで否定してくる。「本音を出したらアカンのかな、というのが今の私の気持ちだけど、しかし、教師として言ったら、本音で親と接していきたいと思つて。ほんまに教師というのは、ものすごい権力持っているんだということを、初めて身をもって知ったわけです。教師を続けている限り、権力を持ち続けてしまうのだから、うけど考えていきたい」と提起。

自称、PTAの玄人の石川さん。子供が目の上を二針縫う傷で、学校安全会の給付を受けることを要求したが、学校事故0運動のさなか、安全会届出を避けたい担任とぶつかる。事故0の記録か、子供が大事か、いったいどっちなんだって気持ち。結局は安全会に届けさせてもらったが、そのしっぺ返しか、転校先に、ほとんど白紙の要録が送られたとのこと。内心いぶかしんでいた新任の先入観を、たまたま子供が自分の力で覆せたからいいようなもの、後で知り恐ろしくなっ

た。親の仇を子供でなんて、ひどいじゃないですか。

親の話は、本音というか、怨念がこもっているようで、怒り、うらみの域に達している。ことに、学校事故は教師と親の立場の違い、教師のあり方が最も明らかになるものだろう。「子供の命を安心して預けるには、今の学校の体制では不信がある。後は教師の力に頼む以外ないが、それも人によって違う」と特異体質の子をもち、教師でもある鈴木さん。

「安全会の届を出さなかったのは、管理体制のためだろうが、出そうと思えば出せたと思うな。教師は他から悪く思われたくない気持ち強いが、特に上に対してはね。そこを突破しないと、何もできないと思いますね」と塚越さん。

「植垣さんは、事故の対応がうまいって言ったけど、どうするの?」の質問に、「問題は、その人と誠実につき合うしかないと思っているから、そのつど誠実にやっている。先生、もう心配しないでいいですよと言われるくらい」

「主任がいるとか、学年主任の観察中とか、そういう管理体制の結果だと思うが、子供にツケが回つたらたまらないって感じ。親の方は、事故で教師の責任問うなんて本音でないよね。事故は必ず不注意でおきるわけだし、たまたま事故につながつたということ。教師には事故の扱いに責任感じてほしいと思うの」と石川さん。

学校体制の不十分さを、教師の努力で補うしかない現状と

管理体制のもと、子供への自然な思いをゆがめられた教師と親の思いがぶつかるのも当然だ。教師自身、管理の力をね返す努力の中から、親とむき合えるのではという気がして行く。またしなければならぬとも。

子供のことを考え、正義感ゆえに、不満や怒りをつい教育委員会や校長へぶつけてしまうが、そうしたことがきっかけとなって、現場では教師の自由がなくなり、管理体制が強まることがあると指摘する竹内さん。「教師個人の問題か、学校体制の問題か、はっきりさせて対応を考えていくべき。教師個人の問題については、校長に言うより親が担任につき上げながら、教師を変えていくべきだ。でないとなれば若い教員が本当の意味で力をつけるのに、非常にマイナスになると思う」

石川さんは、「私が学校名出して自分だけ匿名で教育委員会へ電話かけていけば、私の子供がやられたことと同じだと思いのね。それがどう動くか、わかっているから」

「教委とか校長がなんか言っていて、ひらの教員がなおしたとしても、ペコペコするのに限って、怒られたから、文句言われたからとその場だけ上手にやる。それより直接、親に言われると、クソツと思ったりもするが、その課題が持続するんだよね。やっぱり何日か、考えますよ。あそこの親に言われたから、畜生、こいつだなと思うか、思わないかは人によって紙一重だけど。親が憎いから子供まで憎いと言ったら、子供

が迷惑。親とけんかすればいいわけで、子供とけんかすることない」と植垣さん。

じゃ、教師は親と本音語っているかということ、

「本音出しているかどうかかわからないけど、僕は自分なりにクラスでやっているだけ。学校がおもしろい、楽しい場所になるように、地でやっているということ。それが僕にとって本音出しているということだよ」の植垣さんに、「やっぱり親は、先生の方針に異議申し立てできないのでは」と声。

「今までの話から見えてきたけど、子供が言いたいことを言える教師は、親も言いたいことが言える教師。教師も子供に言いたいことを言っている。だから親も教師を追求するのではなく、ストレートに教師にぶつけてくる」(鈴木さん)

「子供が本音言うってこともある。〇〇すればいいじゃないって、ボコツと言われて、アーそうだったナと思って、そういう風に子供に本音言われるって気持ちいいね」「文句でないからって、担任支持しているとは限らないわけで、つまり人質論の逆のパターン。親も言うし、子供も言うが、人質論の逆のパターンで支持されていないのかもしれない。そういうことは結局、学校とか教師が、子供や親を本音で語らせないようしてきたことに他ならないのでは」(植垣さん)

「私なんか、本音を随分言っている。当然、親から返ってくることを期待して言っているのだけど、親の方は、いろいろ

考えて言えないんだという状況をふまえて、言わないとね。少なくとも教師は、そういう状況を自覚してやっていく以外ない」(福島さん)

「先生とつき合うのがうまくなかったり、物わかりがよくないと、その分、本音が言えなくなる」「なんでも言い合える関係作って、不満を解消するだけでいいのか」「いい関係ゆえに、本音がそこでストップすることがある」

「いろいろな複雑になってきていて、親と父母の間、随分ひき離れてきているし、親同士もバラバラにされている」

「不満は生徒自身にも取り組ませ、教師もいろいろの手だてを使ってやっていく、でないとな教師も生徒も育たない」など。話題はあちらへ巡り、こちらへ寄りして、延々四時間。そして、

「もう一つ親の本音を言えば、本当に学校が楽しくて、子供が生き生きしていれば、それがすべてだと思いつつ、これからの世の中、生きていくのは大変だなあとという思いがある。社会からはずれていいんだとは思っていないわけよね。二つの考えの間を、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりして、どうしていいかわからない」と蔡さん。

「話を聞いていて思ったのは、子供を思う気持ちでは親に負けちゃうね」「だんだん本音って何かわからなくなってきた。要するに自然にやっていけばよいのでは」の植垣さんのつぶ

やきで終わった。

「教師と親の関係のノウハウを知ることじゃない」という発言があったが、本当にノウハウなんてでてこなかった。親と教師が本音を語り合える関係とは、教師と子供が本音で出会えているかということでもあったんだ。親と教師の関係は、教師と子供の関係にもどってきた。そして本音って、一体、なに？ という問いにもどってきた。不満や文句とは違うはずだ。もつと考えぬかれたもの、根本にあるものを本音と言うのではないだろうか？ 親と教師が真摯にぶつかり合う中で、本音は明らかになるだろうし、その過程で、教師も親も、どこに立つのかを問われるだろう。ことに教師は、自身も管理されているが、教育権力の末端に位置づき、権力の行使者でもあることを自覚して、自分の立脚点をどこへずえるかが問われるだろう。

石川さんの「どうしてなの？」「なぜ？」と問い返している姿勢は学びたい。ものわかりのよい子にならずありのままに、自然に、やっていくしかない。親と教師のつき合いは、「お互い権威や権力ぬき」ってルールができるっていいのだけど、まず裸でぶつかり合う所から始めよう。そこからしか始まりそうもないし、そこから本音も明らかにになり、教師と親のたちむかう本当の敵も、目標も見えてくるのではと思う。この分科会はずうっーと続きそうです。(まとめ・山田則子)

参加して

◆交流会・分科会とも「親と教師」に参加しました。交流会ではそれぞれの本音を出し合ううちに、教師どうしのすさまじい口論になってしまいました。学校の結果す役割など何一つないのではないかとという雰囲気になって。その晩、腹が立ち興奮ぎみで私はなかなかむれませんでした。私自身が教師としてこれまでやってきたことをすべて否定されたような気がしました。原点から再出発するのはとてもつらいのです。それでもめげずに二日目も参加しました。が、とても口が重くなってしまい、その場に居るのさえ苦痛でした。私自身が発言することにより、会そのものにデメリットを与えてしまうのではないかと思ひ、違和感を持つばかりでした。

が、ふり返って見ると、参加して、意見を

遠慮せずに言つて良かったと思つています。紆余曲折を経て煩悶しながらも、最終的には「子どもが自由にもが言える学級」イコール「親が本音を出せる学級」という結論を全員一致で何とかひき出せたからです。その時のみんなの顔とても素敵でした。忘れられません。

さらに議論を交した相手の方と親しくなれたこと。帰途列車で同席したフォーラムの仲間と新宿で夕食を共にし、別れを惜しんだことなど、共に生きる仲間めぐり逢つた喜びで今もなおいっぱいです。

様々な考えを持った人たちが集まり、激しく議論をしつつも、どこかで接点を見い出せるのはWeならではと思つています。今回のフォーラムが楽しみです。

(東京・鈴木まき子)

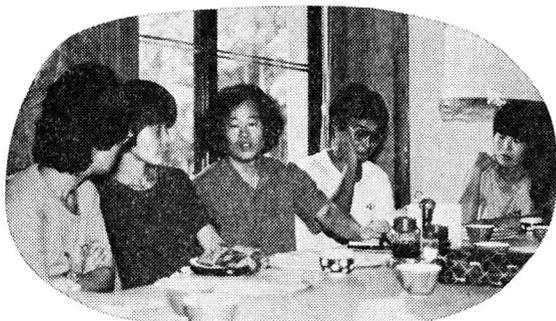
◆私めの出席させていただいた「親と教師が本音で……」の分科会では、わが子を学校に通わせている身なれば、一分の猶予もあるはずはなく、自分でもわからないところの(何)何か具体的なものを聞きたくもあったので、もの足りなくもあり……。

あの時みじめにも落ち込んでしまった私。

でも、落ち込むのも早く、単純構造であれば、また立ち直りも早い私は、結局大切なものは、必要なのは、お互いの誠意だろうと今考えております。

植垣さん、鈴木さんにお会いして、先生の中にも、想像以上にやわらかく暖かいものを持った方たちが多分たくさんいらっしゃる、との実感が湧きました。

(群馬・加藤由美子)





教師と生徒の人間関係を

どう結ぶか

このテーマは、今年三月三十一日の公開ゼミで深められなかった問題で、それを引きついだものだと説明された半田さんをはじめ、司会の加藤さん他八名で分科会を始めました。

まず自己紹介の中で自分のかわっている問題や状況を述べ、その中で出された加藤さんの問題について討議が始まった。

加藤 女子高で一年生を担当しているが、「このようなく

ラスにしたい」ということにすら反発をする子供たちに出会い、まず、生徒のいうことに耳を傾けて、一人一人に反応しはじめたら、生徒はなついてきた。しかし、生徒を甘えさせただけではないか、何かを発展させることがなされているかという疑問がある。また、恐い先生のクラスはおとなしく、自分のやり方では生徒もルーズになってしまうという問題点もある。

生徒との感情的交流を深めるということは甘やかすことにつながるのではないか。また、感情的交流を深めつつ生徒の自立的力をどう養っていけばよいだろうか。

望月 共感は一条件であり、生徒が、今、何を苦しんでいるのかをどれだけわかることができるかが大切





だろう。そして、教師側も、要求として生徒に出し、論争して、生徒が一人歩きできるようにしていきたい。

柴田 それでも生徒の側に立ち切れず、子供の将来を案じて「こんなことをしたら、ますますよくない」等叱ってしまふ。

半田 佐々木賢さんの定時制高校の話で、音楽の授業中にさわぐ子供たちを、授業をきちんと受けたい子供たちのために、喫茶店に連れ出し、話をする。そうしていながら授業の単位を認める。それはまあやさしくもしれないが、喫茶店でダバすることもこの子供たちには授業だ。交通裁判などに一緒に行って対策をあれこれ考え合うことも授業であると佐々木さんは言われる。

共有感情を持たないと何も始まらないから、まず、人間関係を大切にして、それができたら本当の授業をと思うのだが、その前に卒業の時期がきてしまふ、というのだが、このことをどう考えたらよいだろう。

望月 私は「共有感情」が育つまで待たないで、細かく、次々に自分の持っているものや要求をぶつけていくようにしているけれど……。

島崎 中学校で家庭科を教えているが、子供たちは、叱ってもらいたくもある。それで私の場合、納得ができるよう約束事を決めている。

斎藤 小学校で家庭科専科だが、今の子供たちはがまんすることができない。物を与えられていても心を与えられていないという現実がある。しかし、少しでもかかわっていくと、少しずついい人間関係ができてくる。一方で、子供たちが目標とし、要求するものが学校に必要ではないか。

大角 通信制高校で家庭科を教えているが、通信制や夜間の場合は、レポートや出席などが大きく左右する。また、落ちるところまで落ちた子供は強いものがあり、こちらが学ぶ所さえある。

落合 私は学生であり、看護婦もしている。佐々木さんの学校へ行き、生徒たちに、重たかった自分を語ると、生徒たちも話してくれた。教える側が、せっぱつまつたものをぶつけて、「生徒の立場」に立てなくても、「立てないから、こうだ」など、思ったことをぶつけていくとよいのではないだろうか。

藤原 女子商業高校の家庭科教師。教師の概念が固定化し、

生徒への要求が多いと反省している。自分のありのままの姿を出すようにして、子供と衣をぬいでかかわっていきようにしたい。

古澤 中学校の家庭科教師。私は、私を一人の人間として見てくれる人に対しては、何かしら応えたいと思う。それは教師―生徒間でも同様で、深いかかわりのできる人にはそうしていくと思う。管理教育を見つけ出す力を養うことが必要と思う。

加藤 その具体的事例になると難しい。

望月 管理とは何かを分けて考える。例えば、全てを禁止するのではなく、約束事を決めるなど納得させていく。対等に物が言える子供を育てていくことも大切でしょう。そのためにも自分を見抜く目を養わねばならない。

加藤 私の学校でいえば、朝礼は、生徒会がやっているように、形だけであり、生徒の主体意識はない。生徒が爆発しないように、ある程度まではしめつけながら、ある程度までは自由にやらせてる。そんな実態もある。

半田 例えば、東京のある高校では、集会の時、プラカードを立てないと生徒が並ばないと思ひ込んでいる先生たちがいる。

どこまで信じて、どこまで思い切ってやらせるのかだ



が、最初からやらせないところもある。

子供に聞くと、あまり甘い先生は嫌いで、悪い所は厳しく叱る先生がいいと言う。「理解がある」と自分で思っている先生は嫌いと言う。そんな意味では今は、教師のごまかしがきかない時代だと思う。

落合 アルバイト的に、時間つぶ

しのような講師と、必要性を感じて熱心に「これだけは」

という気持ちを感じられる講師とがいて、学生は、先生を見て対応している。だけど、全てが後者のような先生ばかりだと、こちらが息がつかまってしまつて……(笑)

半田 家庭科は授業を通して人間関係を作りやすい教科であるけれど、生徒たちのかかえている問題にどうくいこむ授業をするか。そこにかかわって、生徒が言いたくないことをどうやって引き出すのか。しかし、四、五十人全員を授業にひきつけることはできない。一番ふれてほしくない物を持つ子供もいるはずで、そこをどうしていったらよいか。



加藤 怖くない先生の授業は聴かない生徒がいて、家庭科の

授業もほとんど眠っていた生徒を、引っぱたいでも、参加させたほうがよいのか、そのままにしておいた方がいいのか迷っていたが、三学期の最後に、一年間授業を受けて思ったこと、眠っていた理由を書かせたら、女子雇用の件についてはよく書いていたので、ほめたら、喜んで、少しつながりもてるようになった。

半田 子供は無視されるのが一番つらいと言うので、無理にでも書かせたことは、逆にうれしかったのではないかと、加藤 選択で、私が担当している被服を選ぶ生徒が多いが、

中には、提出をしなくても単位がもらえると期待したり、怖くないからといってテストの時カンニングをしたりするような子供がいる。いつもズルさと抱きあわせて、そんな状況を見ると、うっかりしていられないと思う。

一生けんめいやつて、きちんとすることに結びつくまでには長い時間が必要である。

大角 最初に約束事を決めておくのもよい。例えば、不正、

無断欠席など……。

落合 ある先生は、生徒の意見について、「自分はこう思うけど、そうではないか」とは言わず、「それはいけない」とまず言うので、話ができない。相手を受け入れようと努力して話し合える関係をつくってほしい。

ここで、半田さんから『自立の心理学—コミュニケーションと自立』（BOC出版）より、人間関係を考える場合の理論づけに、と資料が出された。また、加藤さんからは、佐々木賢さんの『学校非行』（三一書房）より、抜粋した資料を出され、それにもとづいて、討議が進められた。

柴田 結論を読むと、納得し、やはりそうなのかと思つてほつとする。管理教育は難しいけれど、最後の部分ならば自分でもできると思う。

加藤 でもそれでいいのかと疑問もある。

望月 管理的にならないために教師の自立が必要になる。本音で生徒に迫るために、自分が自立できているかを確認しながら、実践の中で交流していく。

加藤 真面目に生きてきたけれど、生徒と一緒に嫌な物は嫌といえるようになりたい。

半田 周りが右を向いている時、自分が左と主張する事は本

当の確信がなければできない。自分の正しい判断力を問われる時です。

望月 生徒は逃げたがる子と、自立したがつている子といて、どこかで見つけて自立していくようにしなければと思う。

加藤 一人をおいかけていると、他の子はおおざりになつたりもしながら、試行錯誤でやつていかねばならぬ。

熱っぽく討論がなされ、結論とまではいなくても、充分煮つまった会でありました。最後に、一言ずつ発言した中にそれぞれ自分の目標を述べていたことからも、参加者の満足度がうかがえると思えます。

最後に加藤さんの言葉をまとめとして記します。
—自分自身が自立して、本当に大切なものを貫いて、感度を高め実践していくことが大切ではないでしょうか—

(まとめ・古澤久子)

参加して

◆山百合が咲きにおい、緑の木立の中で新しい仲間に出会えたことは本当にうれしく感謝しています。夏季フォーラムに集って来た方々の個性が私には面白く感じられました。反面接点を持つことの困難さも痛感しました。教師に対して特別な感情を持つ人が多く、何も考えずに普通の意識で参加した私はとまどってしまいました。夏季フォーラムとはどういう性格のものか考えて参加する人はとまどく、書かれた案内だけ見て「勉強になるから」という意識で参加する人(教員)には、私のようにとまどう人が多いと思います。帰つてもからもずーっとこのことを考えてもやもやしています。

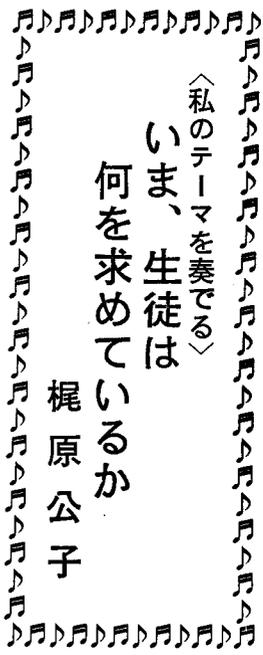
私が担当した分科会は、中心は教師とお話の話し合いになったと思い、いろいろな人が

言っていた「結局は先生たちの集まり」だったと考えると、教師以外の人の接点をあつたという分科会でどのように持つことが出来るのか課題とします。自分に切実な教育問題を教師が語る時、教師以外の人が自分の問題だと感じられるように問題提起し、お互いに同じ線で話し合える方法がまだまだ未開拓なのだと感じます。

(静岡・加藤千恵子)

◆教師と生徒の人間関係をどう結ぶか
司会者がここで話し合いたいものを持って来ていて、そこにいる人たちが、何をここで話したいのかを出し合いテーマを決めていきました。そこに集まった人たちの対等な関係が、そういう行為に生かされていたと思えます。また司会者・主催者の資料の準備も、ピリオドを打つ時生かされて、よかったと思います。

(静岡・望月一枝)



〈私のテーマを奏でる〉

いま、生徒は

何を求めているか

梶原公子

この頃の子供には、ガキ大将がいなかったか、徒党を組んで遊ばないという批判をよく聞く。私も高校生と接していて、

何となく上べだけおとなしいというか、高校生らしい発らつさや個性がなく、みんなドングリの背比べみたいだなあと思う。そして考え方ややる事がなぜかワンパターン。シラケているというより、自分の現在に関する事以外には余り執着しない。シンドイことははじめからしないなど、気になることがある。これらは、子供たち自身が本質的に変化した現象とは思えない。変化したというより、学校の生徒や教師に対する管理態勢により、そのようにさせられている点を否定できない。

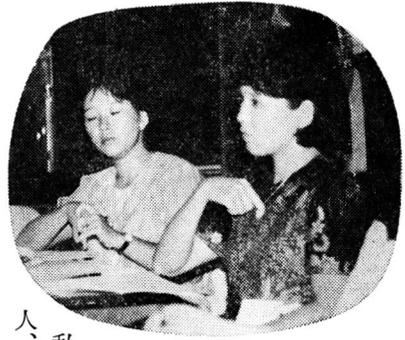
また佐々木賢著『学校を疑う』（三一書房）によれば、高校というものは、昔はすでに労働者であった若者たちが、総失業し、職がないため仕方なく収容されている所だ、という。

確かに十六歳でバイクの免許は取れるし、女子は結婚が認

められる。性的にも成熟を遂げ、体力もあり、自己も確立されてくる。又社会では物や情報が氾濫し、様々な欲求をおおりにたてる。しかし学校ではどうだろう。バイク禁止、アルバイトも規制、妊娠・出産・結婚はおるか、男女交際すら禁止する学校もある。要するに高校生が、法的に許され、心身共に当然可能で欲求関心を持つ事柄からシャットアウトされ、細かな指導によるしつけと、勉強のみに目を向けさせられる。そしてしつけで得た生活態度と勉強とで優劣をつけられる。

私は高校生たちの心にある不満や非行原因の一端は、この辺にあるのではないかと思う。高校生が当然悩み直面し、当然人間として関心を持つこれらのことに真剣に取り組み、考えていくことは、人間の自立に向けて必要なことである。これから極力目をそらせ、高校生らしくないの一言により、一方的に大人が良かれとする教育を押しつける。そんなおしきせの教育の中で、彼・彼女は、一つの抵抗を演じているのでは、と思うことがある。

教師がその教師面と大人の良識を捨て、高校生に一步近づくと時、彼らが何を求め何を考えているか理解できるのではないか。そしてそのギャップを埋めつつ、大人も高校生もよき仲間という人間関係を結べたら、学校はもっと楽しい所になるに違いないと思ひ、このテーマを掲げた。



おしきせの教育

——いま、生徒は何を求めているか——

私たちの分科会は、高校生三人、大学生三人、小・中・高の教員、というメンバーで話し合

いました。後半からは小沢有作さんも参加され、休み時間もとらずに、熱心な論議を交しました。初めに司会者(梶原)から、このテーマをとりあげた理由と、それに関する問題提起がされました。

次に管理教育は、子供の人格をゆがめ、個性をおしつぶしてしまふ。いま多方面から学校を見直し、教育を考え直さなければいけないのではないだろうか、という司会者の発言に続いて、二人の高校生がレポートを発表しました。

A子さんのレポート概要「日頃の学校の規則について、学校のメンツのため、伝統をけがさないように規則を守らされている。規則を守るといいことは良いことだと思ふが、守ら

ない生徒をなぐったり、暴言をはいたりするのはやめてもらいたい。すべての行動が制約されてしまふ。外見のみにとられた規則は必要ないと思ふ。

登校の服装検査にも疑問がある。そこまでする理由があるのかないのか。私の学校では廊下の壁にテープがはつてあり、それよりスカートが長くても短かくてもいいない。身長に関係なく、膝下何センチとか決められている。世間体を気にする先生方のこともわかるが、それが就職に影響するからといって強制されるのは納得がいかない」

B子さんのレポート概要「学校へ期待することは、就職者養成所のような教育ではなく、もっと生きた教育をしてほしいということ。私は、六、七月と二ヶ月家の近くに部屋を貸り、自力で生活することをしてみた。そし



て下宿生活で食べることや住むことの大変さ、大切さ、尊さを知った。食べたり住んだりすることを学ぶことは人間が生活していくうえで原点ではないのか。今や学校は、あまりに外見のみにとらわれている。もっと生徒ひとりひとりの人格を認めて欲しい」

この二人のレポートにひきつづいて、現場の小・中の先生方の報告が次々ありました。

「地域の内でも管理化されている。月一度の草取りの出席表が三ヶ月に一度回覧されてくる。その事に対してだまっているのもよくない。社会のなかで自由を阻害されることに對して戦っていかねばいけない」

「中学でも服装検査はきびしい。クラスごとに優劣をつけられる。クラスの服装が徹底できないのは、担任の力量不足だと言われる。中学一年の時に、集団宿泊訓練を行い、整列、各教室への移動訓練などを行う。また普段の課題が多く、土、日曜日は特に多い。職員の側でも課題の点検が毎日山ほどあり、個人の研修がほとんどできない。また早朝から朝活といわれるものがあり、話し合いをしたり、試験をしたりする。そのため、四〇分以上早く出勤して準備にあたる。その間服装検査を行い、頭の上からつま先まで調べる。テスト前になると毎日テスト勉強をする。夏休みも四日以上出校日があり、午前中その日までの課題点検、午後課題範囲のテスト

ト、それを教師がすべて採点する。流れにそっていかないとやっていけない。生徒は先生が問題などを与えないとなにもできなくなる。自主制など芽ばえる時はない。人と人のふれあいなど全くなくなる」

「朝活は学校の伝統なので、やめようという声があっても、受け入れられない。管理する側はその方が楽だからそちらに流される。お互いに管理されることに慣れてしまっている。そういう人たちが教職につくことで、管理されることの不都合な事などに気がつかなくなる」

次に大学生の方からの報告がありました。

「教育実習の時の服装を強制したり、職員になってからも、服装のことで注意をうける」

ここから話題が制服のことになり、高校生から次のような発言がありました。

「制服が日常化されているので外出の時も制服で出かけるのが習慣になっている。制服を着ている時は半人前に見える。服装は本来、自分の考えで着るもので、そのなかに思想が入り、個性がつけられていく。なぜ制服を着せるのか、それは生徒を信用していないから、自由になると、派手になるから」
そして制服については次のような一同の意見でまとめられます。

制服では、主体的な自活的生活者を育てることができな



い。食生活では自分の哲学で行えるが、衣生活は、流行に左右される。流行そのものは、管理的である。昔の衣生活を振り返ってみて、今の自分たちを考えてみる。地域や親の生活のなかから見つける。主体的な衣生活を考えていくうえで、制服を考え直さなければならぬ。

次に司会者の方から次のような問題提起がされました。

「しつけ専門の教育だけでは生徒の欲求にどう答えていくのか。飲酒、喫煙の問題、異性関係のことなど、学校側はすべて認めず違反すればただ罰則を与えるだけでいいのか。高校生に人権はあるのか。異性とのつきあいを、どこまで不純とするのか、高校三年の時は不純で大学に入れば不

純ではなくなるのはなぜか。学校で不純な行為があった時、それぞれ先生によって受けとめかたが違ったり、指導の方法も違う」

この問題について高校生から次のような意見が出ました。

「先生方は、小・中・高と順調にエリートできたので、横道にはずれていく子供の気持ちかわからないのではないかと」

「生徒を外見だけで見ているのでは、ほんとうの所はわからないことが多い。中絶をしても、そのこと自体はほとんどなんとも思っていないのに、世間の目の方がこわい。先生にバレなければなにをしてもよい。ということになっている」

このような高校生の話につづいて小沢さんはこう答えられました。

「高校生の結婚は良いかどうか。生活能力があるのか。ただ感情のままに関係をもって、結婚するには問題があると思う。『愛』というのはなんなのか。一緒にいたいという気持ちがあなのではないか。現実からの逃避でも一緒にいたいというのは、生きる勇気が得られるからなのか」

又、小沢さんの次のようなアドバイスもありました。

「教師がどう人間を見るのか。教師を見てどう生きたいのかが見つけられる。教師自身ももっと小説などを読み、いろいろな生きざまを話したり、どんな人生があるのか、もっと教科勉強から離れた所を生徒と話し合ったりしてはどうか」

そして異性へと関心がいくのは、自分の事を認めてもらいたいから。さみしさから？ 見栄？ 自分の居場所がないので、異性へと関心がいく。チャホヤしてもらいたいから。などという一同の意見が交されました。

そしてこの問題のまとめとして次のようなことが話されました。教師も自分の昔の考えに帰って生徒のことを考えてもらいたい。立場が変わると思想も変わってしまう。生徒の違反を見つけてしまった時もどうしたらいいのかわからずに、もっと大きい所へたよってしまう。学校の体制のなかで、生徒指導係へ言わなければならぬ状態にある。生徒の方も先生をよく見ていて、相手によって態度を変える。生徒側は教師側がどう対処していくのかをじっと見ている。生徒は、たとえどんなまちがった行動をしてみましたとしても、その積み重ねで成長していくのではないだろうか。

この高校生の結婚をめぐる話し合いは一番盛りあがりまりました。

時間の最後にテーマのまとめとして司会者から、なぜ学校がおもしろくないのか。就職者養成所でいいのか。という問題が提起されました。高校生からも

「学校のなかの行動をすべて進学・就職へ結びつけて、それを先生の武器にする。管理教育のなかで、学校にあわせた教

育をされる。生徒の意見は聞いてもらえない。ひとりの人間なんだってことを認めてもらいたい。社会にあつた人を作るのではなく、個性をひきのぼす教育をしてほしい」「思想の自由も認めてほしい。服装検査は意味がない。検査の日だけ注意するのもおかしい。服装の違反者に対して暴力をふるったり、暴言をはいたりしないほしい」という発言が続きました。

これについて教師側からは次のような意見が出ました。

「管理と指導の違い。管理することと指導することの区別をしっかりと教師側で学ぶ必要がある」「どうして規則があるのかということをもっと生徒に説明すべきではないのか」「集団のなかでは、さまざまな約束事が必要になってくるが、規則などは少ない方がいい」「困ったことがおきたら、その都度話し合えばいい。生徒の人格をもう少し考えるべきだ」

そして全体的一致したところで、生徒も自由を求めているのに、与えられるのを待ってもいる。行事もどこかさめていて、燃え上がらない。どんなことにも規則がつけられていく。何か変わったことをしようとする、おさえつけられてしまう。これではやる気を失ってしまう。行事も予定を消化しているだけ。だが、どんな場所でも、積極的に発言することが大切。民主主義が生活に生かされていない。自分自身がないをするのが、やりたいことが見つけれられない。その時

々でやりたいことを考えて、行動する。たしかめながらやっていく。そして次のやりたいことを見つけていくことが大切だ、ということになりました。

生活の基礎である、衣食住をすべて自分ひとりの手で行えるように、指導していくのが、学校ではないのか、個性をなくす「おしきせの教育」では、みずから生きるために学ばなければならぬことを見失ってしまう。だれかに強制され、物事を与えなければ生きていけなくなってしまう。そんな大人が世の中に出てきたらどうなるのか。ほんとうの教育とは、なんなのか社会全体で考える必要があるのではないか、というまとめで熱心な討論は終わりました。

(まとめ・福室秀子)

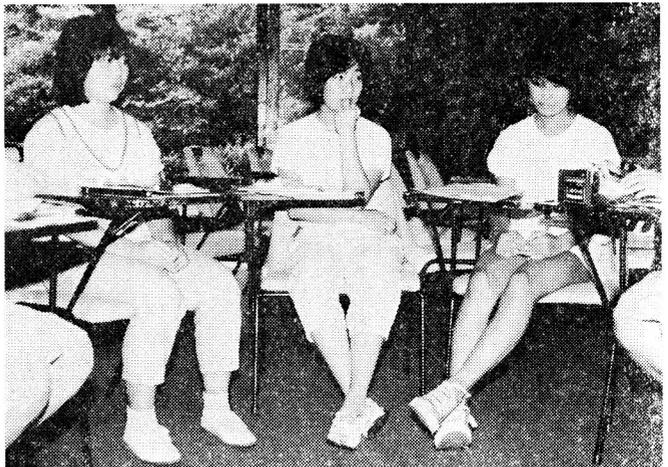
発表した 高校生から

◆初めての参加だし、高校生として、まず新鮮な感覚を得た。ただ各分科会で意見を聞いて、そのことを考えるのに、自分は精一杯でした、って感じ。お話を聞いている中で「あれっ、それはちよっと違うんじゃないか？」って思っても、それに反論するだけの力が自分にないってことがはやくつくってしかたなかった。だから、もつと知識を身につけ、自分の意志をはっきりさせ、たちうちできるよう勉強していきたい。

どうしても、女と男、教師と生徒って、目標は同じなのに違いがあると感じる。分科会なんかでも、先生って、理想をそのまま生徒に描いちゃって、よく現実の生徒の本音なんかを把握できてないんじゃないかなって思った。人間全てをきれいに理解していくこ

とに反発を感じるんだけど違うのかなあ。

♥初めてフォーラムに参加して、いろいろな面で改めて考えさせられることが多かったと思います。その中で強く感じたことは、教師と生徒との意識の違いでした。このフォーラムには、全国から理想を追求するために、多



くの先生方が集まっていますが、その理想のために机上の空論となっている面が多く見受けられたように思います。これは、とても抽象的な言い方ですが……。

小学生と高校生は明らかに違います。それを口ではわかっているようなことを言いながら、「小学生に対する教育をそのまま高校生に当てはめるのは無理でしょう」という意見に対して、「いや、それは教師の逃げだ」と答えた先生がいらっしやいました。その先生は、自分が高校生の時のことを頭に置いて話していらっしやるのでしょうか。だとしたら、それは今現在の高校生には全くちっともあてはまらないと言いつつしまつても言い過ぎではないです。

教師があまりに理想を生徒に押しつけすぎると強く感じました。先生方は、現在の高校生の現状をきれいごとに片づけようとしているのか、理想でものを言っているのか、私にはわかりません。ですが、大学の先生よりも現場の高校の先生のほうが、冷静に現状を見つめて、どう対処すべきかを熱心に考えていらっしやるようでした。しかし、最終的には教師と生徒のギャップを感じ、先生方が自分で思いこんでいるほど、生徒をわかつてはい

ないと思いました。

◆全体会や分科会で、発言したいと思うことがあっても、なんていうか、高校生が発言してよいのだろうか、自信がないというような感じでした。それから小沢有作先生へ一言。

分科会などで話して思ったのです。先生は、いろいろな方からも尊敬の意を向けられていられたり、講演などでも確かに良いことをおっしゃると思います。でも、分科会で高校生としての意見を言っていると、話の途中で、「いや？ それはちがう」とか、おっしゃられたり、質問なんかも、うまく逃げられてしまったな、みたいな感じが残るんです。こういう感じは、私だけが思っていることではありません。対等に話すというのには、私たちが未熟すぎます。でも、頭から「いや！ それはちがう」という言葉は言つてほしくなかったと思います。

でも、先生方と話すとても良い機会でした。考えさせられたことが、たくさんあります。

参加して

◆今年 は地元なのでフォーラムのチラシを何人かに配りましたが、中で一番大きな反応があったのは高校生でした（もつと幅広く声をかけたら人数が増えたかも知れません）。それにひきかえ大人の反応はいまいちどころかとても頼りないものでした。やはりこういうことでもフォーラムには色々な潜在観が働くのです。こればかりで両者の比較はできませんが……。

高三ともなると私服で登場すると「大学生かと思った」とか、「他の大人と何の変わりもなく話し合に加わっていた」と多くの人たちが言ったように、いわゆる高校生として見る我々の認識はとても固定的なものだったことに気づきます。こういう指摘を聞いて私も「アッ」と思いました。しかも若いだけに

彼女らからの発言はフレッシユかつシビアです。にもかかわらず、大人ないし教師指導し、管理する側、高校生指導され、管理される側と立場を区切ってしまうため、そのフレッシユかつシビアな発言を大人は理解することができません。更に我々が「良かれ」と思っていることに彼女らは意表をつく指摘をし、こちらをグサツとさせます。

しかも大いの問題に関して、かなりの同レベル対等なところでこちらと話しあえるということを、大人はあまりにも知らなすぎるのです。「自分の食い扶持を自分で稼がないスネかじりのくせに、いっちょ前前の口きくな」と事実私もそう思ってきたくちなのです。が、ここに至って、「そんなことはない」いや、むしろ「いいじゃないか、いっちょ前前の口きいたって」と思うようになったのです。我々はその「いっちょ前前の口」を聞いてやるべきだし、また我々の思うところも彼女らに言うべきだとさえ思うのです。

このように思うのは、実はフォーラムをきっかけに思いはじめたのではなく、全く細々ながら「女性解放」的な家庭科の共修も含めた運動をやり続けている何年かの間に、徐々に思いあたったことなのです。

食い扶持を自分で稼ぐ者とかそうでない者、あるいは社会人と学生、あるいは教師と生徒という立場に区切られることにより、人間関係が無意味な分断をされているんじゃないか。更に言えば、同じ女でも母とか妻とか娘とか姑とかの役割を担わされて、その立場でしかモノを考えられなくなっているんじゃないか。でも私たちのやっている「女性解放」とか共修の問題などは、特にこのワクをとり払わねばとてもとても拡大しがたいひとつの曲がり角に來ていると思うのです。

今、私たちが考えていること、行動していることは私たちオトナそして教師、あるいは一部の市民というところで線をひくのではなく、とても壁が多すぎます。私は同じ女として意志の通じあう限り、役割を越えて話し合いたいという思いを持つのです。しかも同世代のオトナばかりでなく、これらを、今の私の思いを、今胸にとどめてくれるような若い世代とも……。

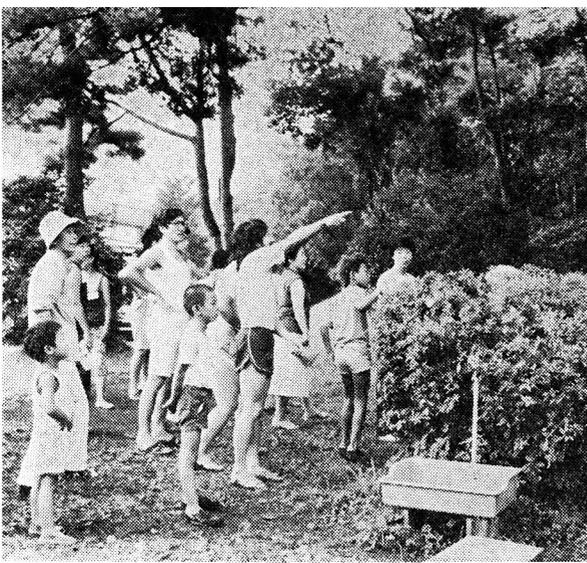
特にハイティーンは今とても保守化しつつあると言われます。だからこそ、私たちオトナの役割とか立場とかを越えたところでやっている運動や思想を、授業とかじゃなくって、もっと同じレベルのところで若い女の子

たちに伝え、コミュニケーションしたいという思いを持つのです。それなくして今の運動の意義は—特に女性解放などは—とても薄いものになると思うのです。

それと、本当に打算ぬきで、私は女の子に限らず男の子も、若い子はとても愛すべき存在だと思うのです。だからむしろ、「ホンネで話すには」などとおこがましいことを念頭におかず話をしたい。

(静岡・梶原公子)





この曲は、今年の七月、障害児学級のキャンプでかけたら、とても子供たちが喜んで踊っていましたし、昨年私が受け持った四年のワンプクたちも楽しんで踊っていた曲です。動きは簡単でいい加減でも構わないところが魅力ですし、「キュッキュッキュッキュ」とお尻を振るところを子供たちは特にうれしがります。ですから、もう少し小さい子供たちでも乗って踊ってくれるのではないかなと思っていたのです。

が、ちよつとあてがはずれたようでした。

メインの「春駒」は郡上踊りとも言われ、「わらび座」の民舞講座で教わった踊りですが、振りが単純な割に、躍動感のあるところが私自身は好きなので、入れてみました。ところが

お恥ずかしいことに、帰りの車中、テンポを半拍遅れで教えてしまったことに気がついたのです。一緒に踊られた皆様、誌面を借りてお詫びをし、訂正させていただきます。「七両三分の春駒春駒」で、すでに「一と」のポーズをとっておいで、一番の始まりのところで「二と」の伸びきったポーズから踊りに入ってください。多分、はじめ見本に踊った時はこうして踊っていたのだろうと思うのですが、分解して教え始めたら狂ってしまったのです。まだ充分教えられる力量がなかったと反省しています。もし、来年又お会いできたら、正しいリズムで一回踊りたいと思います。

踊りそのものは、皆さんとてものみこみが早くてすぐに来ていましたので、ホッとしました。やはり、好きな方が来ていらっしやるせいでしょうか、動きが若々しく、途中の休憩にも卓球をすぐやっていらした中嶋さんには頭が下がりました。私はこの日の午前から腰とふくらはぎの筋肉が痛み始めていたのですが、他の方は何ともない様子で、体力に自信を失う一幕でした。

でも、とにかく、共に汗をかき、手を取り合い、シャワーを浴びて、今まで話だけかわした方とも、口をきいたことのない方とも、とても親しみを感じられるようになったことを思うと、この試みはよかったのだと思っています。



〈身も心も解き放つ〉

御殿場の自然は広いよ

磯部 幸江

子供たちのエネルギーはすごい。マイクロバスが止まると「次はどこへ行くの？ 何があるの？」と、次々と駆け出す。富士山麓の名勝、清宏園。富士山噴火で生じた熔岩隧道が人体の内部に似ていて、「御胎内」と称されるほら穴がある。「このほら穴はお母さんのおなかの中と同じなんだって」「真っ暗でこわいなあ」「キヤー。寒いよー」と入口でワイワイガヤガヤ。勇気を出して一番に乗り込んだのは、清水さん兄妹。案内役の清田さんの後についてろうそくの小さな灯りの中を歩いていく。ひんやり冷たく、狭い所で手やひざ小僧を汚しながら出てきたその顔は満足感でいっぱい。「こわいよー」と泣きべそそのチビちゃんたちや、「うんち！」とお姉さんをあわてさせる子たちで、ほら穴付近はせみの声もかき消されるほどでした。

緑が一面に広がるすそ野をバスは走り、忠ちゃん牧場へ。牛や山羊、羊が放牧されている。子供たちにとって動物たち

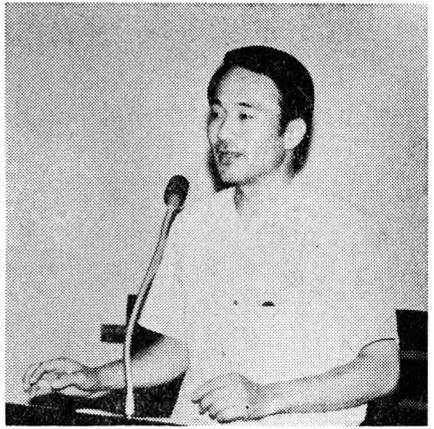


はもちろん、道端の石ころや小川さえも珍しく、歓声をあげる。牧場で食べたぶどうもとてもおいしかった。次は、富士山資料館でいろいろと勉強。そして富士山二合目の登山口へ。山は厚い雲に隠れている。

案内役の服部さん、清田さん、保育係の皆さん、運転手さんごころうさま。大自然の中で子供たち21人は、やさしくしてくれる大人にすっかりくっついて仲良しになってしまいました。眠くてメソメソ泣いている小さな妹の手をやさしくひいたお姉ちゃん。バスのシートに兄妹でもたれあって眠る姿。とてもほほえましいものでした。子供たちも御殿場の自然の中で新しい体験がいっぱいできたと思います。

私も子供と存分につきあう目的で参加した野外コース。広々とした大地に身をおき、おいしい空気を吸い、はればれとした気分になりました。親としては娘のみにかかわりすぎたかなと反省しています。母娘二人で何かをするといううれしさで甘えてばかりいた娘。富士山二合目の山膚をみんなに負けずに駆けおける姿を見ながら、自分の仕事や生活、子供たちとのつながりを大切にしていこうと改めて思いました。

野外コースと共に、早朝、富士の姿の映る東山湖に流した小さな笹舟や、家で待つ弟へのおみやげがせみのぬけがらだったことも、忘れられない思い出となるでしょう。



Ⅱ、学びつつ、語り合う

「答え」は一つではない
——「食」を見直す中から「教育」を考える——

吉田 清彦

フォーラム第一日目。開会・オリエンテーションと終わって、トップバッターの吉田さん登場。会場の雰囲気も、さあ、これから三日間有意義に過ごそう！ しっかり勉強して帰るゾ！ 自分の考えをみんなにぶつけてみよう！ というようなドキドキワクワク ソワソワした感じ。

司会の河上紀子さんの紹介によると、吉田さんは喫茶店のバーテンダー、喫茶学校の講師やルポライターをしていらっしやるとのこと。同時に、個の自立を考える「ひとり歩きの家」や女性問題懇話会「それいゆ」などのサークル活動にも忙しくしていらっしやるそうだ。現在一人暮らし。家では、「趣味としての」ではなく、「家事としての」男の料理を実

践中、とのこと。

「教える者から教えられる者への一方通行という関係は壊していく必要があると思います」と開口一番、吉田さんの言葉。以後、一貫して、「教える側」の生活者としての視点を欠いた「専門的」知識が、一方的に「教えられる側」へ、送り込まれることの怖さ、それを疑いもなく鵜呑みに信用する「教えられる側」の姿勢の問題を、具体的な例を引きながら訴えていかれる。

Ⅰ 「常識」を疑うなかで、食を「専門家」から生活者の手に！

まず、「おいしいご飯の炊き方は？」「コーヒーと紅茶、ど

「つちがカフェインが多い？」という問いかけから発して、吉田さんは、食の「常識」のいかがを次々と説いていく。

「ご飯をおいしく炊くためには、米の吸水率やでんぷんのアルファー化などの科学的実験により、教科書では、夏場は三十分〜一時間、冬場は一時間〜三時間（水温五〜十度の場合）、水にかさ（浸す）なければならぬ、となっている。真冬に三時間も前に起きて米をとぐのは、限りなく不可能に近いが、実際にやってみると、お米をといですぐに炊いても、おいしいご飯は炊ける、という。大切なことは、炊いた後の蒸らしの時間である。固めが好きなら十五分、やわらかめでも二十分が限度。時間がきたらご飯の上・下をよく入れかえて、このあと理想としてはおひつに移す。ご飯の味は、この蒸らしの時間によって極端に変わる、と。お米は、とびつきり高いお米でなくてよいから（吉田さんは五キロで二二五〇円の並米）できるだけ精米したてのものを小口で購入して、手早くといだ後、一度ザルにあげることを。」

このように、権威を持つ側（学者・専門家や「教える側」の「答え」と、生活者としての私たち（「教えられる側」の「答え」が食い違ってくる根本的原因は、「学者・専門家たちは自分でご飯を炊いたことがないから」と一言でグサリ。

また、後の質問の時間に問題となった、「コーヒーと紅茶のカフェインは、どちらが多い？」という質問に、圧倒的多数の人が、紅茶の方に手をあげたことについて、吉田さんは、コーヒーの方が多いのはあたり前である、と。

科学的発表によると、同一グラム数当たり、カフェインの含有量は、コーヒーに対して、紅茶一・八で、その通り紅茶の方が多い。しかし、実際にそれを飲む時は、カップである。当然、カップ一杯当たりで、両方を比較する必要がある。コーヒーでは、カップ一杯（約百五〇CC）当たり、十〜十二グラムの豆が使われており、カフェインは九十〜百二十五ミリグラムである。これに対して紅茶の場合、葉の使用量は三〜四グラムであり、含まれるカフェインは三十〜七十ミリグラムであり、明らかにコーヒーの方が多い。

眠くなったら紅茶でなくコーヒーを飲む、という私たちの生活実感を無視して、「私ではない誰か（権威のある人）」がいったことを鵜呑みにしている、こういう態度こそ問題である、と吉田さんは力説される。教科書の上や科学的数字の上での答えは、それを私たちの生活レベルへ移す時、必ずしも「正しい」わけではない。私たちの実生活の中で見つけた答えこそ、真に生活力につながる。「紅茶」と答えた人は、生き方考え方を根本的に変える必要がある」と、またグサリ。

同じく、「私でない誰かがいったことを鵜呑みにする」ということに関連して、食を企業に売り渡すこわさ、についても訴えられた。

例えば、「麦からビール、さとうきびから味の素」という味の素のCM。ちよつと聞いただけでは、いかにも「自然の恵み」という感じだが、実のところは、さとうきびそのものではなく、さとうきびの「しぼりかす」から作られており、さらには石油を原料としたものが多量に混ぜられている、という。

最近、「おいしい水」ブームで、ミネラルウォーターや家庭用浄水器がよく売れている。「しかし、これもどう考えてもおかしい」と。

吉田さんが住んでいらつしやる神戸市も行政当局が、「おいしい水」を売り始めた。裏返せば、水道水を管理している行政担当者が、「その水はまずい」と認めたことになる。

流行の家庭用浄水器は、カルキ臭（塩素臭）を抜き、発ガン性ありとされているトリハロメタンを除去すると謳われているが、使用するにつれて能力が落ちる。一カ月ほどで活性炭を取り換えないと、いったん活性炭に吸着したトリハロメタンが、逆に離脱し始める。また、数時間使用しないでいると、その間に細菌が繁殖すること。

トリハロメタンは、揮発性のものであるから、二十分間煮沸すればとり除ける。また、前の晩からくみ置いた水を冷たくすると驚くほどおいしく飲める。高いお金を払って浄水器や「おいしい水」を買う必要はない、と。

また、吉田さんは、特級、一級、二級というお酒の等級は主に徴税上の区別であり、良い酒を飲みたければ等級や価格よりも原材料名を見た方がよいこと、サラダ油は、日本だけで作られているもので、サラダ油に限らず白く精製されすぎたもの（砂糖や塩など）には、その精製過程で得体の知れない化学物質が混入されていること、肉より安いプレスハムなどには何が混ぜられているかわからないこと、合わせ調味料はほとんどが塩でとても割高につくこと、などをあばいていく。

このように、氾濫する一方的な情報により、私たちの食に対する知識もゆがめられ、生命も危険にさらされつつある。専門家は、生活の場から遊離している。自分では包丁や鍋を持ったことがないのに、一方的に机上の知識や企業の立場を押しつけてくる。そういうことに対して、私たちは、実際の生活の場から、「本当にそうだろうか？」と疑問を持つことが大切である。食の問題は、自分自身の生活の中で、一人一人が発見、工夫してゆくべきものである、と。

Ⅱ 食の場から性別役割分業の見直し

続けて、吉田さんは先程のCMに関連して、テレビから流れる一方的な情報として、見逃がせないものに性別役割分業がある、と、今度は、まな板の上に、「食を通しての女と男の問題」をのせられる。

以前問題になった「わたし作る人、ぼく食べる人」というCMに代表される、伝統的な男女役割分業の押しつけが、今でも、気をつけて画面を見ていると多くある、という。イヤ、最近特に、役割分業を推進するようなCMが増加している。

例えば、武田メイカルのCMで、中村メイコ、神津善行夫婦がそろって、「亭主の長生きは女房のつとめです」というもの。またまた味の素のCMで、加山雄三を使って、「やっぱり料理は奥さんです」という意味の言葉をいわせている、等々。白紙の状態の子供の意識に、与える影響は特に大である、と。

そういう、時代の流れに逆行するようなCMの氾濫の中でよく気をつけて見ると、一方で、明らかに伝統的役割分業を崩していくというCMも現れはじめている。たとえば愛川欽也が台所でお皿を拭いているシーン（ただし、これは合成洗剤のCMではないでしょうか!）、伊丹十三が、子供のた

めにサラダを作っているCMなど。

これからの私たちの運動は、CMに抗議するだけでなく、このような新しい視点のCMに対しては、表彰状をあげるなど、応援することも並行してやるべきである。押したり引いたり、有効な運動を展開する中で、男性が家事をやっているCMも増えてくるのではないだろうか、と。

同じ様に、よくいわれる料理の「手抜き」について。吉田さんは、「その対象は、必ず主婦であり、それを批判しているのはたいがい男である」と。やはり、ここにも「料理は女が作るもの」という性別役割分業が顔をのぞかせている。「手抜きだ、と文句を言うなら、自分で料理してみればよい」。男の身勝手な願望はどうであれ、女性の半数以上が働く時代にあって、家事・料理をうんぬんするなら、男・子供の参加・共同をこそ呼びかけるべきであり、そうすれば（自分も作る側に立ってみると）、「手抜き」などという言葉は、そう簡単には使えなくなるだろう。

権威のある側からの知識や、CMなどの一方的な情報、「私でない誰れか」によって、無防備の子供たちへのプリンティング（すり込み）が、確実に押し進められている。又、絶えずそういう影響を受けながら育って来た私たち大人も、自分の内に潜む、既成の「常識」や役割分業意識から、自ら解き

放たれるべく努力しなければならない。

だからこそ、子供の時から、女・男の別なく、食を自分のこととして考え、その中で発見・工夫・創意をこらしていく、という生活力ある人間に育てたいものである、と。

Ⅲ 「教え」「教えられる」関係について

吉田さんのお話は、「食」の問題から、その常識を打ち破り、それを女と男の問題へと展開させて、核心の「教育」のあり方へと、どんどん入って行く。まさに、現行の学校教育に警鐘を鳴らしながら、私たち親や先生へ反省を求めつつ、話を進めていかれる。

まず、吉田さんは、「答えが外から一方通行的に『与えられる』」ことの怖さを強調される。子供たちは、「なぜ？」という疑問を持つことを要求されないし、自分で考えることも要求されない。そして、与えられる答えは、先に見た様に、生活の場から離れた、権威ある人たちが机上で組み立てたそれである。

もっと恐ろしいことは、「次の中から正しい答えを一つ、選びなさい」というテストを教師がしていることである、と。

「正しい」のは一つだけであり、それ以外は全て「間違い」、という強迫感、とりあえず一つ選びだせば安心する、という

安心感が恐ろしい。それは、「みんなで渡ればこわくない」式の意識を子供に植えつけることにもなるし、個性的な考え方をする子を、集団で差別することにもなりかねない。

種々の困難な問題があつて、それらを学校で克服していくのが無理であつたら、家庭で、親たちががんばつて変えていかなければならない。「答えは無理に探さなくても良い。あるいは、たくさんあるかもしれないのだ」と。

例えば、「太陽が〇〇と、かがやいている」。〇〇の中へ入れる適語を、ギンギン・ガンガン・サンサン・ドンドン、の中から一つ選びなさい、というテスト問題で、友人の子供の大ちゃんは、自信を持ってガンガンと答えたのに、先生からは×をもらった。こういう時、親としては、「大ちゃんの答えも正しい。それでもいいよ」というように接してほしい、と。そして、「お母さんは、こう思う」とつけ加えて、先生には先生の、お母さんにはお母さんの、子供には子供の、それぞれ一人一人に、それぞれの感じ方・考え方があり、答えがあるということを、示してほしい。それが、豊かな感性を育てる上で、大事なことである、と。

大切なのは答えそのものではない。自分の中から発する、「なぜ？」という問いかけと、答えを見つけ出していく過程こそ、最も尊重しなければならない。

「なんでもかなあ?」「本当かなあ?」ということを日常的に考えている人こそ、本当の自分らしさを発見していける人である。疑うことによつて、既成の常識や役割意識から解放され、それを続けることによつて生活の中に本当の自分らしさを、張りめぐらせることが可能になる。

「なぜ?」という問いかけを、先生と親と子供がいっしょになつて、みんなで、日常的に考えていくことで、のびのびとした、感性豊かな子供が育つてくるのだと思う、と。

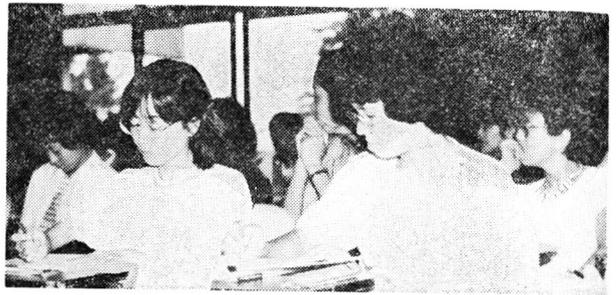
以上、吉田さんのお話で、ハツと胸をつかれるものがあり、今まで霧がかかつて見えなかったものが、少しずつ見え来て来たような気がしました。ありがとうございます。

△討論から▽

(神崎) お百姓さんの米代が上がるのは私たち消費者に跳ね返つて来る。お米を主食にするのを止めようかと思つているが、皆さんはどう考えていらつしやるかうかがいたい。

(石川) お米つて本当に高いのかなと思う。忙しいから米食なのですが、小麦粉を原料としているものを主食にすると、家計にひびく。おかずをいろいろそろえなくてはいけない。

(福島) 御飯がおいしいから主食にしているが、日本の農業では農薬をたくさん使うので、危険分散の意味から米は一日



を守る立場で、農業をする人もいっしょに招いて討論していただく必要があると思う。

(司会・河上) 消費者という立場からものを見てしまつて、そこから解き放つてということが言われたと思います。

(山田) 専業農家は十パーセント。安心して農業ができないからで。機械がいるし、何百万円も必要。草を取る暇がないから農薬を。農薬を撒くと稲が弱るから肥料をたくさん入れる。その肥料も機械で手早く入れるしかないから悪循環。日

一回にしている。麦が安心というところではないが、アメリカのような米の作り方だったら農薬は少ないし、味も悪くはないだろう。日本の農業といふことで言うと、戦略物資になつていふのだから、技術的な政策を持つていなければならぬ。値段だけで云々はできないと思う。生産者米価を上げるといふことは、自分たちの労働に対してもっと金を上げてくれというのが、日本農民の運動だろうと思う。そういう点を考えると、すぐ米をやめるといふことはできない。自分たちが食べているもの

本の経済的な争点があるように思う。

(杉山) 私は、米沢で、反農協・反農薬でお米を作っている農場から直接米を取り寄せている。そこは、農協から農薬を買わないということで農協にも協力しない姿勢を取っており、何年か続いた冷害に対しても農薬を使わないために米が良くできたという実例がある。農薬を使うとどうしても冷害に対しても大変弱くなる。冷害に対しても強い品種を研究しているところ。食管法に触れることなのであまり大きい声では言えないが、そこからまとめてお米を取り寄せ、家庭用精米機で玄米を精米し、それで取れた糠を安心して使っている。

(平井) 消費者グループをやっているので一言。パンは安全の面で、百種類位食品添加物が使っている。だから安全の面からもお米を食べた方が良くと思う。日本の土地で昔からできてくるものに私たちはなじんで、祖先は食べて良い物と悪い物とを選びながら伝えてくれた。外国の物を食べるということは、地球の遠く離れた所から取り寄せるということとで無理があると思う。絶対腐るものだし、何回消毒されているか、どういう農薬がかかっているかもわからない。本物を食べるということはお金がかかるけど、お金を使うのが大変だからといって安全性を捨てたら大変なことになると思う。

(桑畑) A地方に火力発電所をつくらうという動きがあり、

住民の反対運動が起きている。A地方は貧しい農村だから目を付けられたのだらうと思つたら、レタスだけで食べていけるそう。軟弱野菜のレタスが取れる程空気のきれいな所。現在電力は余っているのに火力発電所をつくらうとしている。何でつくるとかと言うと、土建家が儲かるから。高度経済成長の発想。物質的な豊かさが豊かな生活だと思ひ、そうした消費生活を送ることを目ざしてきたことから一歩さがつて、不自由でもみんなが生きていけるという発想をしていかなければならない。

(半田) 今日、皆さんに署名をお願いしているのだが、石垣島に空港を造るといふことがどんどん進められている。空港を造らうとしている白保の浜はサンゴ礁のきれいなところで、掴み取りができる程魚がたくさんいる。サンゴ礁は魚がかかれることができるから魚の宝庫。潮が退くと青のりが取れる。のりをつまむような事はちっちゃい子でも年よりでもみんなできるから、住民は充分それで食べていけるのに、漁業権を取り上げて空港を造らうとしている。漁業権を取り上げるために漁業補償が下りるわけなのだけど、補償金はその地域の人のところには来ないで、漁業組合全体の赤字を埋めるために使われてしまう。その地域の人が生きていくためのことは無視して、経済のそろばんづくで事が進められて来ているという事情がある。生活とはどういふものかということ

が、いわばひとりひとりの生活権として自分の中に確立していないところから、日本中の至るところでそろばんにからめ取られていくということがあるのではないかと思う。署名よろしく願います。

(吉田) 生産者と消費者が意思の疎通をはかることが根本だと思う。もう一つ食の問題は、きれいごとではないと思う。皆さんが食べている魚は国内産が三割で、ほとんどが遠洋物。僕はきれいごとは好きではない。例えば今出回っているタイは養殖なのに、食べている人は養殖だと認めたがらず天然ものだと思ひ込んでいる。提供する側は笑っている。藤枝村というところがあるが、そこはとも牧歌的なところ。年に一、二回行くから牧歌的なので、そこは電力がなく自家発電だからお釜はまっ黒。そこへ学生が頭だけで来るから、御飯炊きを知らない。ああいうのを見ると腹が立つ。さらに、そこはバスが一日に二本しか通らないから、車で来ている。車で来て籠まっ黒にして、あと放ったらかしにして、何が自然だと、そこのお百姓さんは、そうした感覚を笑っている。

現実には魚をとるとか農業とかは必死なのだ。消費者だけがきれいごとを言って暮らしている。文句があれば全部自分でやればよい。できなければどこかで妥協しなければならぬ。そこで、消費者の方から生産者の方へ歩み寄り、お米はどうしてできるのだろうかとか、お魚はどうやってとれるの

だろうかとか、お酒はどうやって造られるのだろうか、小さい時から、家庭で、作っている人の話を聞く場を持って大きくなって来た人と、持たないで大きくなって頭だけで考える人とは根本的にちがってくると思う。

(司会) 夫が畑を借りてやっていて、毎日御飯が食べられないくらいジャガ芋が取れるので、それを食べなければいけない。今、吉田さんが「きれいごとを言っていられない」と言われましたが、そんなことを思い浮かべた。

(古澤) 熊本の南小国町の中学校の教師をしているが、地域の人たちに学ぼうということで栽培学習をしている。高冷地栽培で夏大根を作っているが、朝早く起きて、家族で取りに行き、大根洗い場で洗った大根はおいしいという。大根を作ってみようということで、子供たちとクラブ活動で作ってきたら、作るということをとんでもないじにするようになった。

そこでは、連作などの関係から農薬を使っているが、「土は生きている」という無農薬栽培の映画を、親にも呼びかけて子供といっしょになって見ることもやった。子供たちがいろいろな感想を書いていた。この経験から、生産者と消費者とを結べるような体験学習の大事なことを知った。

(桑畑) 吉田さんが、体験が大事だと言われたことを受けて、一つの実践を報告したい。今の子供たちの生活の中に、私たちが生きていく上で大切な体験というものが失われてい

る。その子供たちに今の社会ではこういう問題があるのだと言ってもわからないから、できるだけ作るところからわからせようという授業だ。油はどういうものかをわからせるのに、菜種を買って、搾って、その油でお好み焼きを作って食べた。今熊本の方では、中・高あわせて原体験が大事だということ、できるだけ昔の暮らしにさかのぼり、食べ物・着る物がどういうものかを、体験を通して学ばせることはできないだろうかと、いろいろ考えながら実践している。

(司会) 答えを一つしか与えていない教師は反省してくださいと吉田さんが言われたが、その関連からの発言を……。

(押切) 紅茶とコーヒーの問題だが、皆さんは、同一分量についてのカフェインの量ということで、自信を持って紅茶の方に手をお挙げになったのだと思う。講師の先生は、多分一杯の分量についてのカフェインの量をお聞きになったのではないかと思う。「どっちが多いですか」とおっしゃる時に、あいまいにして、私たちが勝手に、同一分量と考えて手を挙げたかも知れないし、ある人は一杯分と考えて手を挙げたかも知れない。このことを通して考えると、私たちが生徒に接する時や、親子の対話の中でしばしばこういうくいちがいがあって、お互い理解し合えないことがあるから、私は、教育を見直す中から考えるというテーマだし、もう一度、こうい

うことを考えてみたいという感想を持った。

(吉田) 今その説明のしかたは居直りの論理だと思う。コーヒーや紅茶のイメージをグラム数で考えるのは学者か、コーヒー栽培農家か、先生ぐらいだ。同一グラム数と考えてしまいう感性を捨てなければ、生活者に戻れない。

(塚越) 吉田さんの話を興味深く聴いた。教えられる関係という話の中で、答えが一つしかない怖さを、むしろ吉田さんの話に感じる。同じ量に対してのカフェインの量は、常識で考えれば一杯分を比べた場合なのか、かさなのか、重さなのか、どちらの常識が正しいのかを、教える側と教えられる側との関係で引き出すべきだ。またカフェインの量をどうやって計ったのか知りたい。

(石川) 情報を与える側と受け取る側とのイメージのすれ違いみたいなものが、日常の生活の中にたくさんある。食品分析表ではグラムあたりと書かれてあるが、実際の生活で活かされなくて困る。

(吉田) 石油ショック前までは、スーパーでは玉ネギ一袋が一キログラムだった。後は八百グラムというふうに変化してきた。そういうふうな生活の中で考えることが大事。なぜ先程のような問題を出したかと言うと、同じ質問に十年前は百パーセントコーヒーと答えていたのに、今は、九十九パーセント紅茶と答えている。学校でカフェイン含有量を教え

ているとは思わないが……。教えていますか。

(入江) 私は、コココーラのココインの問題を教えるためにカフェイン量をグラム数で表したものを印刷して教えている。コココーラの会社から出ているものを利用して。それでも「コココーラを飲むとすつきりするんだ」と言った男子がいた。

(吉田) 私の教えているところには三十代、四十代の主婦と、四、五十代の脱サラの男の人たちが来ているが、一杯の紅茶に含まれるカフェインの量が多いと反応している。それは、コーヒー業界からの偏った情報による。コーヒーなどのカフェイン量の析出方法は、クロマトグラフィーを使ってやる。アメリカの飲食店や自動販売器などで実際に売られているものを分析している、ほぼ妥当な数字だと思う。誰がどういう方法で情報を出しているのかということを読み取る必要があるということ、感性を磨くことが大事だと思う。

電車の中で実際に見たことだが、コーラの缶がころがっていて子供が顔を近づけようとしたら、即座に母親が「近寄っちゃダメ。歯が腐ります」と言った。子供の好奇心をつぶし、お母さんが答えを与えてしまうのはよくない。

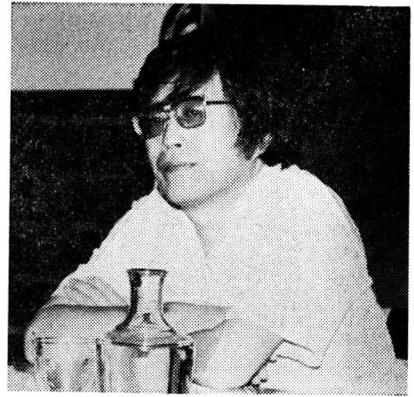
(石川) 一つの単位をグラムにそろえないで、実際に消費するコーラのレギュラーサイズ一本当たりとか、缶コーヒー一本分とかでそろえてもらおうと実際の生活に活かせるのになと

思った。

(中嶋) (一ぺんに世の中を変えられないと思うけど) スウェーデンにいた友人が日本に帰って来て話したことだが、スウェーデンでは明りを大事にしている、暗くならないとつけないという。また、私がコペンハーゲンに行つて感じたことだが、古い建物をとても大事に使っている。日本の社会では、どんどん丸の内などではビルを壊している。使えても使わないという日本の社会の中で、私たちの意識を変えていかなければならぬという意識の問題を感じる。

(司会) 前半は、それぞれが生活の主体者として考えていくなかで、自分の生活だけじゃなしに、生きていく上で大きなところで大事なことがどんどん切り捨てられていっていることを、もう少し知つて考えていかなければならないのではないかということが出ました。今、何が正しく、何がまちがっているか、答えが一つしか与えられないということも出ました。そして、ひとりひとりが自分を考えていく中で、自分の生活を変えていかなければならないのではないかとということも出ました。これからの討論に活かしていただく。

(まとめ・平井和子、鈴木まき子)



近代学校を問い直す

小沢 有作

小沢さんは柴田栄子さん錦真理さんの記録に克明に手を入れた上、新しく書き加えて下さいました。ただ、膨大な量となり、限られた枚数に入りこまないのて「家庭科編」と「質問に答えて」の稿は、'85年四月号から連載することになりました。ご了承下さい。

(編集部)

〈臨教審と家庭科〉

今日の国会で、臨時教育審議会設置法案が成立しますね。参議院の本会議で可決されると今朝の新聞に出ていました。臨教審路線の時代の幕あけです。臨教審路線のもとで、家庭科はどうなっていくんでしょうか。ここに参加しているのて、こんな疑問がまさきに湧いてきました。

臨教審は色々な問題を議論すると思えますけれど、その一つとして、これからの日本の産業と社会生活の構造は、ハイ

テクノロジーとコンピュータを軸とする時代に入っていくと予想して、それにあつた教育体制をどう作っていくのか、も議論されると思います。

トフラーの言葉に従えば、「第三の波」の時代における教育とは何か、ということになるでしょう。「第一の波」は、農業革命が作った、生産Ⅱ消費の結合した農業社会の時代。

「第二の波」は、産業革命が作った、生産と消費が分離するようになった工業社会の時代。それが「第三の波」というコンピュータ中心の社会・産業構造に移って、新しい生産Ⅱ消費の型が創り出されていく。トフラーは、このように歴史の移り変わりをおさえて、「第二の波」の時代の教育は近代学校を創り、画一性の特徴としてきたが、「第三の波」の時代になると、新しい個性化の教育が求められてくる、というのです。

でも、日本を見てみると、このような方向に変わっていくように思えます。むしろ、生産するものと消費するものとの距離がいつそう開いていくように感じられるのです。ですから、臨教審は、これに応じて、新しい科学技術エリートの養成と、他方でコンピューターなどを操作し、消費するだけの人間とに分ける教育体制にもっていくだろうと思います。新しい産業エリートを養成するために、学校教育の自由化と多様化という方法が必要になってきます。これは画一的教育を真に超えて、個性化を実現する途にはならないでしょう。臨教審路線の時代になると、とりわけエリート校では、家庭科をますます軽視していくだろうと思います。

さらに社会の構造が、コンピューター管理社会になっていくと、地域や家庭の生活は、どういうふうに変わっていくのか。我々としてはどういう質の家族や地域の生活を構想していったらよいのかも、大きな課題になるでしょう。このような産業と社会生活の変化、教育体制の変容のなかで、家庭科も新しい位置づけや内容の創造を迫られる時代になっていくのではないのでしょうか。

〈学校の問題性を自覚する〉

今までの改革論議でもそうでしたが、今の「臨教審」論議

のなかでも、一番見落されているところは、私の表現では「学校の問題性」ということです。

私はこのごろ、学校とは不思議なところだなと感じているのです。学校は百科辞典のようになんでも教える所ですが、ただ一つ、学校とはどういう問題点を持っている所なのか、ということには教えないのです。「学校とは何か」という最も深く自分にかかわる問題に対しては、疑問と批判的な意識を、子供たちに持たせようとしません。そういう不思議な所です。実は、それ以前に、教師自身も、教育政策に対する疑問は持っています、学校への疑問をあまり感じていないように思うのです。

私は、学生諸君から取材して、それを材料にしてしゃべるといふ、自給自足のしかたで教育原理の授業をやっているのですが、初めに学校に対する異議申し立てや疑問を、全部書いてもらいます。すると実に様々な疑問が出てきます。

たとえば、「学校ではなぜ点数をつけるのですか」。こういうふうの子供が聞いてきたら、先生がたは何と答えますか。制度がそうになっているからという答では、ほんとうの納得は得られません。本質的な答は、そうすぐ出てくるものではない。先生も困る。それでいいと思うのです。じゃ、一緒に考えようとするばいのですね。ところが、教師根性の悪いところは、必ず答えなくちゃいかんと思ってしまうんです。ほ

んとうは、答を出すのが大事ではなくて、問いを共有して共に考えることが大事なんでしょう。

ある学生は、小学校に上がる時、「なぜ学校に行かなければいけないんだろう」と思った、というのです。でも、学校へ行っているうちに、だんだんとうこうした疑問が消えていった。「教科書ってなぜ使わなければいけないんですか」という疑問も出てきます。教科書は、文部省とか学者とか、おとなが決めて作っているものです。使う側の子供は、ただ出来上がったものを与えられるだけです。そんな教科書をなぜ使わなければいけないのか。子供にとって当然の疑問です。

学校に行くこと、教科書を使うこと、学校で評価すること、今ではみんな制度にされ、常識になっています。でも、このような常識に子供が疑問を提出すること、これに答えることはなかなかむずかしいですね。根もとから学校の問題を考え直していかざるを得ません。

しかし、学生諸君も気がつかない問題もあるんです。たとえば、時間割です。みんなこれを当たり前だと思っっています。だから、おかしいと思わないかと挑発するのです。一時間目、徒然草を勉強する。二時間目、二次方程式、三時間目、ギリシャの歴史、四時間目、家庭科でミシンかけ……。前の時間と次の時間の間にも知識のつながりがないでしょう。時間割は、知識の有機的なつながりをずたずたにたちき

って、断片化している制度ではないでしょうか。

徒然草の一節に感動して、その場面を思い浮かべてずっとそこに浸っていたら、もうダメなんです。次の時間になると、ぼんやりするなど叱られる。さあ国語は終わったと、さっと頭を切り替えて、次は二次方程式を考えねばならない(笑)。四五分ごとに、一日に五回も六回も頭を切り替えていく。それを学校に在学しているあいだ中、十何年もくり返す。大人はもうやれないです。子供だからやっていけるのです。このようななかで、適応力や暗記能力があって切り替えの早い子は、ついていきますよ。でも、ちよつと考えこんだり、よけいなことを思ったりするような子は、もうだめなんです。

このフォーラムだって、一つの軸を中心に回転しているわけです。それだっているんな意見が出て、司会者が「よくまとまりませんが」って言うわけでしょう。まったく異質の知識を次から次にバラバラに教えられて、子供の頭のなかでどうまとまっていくのでしょうか。もう暗記するしか生きる道はないわけですね。時間割こそ知識の詰めこみ型学校を支える中核的な内部システムでしょう。なのに、そのおかしさを、どうしてだれも感じられなくなってしまったのでしょうか。

もし学校についての疑問を子供がきっかけになるように

ら、教師は途方にくれるでしょう。文部省もこわがりましよう。なぜ通信簿をつけるのか、なぜ教科書は必要なのか、なぜ教科目があるのか、時間割はどうして必要なのか。そもそも、学校はどうしてできたのか。ひとつひとつ子供がそんな疑問を提出したら、教師はこれにほとんど答えられないのが、実状でしょう。でも、幸か不幸か、子供は学校に不満をぶつけても、それを疑問にまで高めていません。教師もそうした疑問を起さそうとはしません。学校論議がこんなに盛んになっているにもかかわらず、学校を支えている内部の仕組みについては無批判の状況です。いったい、どうしてこうなってしまったのでしょうか。これが一緒に考えたい最初の問題であります。

原因はいろいろあると思います。人間、それに慣れてしまいうと、その場の構造を対象化して批判的に見ることをしなくなる、というクセをもっています。学校（の構造）に対してそうなっています。そうなった原因を一つだけあげますと、「学ぶとは学校へ行って教科書を習うことだ」という学習意識がすっかり定着していることがある、と思うんです。私はこれを「学校型学習意識」と呼ぶんですが、明治から百年かかってつくってきたものです。

一方、今まではそこから大きく学んでいた地域や父母の生産・生活の知恵は習うことなしと思わされてきました。「学校

型学習意識」の成立・普及は、反面、自分の父母、祖父母、地域の中に、自分の学ぶべき文化があるのだというように考える意識を切り捨ててきたことと、裏腹なんです。よく子供の学習権を守れと聞くわけですが、その「学習」権の本身は、暗黙のうちに、学校で授業を受けることを指しているようにうかがえるのです。学習権擁護が学校型学習の保障に限定されてしまうと、狭い理解になって、困ります。

昨日、カフェイン論争が生じましたね。あの論争を聞いて、私は学校型学習の論理と生活型学習の論理のすれちがいを感じさせられました。研究（近代科学）の論理と生活者の論理では、単位のとり方がずれているでしょう。それをまっすぐ意識することが大事なんです。意識すれば、そこで考える手はずが出てきましょう。教師が研究の論理に頼るだけでなく、同時に生活の論理をもてば、両方を活かすことができるわけですね。そこが双方でかみ合わないから、ちよっと泥試合になつた感じを受けました。

自分の生きている場所である学校、その構造とか矛盾について疑問を育てないのは、なぜか。先生だって通信簿をつけるのはつらいと思っている。それなのに、どうして学校では点数をつけなければならないのかという問いを起こして、不満を疑問に高め追求していくことは、あまりしない。学ぶということは疑問をもち、それを追求していくことだと思う。

不満はもつけれど、疑問にまで高めないというところが、こ
んにちの大きな問題点なんだろうと感ずるのです。

今の日本では「学校とは何か」を問い返す意識が、日教組
でも希薄のように思うんです。日教組は四十人学級を要求し
ています。これは条件闘争です。でも、これが実現したとし
ても、今の子供の苦しみはそうたいして減らないでしょう。
教える量の多さ、教える速さ、知識を断片にして教える制
度、評価制等を、そのままにしておいて、人数だけ減らして
も本質的な解決にはなりません。私はもっと学ぶ量を減らし
て、知識教科は午前中だけ、午後は物を作ったり、遊んだり
するように、知識詰めこみ型学校の構造を変えていくほうが
大事だと思っているんです。そうすれば、今の子供はもっと
のびのびしていくだろうと思います。

もう一つ言うと、高校の先生は中学校で習ったはずだと言
い、中学の先生は小学校で習ったはずだとよく言いますね。
でも、今の学校のしくみややりかたですと、その場、その場
をしのご覚え方をやって、前に習ったことを忘れないと、生
きていけないのが実状でしょう。先生もそう追いこんでいる
ことに責任があるでしょう。なのに、子供が出来ないと、子
供の不勉強のせいにする。きのうの夜の話合いに出て、私は
教師の職業病というものがあると再確認しました。何かとい
うと、責任転嫁の名人である(笑)。「文部省の政策が悪い」

「親のしつけが悪い」「子供が勉強しないのが悪い」……いっ
も他人に責任を転嫁するクセがあるんですね。私は一生懸命
やってるのに、まわりが悪いからうまくいかないんだ。こう
いうのを教師の職業病と言ってよいでしょう。これも学校の
問題性から目をそらせる一因かもしれません。

〈子供の生活構造の変化〉

私は、現代ほど子供にとって学校のもつ比重が大きい時代
はない、現代は学校が子供の生活の支配者になった時代であ
ると思つています。学校を問い直す必要性はますます大き
くなってきています。同時に、これほど大きな影響力を持つよ
うになったので、今まで見えなかつた学校の矛盾や問題性も
誰の目にも明らかになってきました。今が学校の問題を考え
直す絶好の時期であります。

学校のもつ比重が大きくなったことは、子供の生活構造が
変容したと結びついています。そのなかで、子供の「生
活の中での自立」というものが奪われました。これがこんに
ちの子供問題における核心である、と考えているわけです。
子供の生活の質が変わり、生活感覚が変わったということ
は、家庭科の先生が最も具体的に知りうる位置におられると
思います。あとでくわしく教えてほしいと願つています。

六十年代以降の高度経済成長は、日本の社会構造的な変容

をもたらししました。人びとが都市に集中して、農村型社会から都市型社会に変わりました。大量生産—大量消費という産業社会が完成して、商品依存の生活パターンが一般化しました。テレビの普及を媒介にして、新しい情報化社会が訪れました。そうした「生活水準」の向上のなかで、医療制度の普及と相まって、人びとの寿命がのび、高齢化社会になりました。また地域共同体がなくなり、家庭も大家族から核家族に移り、その核家族も互いに孤立して、ただ教育熱心な「教育家族」に変貌しました。

六〇年代以降、高校・大学への進学率が急上昇しました。高度経済成長のおかげで、高校を作り、教師に給料を払うお金ができたから、可能になったという一面を、見落してはならないでしょう。こうして、一五歳から一八歳までの青年の大多数が学校に行くようになりました。幼稚園・保育園から数えますと、三歳から一八歳までの一五年間、ほとんどの子供が学校に組織されるようになったわけです。こういう現象は、日本に今までなかったことです。子供は学校に完全に囲いこまれたのです。理由の一つには、学歴社会のすみずみまでの滲透という現実があります。学校を出なければ、一人前として生きられない。どの学校を出たかによって、その人間の進路のみならず、人間的価値まで決められる。それが進学率をあげ、いわゆる高学歴社会をつくりだしてきました。こ

うなるにつれて、学校における競争が決定的に大きくなっていきます。

高度経済成長をくりぬける中で、日本の社会生活の構造は決定的に変容した。これは敗戦以上に大きな変化でした。今の二〇歳以下の子供は、このように新しい社会構造のなかで生まれ、育っています。以前の子供とその中身が違ってきているのは当然です。問題の最初は子供の質的変容をどう見るかにあります。

民衆の子供の生活史という長い視野において見ますと、日本の子供たちは農業社会のなかで労働少年として育ってきました。それは祖父母の子供時代まで続いています。一九五〇年代までは、それでも子供たちは校内を出ると自分たちの自由な空間があつて、そこで働き、学び、遊んで、学校になり経験を貯えることができました。

国分太郎さんは、そうした経験をあそび、かせぎ、用、かざりという四つの領域に分け、この中で子供は「しなやかさ」というたからもの」と「ちちははのくにのことば」を自分のものにしてきた、とふり返っています。

ところが、このような子供時代は、高度成長時代のもとで、決定的に断ち切られてしまった。自由空間を失い、手づくりのあったかい生活から商品に全面的に依存する生活に移っていきました。そのなかで、今のような、私の表現です

と、学校少年少女という新しい質の子供時代の生活を過ごすようになったのです。

ほとんどの子供が高校まで行くようになりますと、必然的に、学校というただ一つの世界しか知らない、経験しない子供時代を送るようになります。私はそれを学校少年少女と呼ぶのです。幼稚園の時から学校という施設に囲いこまれつつけているのみならず、受験競争のおかげで、放課後も塾があり、宿題があります。学校が終わった後の時間も、学校によって支配されるようになっていきます。今では家庭での生活管理まで手を広げています。子供は学校から解放される時間を失いました。学校が子供の時間の支配者になったのです。そして、ここを貫いている規定原理は「できる・できない」で人を測る能力主義と、このものさしで人を序列化する競争主義であります。

産業社会の中で、子供は消費少年少女になりました。大量生産—大量消費の社会のなかで、子供は消費者として位置づけられ、コマーシャルイズムの対象になりました。テレビが普及し、マンガが盛んになって、子供がかかわる情報の量が一変しました。今ではパソコンです。また食品やおもちゃをはじめ、すべてを商品として買い、使う生活になりました。お金万能です。コマーシャルイズムが子供の生活の中身を占めるようになりました。

産業社会のもう一面は、公害によって自然をこわし、自動車社会をつくって遊び場を奪い、子供の自由空間をなくしたことにあります。また、農具の機械化によって、子供の畝仕事の手伝いを不要にし、家具の電氣化によって、子供の家事手伝いを不要にしました。一人っ子、二人っ子になって、子守りも不要になった。かつて子供が持っていた自由空間や仕事は根こそぎ奪われてしまったのです。子供に残された仕事といったら、せいぜい、学校の勉強をすること、テレビを見ること、買い食いをすることぐらいになってしまったようです。ひとの役に立つという経験を味わう機会が少なくなったのです。子供が心身ともに元氣なくなるのも無理ありません。

このような現代の子供時代に共通する特徴は、でき上がったものを受け取るしか知らないということでありましょう。もちろん、子供だけのことでありません。親だって既製品を買ってすます生活になっています。親も子も生産することから切り離されて、出来上がったものを加工する、操作するだけの生活をさせられているのではないのでしょうか。

モノとのかかわりが変わったと同時に、人とかかわり方も大きく変わりました。子供だけの時間と空間を奪われて、大人の秩序にまったく組み込まれた結果、子供は大人に四六時中保護し監視される存在になりました。自分で決断して何

かをする機会が少なくなつたのです。

核家族・教育家族になつたので、家庭でも親がごまごまと心配するようになりました。学校では教師の言うとおりで動かねばなりません。地域でも大人の目が光るようになりまして。大人の安全保障の傘の下に入ったわけです。また一人遊びがふえ、友達も学校の中で浅くしか作れないようになりました。大人の傘の下に組み込まれ、その論理がモロにかぶさつてきたため、ほんとうの友情をつくる場を失い、人のためにするとか、人の痛みをわかるとかいう、他者への共感のころを衰弱させました。人間的共同性を薄くしているのです。

こうして、何かに依存しないと、誰かに指示されないと生きていけないような生活のスタイルをとらざるを得ないようになりまして。いいかえると、「生活のなかにおける自立の喪失」ということです。自分で何かをつくる、人と一緒になにかを試す、そういう経験の自由が奪われてしまったのです。このように子供の生活構造が変わって、自立を奪われれば奪われるほど、子供も親も学校に頼るようになります。では、子供にとって学校とは何かという問題に移ってみたいと思います。

〈学校メタファ〉

何かにたとえることをおして、学校というものの性格を

鮮明にしていこうとするやりかたです。「学校とは、学生・生徒を集め、一定の方式によって、教師が継続的に教育を与える施設である」(岩波・国語辞典・第二版)。このように定義するのではなくて、学校を別のものにたとえてみるわけです。「学校とは恐竜のようなものだ」というふうに。こうしたやりかたで、子供にとって学校とは何かという問題に近づいてみたら、おもしろいと思つたわけです。

ここに小学生と高校生、大学生の作つたものがあるのですが、それを紹介する前に、皆さんに書いてもらおうと思えます。「学校とは、先生とは、テストとは何々のようだ」と、自由に書いて下さい。私は、子供の学校のイメージと、先生の学校のイメージとは多分ずれるだろう、という仮説があるのですよ。

植垣さんがとつた小学生のメタファから紹介します。ここが多いのは、学校とかテスト、通信簿などを、鬼や悪魔や地獄にたとえているのです。たとえば「学校はエンマ大王のようだ」「学校は地獄の入口だ」「先生は魂をぬきとる死神だ」「点数は数字アクマだ」。またテレビの影響もあって「学校は世界をつぶすかいじゅうだ」というものもあります。あんまりほめているものはないんです。もう一つ強く流れているのは、「学校は子供を囲いこんでいる冷たい所だ」というものですね。「学校は氷のビルディングのようだ」「刑務所」や

「南極」にたとえているものもあります。学校は、自分たちを隔離して、食い殺し。自分を自分でなくする場所である。小学生の受けとめ方です。

高校生に移りましょう。世田谷にある都立高校の二年生です。ここでは学校のイメージは二つに割れております。一つは「学校はたまり場のようだ」「学校は出会いの場所だ」というように、友達をつくるどころだといったイメージです。これをもう少しマイナスのほうに引きよせると「学校はひまつぶしの場所だ」「遊ぶ場所だ」「居眠りの場所だ」となります。これに並んで、「学校は刑務所のようだ」というイメージも強く出てきています。

テストについては、これはもう、全員、悪口メタファです。「テストは死刑台だ」「地獄だ」といったストレートなものから「トイレットペーパーのようだ」というひねったものまで。同時に「本当の自分を変えて評価するものだ」「偏見を強めるものだ」というのもあります。テストがなければ勉強しないのが実態ですが、ほんとうのところ、テストがいやなのか、勉強そのものがいやなのか、その両方が重なっているのか、どうなのでしょう。

大学生の場合、ふり返ってみるという視点が出てくるからでしょう。学校は養鶏所のようだ。えさを与え太らせるが、考えさせない」というように、自分は飼育されてきたん

だなあ、というイメージが新しく登場してきます。民衆文化は、子供を鶏として育て、学校文化は、子供を閉じこめてプロイラーにするのです。

自分たちのことについては、「学生は掃除機だ」と考えています。「手あたり次第に何でも吸い込む。針でもカビでも」とコメントされています。教えられたことをなんでも暗記せねばならない、ということでしょうか。また教科書についてみますと、「ホカホカ弁当のようだ」とあります。ピツタリですね。その心は何だと思えますか（会場から「おいしくない」の声）。その前にもう一つついているのですね。「どれも同じ味だがおいしくない」。

大学生のもう一つの特徴に「学校は工場のようにあります。学校はタイムカードのようだ。何事も時間通りやらせる」というわけです。私は、学校を工場にたとえるのを、大事な見かただと思っております。学校はキマリ・規則を重んじ、自らをマニュアル通りに運営することを通して、マニュアル通りに動いていく子供を育てているわけです。それがそのまま企業の労働者として役立つわけです。いわゆる教育内容を「表のカリキュラム」と呼べば、これは「陰のカリキュラム」「隠されたカリキュラム」と言えるもので、近代学校が果たしてきたもう一つの役割ですね。

たとえ、資本主義のイデオロギーはけしからんという人

も、体のほうは企業勤務者にピッタリと適応するようになっていきます。近代学校は、自然に合わせて動いてきた農民の作法を変えて、工場に合った作法を身につけさせる場所であったのです。近代の工場と学校は双生児のようなものです。そのことを大学生のメタファはみごとにしているのです。

ところで皆さんのほうは——「学校は刑務所のように」「工場用たこ焼器」「教会のようなもの」というのがあります。「学校は鳥もちだ」「テストは網のようなものだ」というのが出てきました。

「学校とはトイレだ……」。このココロは何ですか。(会場から「出たらホットする」の声)。みごと(笑)。学校はずいぶんと重荷に感じられているのですね。

〈学校とはどういうところか——その一〉

まず、学校文化の性格について、です。学校文化の問題はこれまで教科書問題として考えられることが多く、それも社会科教科書に焦点づけられてきたことが多いように、階級的イデオロギーの直な浸透が問題にされがちでしたが、私はこれだけでは不十分だと思っただけです。もっと学校文化総体の性格ないし構造を問題にしなければならぬ。そうした観点に立ちますと、日本の歴史のなかで文化は統治階級の文化と民衆の生活文化という二重の流れをもっていた、ととら

えることができるのではないかと思うのです。統治階級の文化は文字文化を核とし、民衆の生活文化は物質文化—衣・食・住・生産—を中心にして組み立てられてきました。そうして、学校文化は前者を組織し、後者を疎外するという基本的な性格をもってきました。この性格は今もそう大きく変わっていません。少し先走りますが、そのなかで家庭科は、近代学校のなかで上から教科目として設けられたものですが、民衆の生活文化の領域にもっとも近く接近している教科で、むしろこれに根ざすべき性格、あるいは可能性を内包している、と考えるものです。ですから、他の教科とはちがったニユアンス・位置をもっているように思うのです。

さて、学校は奈良時代から作られてあるものですが、その長い歴史をふり返って見ますと、四つの大きな節目に分けられるように思うのです。第一は大学寮以来の奈良・平安時代における公家中心の学校文化。第二は鎌倉時代をへて江戸時代に定置した藩校における武家中心の学校文化。第三が明治の近代学校の導入、そこにおける天皇制モラルと近代科学を両軸にした学校文化。第四が一九四五年の敗戦を転機としたこんにちの学校文化。

論証ぬきで申訳ありませんが、こうならべてみると、学校文化は時の統治階級が期待する文化を組織したものであることがわかります。いいかえれば、国家が学校文化の基本的な

組織者である、ということですが、こんにちでも、「教科に關する事項」を決定するのは監督庁、文部大臣である、と学校教育法二〇条などで規定しています。それと同時に、文化は持続的なものですから、学校文化をとおして教養の型なり、生活への対しかたなりを形成しますと、たとえ政体やイデオロギーの変革を迎えたりしても、そこで培われたものはその人の感性なり発想なりとしてその後も長く生きつづけます。今日のテーマに即していえば、民衆の生活文化を学校文化の不可欠な要素として見れない心性なども、これに該当するものでしょう。

第一、第二の時代は、いわゆる身分制学校の時代です。大
學寮にせよ、藩校にせよ、そこには統治階級の男子のみが通
いました。また、その教育は漢字を中心に行っていました。
このような統治階級の男子は、「男子、厨房に入るべからず」
を旨としました。このような前近代においては、統治階級の
文字文化と民衆の物質文化が分かれ、また男の教養と女の教
養とが分かれていて、学校文化は文化総体のうちほんの一部
——統治階級の男子向けのそれ——しか組織していなかったこと
になります。しかし、大事なことは、このような文字文化Ⅱ
漢学を学ぶことが学校で学ぶということだという觀念ができ
てあり、ひろまっていたことです。そうなれば、日常の物
質文化を学ぶところの「家庭科」が、学校文化の対象である

と見なされていなくなるのは、とうぜんです。

もつとも、江戸中・後期に寺子屋がひろまり、民衆の子ら
が読み書き算を習うようになりますと、しだいに寺子屋の女
師匠がふえ、女子の通塾者がふえて、針師匠とは別に、ここ
では読み書きのほかに裁縫やお茶、生花なども教えるようにな
りました。もちろん、これは女子のみに限られていまし
た。また、寺子屋では、往來物を教科書に使って、地域の生
業や産物についても教えていました。民衆の子供が通うとこ
ろでは、その生活の必要に応じた教育内容を組み入れた、と
いうことでしょう。でも、明治維新後の教育改革のリーダー
になった人びとは、寺子屋で学んだ人たちでなく、藩校や私
塾の出身者でありました。寺子屋のなかに、部分的ですが、
自主的に芽生えた、教育内容に民衆の生活文化を取り入れる
という側面は、見落されていきました。

明治維新を契機にして、日本の学校は身分制学校制度から
近代学校制度に変わりました。これ以降こんにちまで近代学
校が教育の基本形態になるわけですが、このとき、欧米でほ
ぼでき上がった近代学校をそのまま上から導入し、普及した
ものだから、それをうけた民衆のあいだに学校とはこうい
うものだという固定觀念も同時に移植されて、自分たちに合
った学校のしくみを考案したり、自分たちの生活に都合が悪
ければどんどん修正してみようとしたりする、いわば学校教

育改造の實驗精神は育ちませんでした。自力で試行錯誤して作りだしたものではありませんからです。今、この不幸をしみじみ思い返すのです。

明治維新は上からの文化「革命」を行なったものです。それに応じて、学校文化も上からの文化「革命」を蒙りました。日本では、近代学校の導入と同時に、学校文化の内容も一新しました。欧米にはなかった現象です。四書五経に替って、国語と修身が登場しました。和算が洋算に代わりました。歴史や地理の内容も、地域や藩だけに注目していたのが、日本という国や世界というものを見るように変わりました。なによりも、ヨーロッパ近代科学の教授を導入し、重視するようになりました。武家用、町人用、農民用と分断されていた前代のカリキュラムが、大きく、天皇制国家と工業化社会向けのカリキュラムに再編成されていったわけです。このとき、教科目という制度や思想も一緒に導入され、学校文化を構成する単位になりました。これらは〈近代化〉を先取りした内容ですから、時の民衆の生活実態からずいぶんと遊離した啓蒙文化でした。

このような上からの学校文化「革命」を行った中心的な人びとは、簡単にいえば、漢学を教養の芯にもったうえに、ヨーロッパ風の近代国家と近代科学の必要性に目をひらいた武家出身の男性でした。別の表現をすれば、食べること、着る

こと、住むこと、子供を産み育てること、ものを生産することとはすべて他人に委せて、ひたすら天下国家を論じると同時に、男女が別々の教養をもち、生きかたをするのがとうぜんであるという考えをもった男性でした。実は日本がそれを模範としたヨーロッパでも、近代の学問や学校を作りだしていた人びとは、この種の男性知識人でした。

ですから、近代学校文化成立の当初から、農業社会においてはぐくまれてきた民衆の生活文化が学校文化から排除されるということは、当然でありました。このような民衆の生活文化切りすてのなかで、ただ裁縫だけが早くから採りだされてきました。当初は女兒の就学督促のためにあったと思いますが、そのみでなく、男女別々の教養、今流に言えば、性別役割分担の意識が強く働いていたように思います。

女子が学校に通えなかった時代は、学校は男子中心の文化を人間の文化一般であると言って、すんできました。女子の教育は家庭や地域で担われてきました。しかし、女子も学校に行くようになると、学校でも一方では男子中心の文化を中心にしながらも、他方では女子用の、いわば性別役割分担を意識した文化を組み入れねばなりません。それが小学校では裁縫科の登場になったのでしょうか。

これにかかわって、イギリスの小学校の例を——来る車

中、デイムという女性教育史家が書いた『女性と学校』(Women and Schooling) という本をめぐってきましたので、せっかくですから——紹介してみます。イギリスでは、工業化社会になって、男は工場に行き、女は家事に携わるように分業化した結果、労働者階級の娘たちは、小学校を終えると、まず召使いになり、労働者と結婚して主婦になり、母になるというコースを辿る。そのため、家事をうまく切りまわせるよう、小学校に「家庭科」(domestic arts)のコースを設け、一八七二年にドメスティック・エコノミー、一八八二年に料理、一八九〇年に洗濯という教科を次つぎに導入、男子が幾何や土地測量を勉強する時間に女子は縫いものや編みものをするようになった、というのです。資本主義社会は労働者階級をつくりだし、その新しい階級のなかに性別分業がつくりだされたのに応じて、近代学校のなかに家庭科が成立するようになった、という分析であります。

日本では、このような労働者なり農民なりの妻や母になるものとして家事能力をもたせるといふいささか先取りの面と同時に、儒教文化・家長制からくる婦徳の涵養という面がからまって、裁縫 \parallel 家庭科の前身が導入されたのでしよう。いずれにせよ、近代における性別分業の再編成という文脈のなかに、家庭科の成立の起源を求めることができるように思われます。これは高等女学校の内容分析を(中学校と対比し

ながら)行えば、もっと鮮明に見えてくるかもしれません。多少実感風にいえば、近代学校のなかでは、わざわざ上手に編んだり、板にカンナを上手にかけたりする能力より、国語の教科書を上手に読めたり算数の問題を解いたりできる能力のほうが、重んじられました。みそづくりができる子より生物の知識を覚えている子が幅をきかせました。親のしごとをまめに手伝う子より修身の徳目をすらすら言える子が優等になりました。明治以来、学校が子供に要求した能力は、このように国家が教科書として組織した文化の能力であって、民衆の生活文化が培ってきたものではありませんでした。このような学校文化の文脈のなかでは、同じ教科のなかでも、国語や算数より裁縫が下位に見られていくのは、必然です。

これはまた社会の近代化の反映でもありました。学校はもともとからだを使うより頭を使うしごとのほうを貴しとする意識にみちた場でした。それが近代化のなかで、どのような頭を良しとするかその中身を変えてきました。第一に、近代国家の行政により高いところがかかわっていくことを出世と見なすようになりました。第二に、資本主義化のなかで、換金される労働を価値ある労働と見なすようになりました。それも、労働者より技師を高しとしました。近代国家と産業社会を第一におくところで、農業社会が培ってきた民衆の生活

文化を軽んじるのは、あたりまえです。このように社会の仕組みが変わったなかで、長いこと女は公の世界から排除されてきました。また、女のしごととされた家事は労働力の再生産に必要な意味があるというように、意味づけを変えませんでした。つまり、女や女のしごととは社会の陰の部分に追いやられたのでした。このような社会の仕組みや価値観にそって、学校文化は組み立てられてきた、といえるわけです。

近代学校の学校文化も基本的には民衆の生活文化を切ったところに成立しているということを言いたかったです。私自身こうした学校文化のなかで育ち、そのただなかに生きていて、つくづく〈頭で歩く人間〉になっていることを感じています。それに気づいて、私をそうさせた大きな原因である学校文化の性格を考えなおすようになりました。ここでは、家庭科の問題をこのような学校文化総体の性格とかかわらせて考えてみたいと思つたのですが、不十分でした。ご批判をいただきたい点です。

〈学校とはどういふところか——その二〉

次に、学校の仕組みについて考えたいと思います。私の目から見ますと、「進歩的」な教師でも、この点は意外に無自覚であるようです。

さきほどのメタファを私流に使ってみますと、「学校は天

皇である」「学校は絶対主義の社会である」となります。子供にとつて、学校は専制君主であり、教師はその官僚であるように見えます。今、学校は、「こういうことを教えますよ。教えられた通り勉強しなさい」という場所になっているわけです。どういう知識をどんな順序で、どんな速さで教えるかを決めるのは文部省です。学習指導要領はそうしたものでしょう。学校の教育はこれに縛られているわけです。子供の立場からいうと、学習内容の決定も、学びのための方法や速度の決定も、評価権も、すべて学校が握っているわけです。学ぶという最も肝心な点において、子供は全くの無権利状態におかれているのです。このような学校（教師）——生徒の関係を比喩的にいうと、学校は天皇で、生徒は臣民である、というようになるわけです。

竹内好は、日本では一木一草に天皇制が生きていると言いましたが、このように考えますと、まさに学校の中に天皇制が生きているのではないでしょうか。その上学校は処分権を持つているのですね。私は、子供の荒れの究極的な原因は、学ぶことにおける無権利状態にあると思つているのですが、これに子供が不満を持って荒れると、学校は規則にのっとって処分するわけです。よく子供の学習権と言われますが、実際には、学習の義務しか、子供には与えられていないのです。

次は、「学校は能率第一の工場である」ということです。

「学校は天皇」を、国家の論理だとすれば、これは産業社会の論理にあたります。カリキュラムと月間、週間の進度計画、それから時間割、こういう制度は、教える速度を規定しているマニュアルだと思います。しかも、近年、科学の「進歩」に依じて、教える量がふえ、教える内容が難しくなっています。教える時間は限られているのですから、教える速度が、各駅停車から新幹線なみにスピードアップせざるを得ません。私は小学校一年の四月から、中学、あるいは高校三年の三月まで、一本のベルトコンベアが、早い速度で回っているように想像されてなりません。ベルトコンベアから一度落ちたら、進むのが速くて、追いついて乗るのは至難です。なぜこんなに難しいことをたくさん詰め込まなければならぬのか、もつともつと問い直さなければいけない、と思うのです。本当に今の社会で生きていく上にこれだけの知識が必要なのでしょう。学ぶということは、自分の必要が起きた時に、疑問を持った時に、これを追求するために行うという、極めて主体的・選択的な営みであるはずです。学校を離れると、みな、こういう学び方をしていけるのです。それなのに、学校では、テストが終われば忘れるような教え方・学び方が行われている。それは、学校での勉強が子供の生きる課題と直結していないということもありますが、もう一つ、たくさんさんの量の知識を、猛スピードで詰めこんでいくというこ

とがありましよう。改めて、生きていく上に必要な基本的な知識とは何か、考え直すべき時だと思ふのです。

この問題を考える時、教師が教科の枠に閉じこもり、教科を越えて、最低必要な知識の総体とは何かについて、目を届かせないことが問題になります。各教科に盛られている知識を足し算すれば、それが知識の総体になる、という単純なものではないでしょう。大切なのは知識の構造化です。しかし、これについてはあまり考えられていない。学校は教えることにおいて分業体制をとっており、教科目はその現れだと思わざるを得ません。私は学校の仕組みの第三の特徴として、それが分業社会になっていると考えるのです。

みなさんは、教科目について疑問を感じたことはありませんか。教科目相互間に内容的なつながりが配慮されているのでしょうか。たとえば、ある一週、国語、数学、家庭科などで教える内容の間に、同じ問題をそれぞれの角度から扱うというようにつながりをもって、授業が組まれていくことはあるのでしょうか。ありませんね。国語科なら国語科の系統に沿って、家庭科なら家庭科の系統に沿って、それぞれの授業が行われているわけです。他の教科で扱っている内容と自分の教科で扱っている内容とがどのように関連するかということについては、ふだん、あまり考えない。教科毎の系統性はあっても、もしかたないけれど、その相互の横の有機的なつながりは

ないのです。つまり、教科目というのは縦割り文化を制度化したもので、学校はそうした縦割り文化を、ただ足し算したところである。教科目という縦割文化が、学問の縦割り・専門家文化に由来、これに依拠していることは、いうまでもありません。素人が口をはさむことは、はばかる領野になっていきます。

教科目別に分担している中・高の先生はまだ楽でしょうが、小学校の先生はどうやっておられるのだろうかと思えます。疑問もたないのかな。一時間目に分数、二時間目に「コタンの笛」の一節、三時間目に草花の栽培、四時間目にカレールライスづくりといったように、時間が変わるごとに教科書を切り替えて教えるわけでしょう。教科の系統性なんて、日々の時間割の中でずたずたにされて、ふっとんでしまうのが現実でしょう。一時間一時間、違ったことを教えていて、その内容につながりがなくても、なんとも思わないのでしょうか。

教科目は縦割の文化を分業的に制度化したのですが、その反面に、それらが生徒の中で予定調和的に一つの知識体系としてつながるものだ、と想定しているように思っています。生徒の頭の中で、分業が協業として働き直すはずである、と。でも縦割りにされている教科目が、時間割によって更に分断されて教えられるわけですから、生徒の頭の中で知識と

認識の統一的な形成などできるはずがありません。勉強がもしろくないのが、あたり前です。これは子供のせいではない。このような学校のシステムに問題があるのです。

以上のように、学校は、その中にいる子供にとって、絶対主義の世界であり、その上、能率と速度を重んじ、分業システムによって経営されている工場のようなところであります。そうして最後には、テストをやらされて点数をつけられ、等級づけられて、仕上げ(?)られるわけです。通信簿や指導要録は品質管理表にたとえてよいかもしれませぬ。学校というところは必ず点数で後始末をつけるようになっていまして。このことに私たちの感覚もなじんでしまっているのです。思議とも感じないのでありますが、でも、学校において点数をつけることはどうして必要なのでしょう。私はこれに疑いをもっているのです。

昨日の話にもあったように、学校は「正答はただひとつ」の世界ですね。正答はただひとつであるという一元論に立っているからこそ、○×をつけることができます。テストがなりたち、採点ができるのです。こんな世界はほかにあるのでしょうか。世の中の問題は答えが複数であり、時に意見が真向うから対立します。研究の世界でも学説がいろいろあります。芸術の世界も多様な評価に分かれます。生活のしかたも地域・職業・人によってさまざまです。ところが、学校のみ

「正答はただひとつ」という一元的なものさしが幅をきかせている世界になっているのです。

「正答はひとつ」ということにかかわって、二つの問題点を思いうかべます。ひとつは、それが意味論を欠落させるから成りたつのだらうという問題です。単純な例をひきます。日本の首都はどこですか——東京ですという問いと答えのかぎりでは、これは公の約束事ですから、全国一律に正答が成り立ちます。しかし、もう一步ふみこんで、自分（の生活）にとつて東京はどのような意味をもつだらうかという設問をたてると、沖繩の子と東京の子ではちがった内容の答えになるでしょうし、東京の子のあいだでも多様な答えが出てくるでしょう。このレベルになると、そう簡単に○×をつけるわけにはいきません。正答はひとつではなくなってしまうのです。それでも、テストでは強引に○×をつけていくところがあります。それは、採点する人が意識している・してないにかかわらず、ある価値観やイデオロギーに従つて判断を下すからです。お母さんがいつ洗濯をするかの例でいえば、朝洗濯することを正答と判断する底には、「男は仕事、女は家庭」という性別分業のイデオロギーが流れていましょう。子供それぞれにとつての固有な意味——答えを消して、あるひとつのイデオロギーを押しつけていくわけです。いずれも実生活から遊離しているから成りたつ「正答」なのでしょう。

テストは、基本的には、このような「正答はひとつ」という世界観を暗黙の前提にして、成立しているものでしょう。そのうえ、テストを作る人も採点する人も教師です。学校がテスト権、評価権を独占しているわけです。教師の教えたとおり、考えているとおりの答えを書かなければ、パッテンを喰うわけです。このような文化・学習の面でも、教師(学校)は絶対君主で、生徒は無力な臣民であります。教科書や教師に合せて答える——このような子ができる、子とされていくのですが、別の見方をすれば、自分にとつて事柄がもつ意味を探索する学びかたを放棄して、文化的に非個性化させられていくのではないのでしょうか。〈知〉における自立性の喪失であります。テストして点数をつけることは、このための強力な武器として作用します。

私は、点数をつけられないようにするためには、テストの問題を変えることはもちろんですが、それ以前に点数がつけられないような授業をつくりだすしかない、と思つています。そのためには、教師が知識を独占してそれを教える、生徒はなにも知らないから、それを習つて知識を受容していくといったような教える——教えられるという知識詰めこみ型の垂直関係をやめて、共同の学習課題を設定して、教師・生徒が共に追求していくという、いわば課題提起型の横の協働関係に変わっていかねばならない、と思ひます。教師は教える人

から課題の提起者、知的挑発者、知的組織者にその位置を移すこととなります。そうなれば、〈中央〉がつくった教科書を与えられて、これをう呑みにしていくことから、共同の課題を探索していく過程で生徒一人ひとりが〈自分の教科書〉をつくり、もっていく、というふうに変わっていきます。このような作業のプロセスと成果を点数で表示することもできなくなります。

たとえば、あいうえおの学習にしても、これを記号としてのみ教えるならば、短時間ですが、またテストしてできたかできないかを点数化することができます。しかし、「あ」なら「あ」という仮名文字を、子供の生活のなかから「あ」のつくものを発見させて、「あ」の使われかたを考えたり、「あ」という仮名が作られてくる過程を追ってあれこれ考えていたりするような授業をすれば、時間はかかりますが、クラス全体の共同作業になりましょう。おのずと点数はつけられなくなります。また、このような方法をとれば、なによりも教師が勉強のし直しを迫られていくでしょう。こうなれば、今のような早く早くとせきたてるようなカリキュラムが桎梏になってきます。家庭科にかかわっていえば、モノづくりの授業などを行なえば、安易な点数化はできなくなるでしょう。

私の授業の例で言いますと、自分と自分の父母と祖父母、

三代の教育体験を聞き書きし、それをモトにして教育史を考える、という授業をしてきました。この記録に対しては、点数をつけることはできないのです。それぞれに違った歴史―生活と教育の経験―を持っており、それぞれに个性的ですから、それに対して五段階評価なんてなりたないわけです。それに、北海道から沖縄までに住む各家庭の生活史が記録されてくるのですから、私にとつてたいへんな勉強になります。教室が、教師が調べたことを吐き出す場から、教師・学生が共に調べ、なにかを吸収する場に変わります。

最後にもう一つ、学校の制度的な特徴を加えますと、学校は、一方で点数をつけて生徒を序列化して差別するくせに、他方では規格化・画一化をしつように追求しているところがあります。学習指導要領―教科書が中央集権的に決められることによつて、全国どこでも「ほかほか弁当」のような画一化された内容になっています。四月になれば、北海道でも沖縄でも「桜の花が咲く」わけです。

それと同時に、問題にしたいもう一つのこと、学校は「集団」単位で動くところだということです。学年制、学級制がそれを制度化しています。授業でも、課外でも、学級単位、学年単位で、いわば足並みそろえて進むことを原則にしています。制服まで決められてくると、いやでも「第一小隊、前へ進め」といった軍隊を想定してしまいます。

たとえば、朝礼です。朝礼とは子供にとって何か。学生のメタファをひきますと「朝礼はドミノ倒しだ。並ばせることに意義がある」というわけです。軍国主義反対と先生は言いながら、自分の学校の中では、軍隊と同じように整列させる。乱れたりのみ出したりする生徒に対しては、ちゃんとしろと叱るわけでしょう。「集団」として、と言えばかっこいいわけですが、実際には画一的・規型的な行動に陥りやすいのです。

ついでにもう一つ学生のメタファを紹介しますと、「学校は一触即発の戦前だ。みんな不平不満をかかえておとなしく坐らされている。反発したい時期なのに、反発すると要注意のレッテルがはられる」というのがあります。学校は一九三〇年代の日本なのだ、と見ているわけです。悪口ばかり言うようですが、子供の目から見たら、組合員の先生も、そうでない先生も、足元の問題のところでは同じように見えてくるようです。

このような学校の仕組みを見てきますと、私には「憲法、校門に入らず」という感慨が湧いてくるのです。学校では、たしかに憲法を教え、さまざまな権利や自由を教えています。ところが、表現の自由を教える先生が生徒会の新聞を検閲して、学校の方針に合わなければ修正させたり、出させなかったりする。拷問は禁止されていると教えていながら、

体罰を加える。差別は許されないと説く一方で、点数をつけて子供を序列化する。子供の側から見たら、教師が教えていることと実際に行っていることはちがっている、と映らざるをえません。このようなことで、はたして憲法は学校のなかで活かされていると言えるのでしょうか。

〈学校の文化・仕組みを考える〉

林竹二氏は、学校は子供が生きられない場所になったと言っておられますが、私も林さんとはちがった以上のような理由からですが、同じような想いをいだくようになっていきます。私は、学校が子供の生きられない場所になった原因を学校の文化とは仕組みのありようのなかにある、と考えているわけです。

子供の成長と学校のありかたが合わないことがはっきりしてきたとき、変わらなければいけないのはどちらの側でしょうか。いうまでもなく、学校の側がそのありかたを変えねばなりません。

しかし、これは気が遠くなるくらい難しい課題です。近代学校は本来善なりという「信仰」がひろく定着しています。そのうえに、学校のやりかたに子供のほうが合わせるのが当然だという、長年培ってきて今ではからだに浸みこんでいる学校(教師)の体質というものができあがっています。さら

には、子供は未熟な存在であるからこれを教え導かねばならないという、これまた骨がらみになった使命観というか、考え方が根づいています。

未熟だから、教えることやしつけることが必要である。啓蒙されるべき存在であるから、学ぶことを選ぶ自由もない。私は「未熟だから……する」という、その後半部分「……する」の中身を変えて考えることが大事だ、と思うのです。子供は未熟だから、好奇心が盛んである、疑問をどんどんだす、いろいろ体験したがっているというふうには、後半の文脈を変えてみると、子供が学ぶことを選び、追求する主体に位置づけられてきます。学校のありかたを変えるということは、このあたりの思想の転換から始まるものだ、と思うのです。

ちなみに私は、『エミール』の思想と近代学校の思想とは異質だ、と考えております。近代学校の制度・思想はルソーの思想を否認してきたとさえ感じています。日本では、柳田国男が学校を批判して子供の疑問から出発することを説きました。戦前の生活綴方運動にも、国家の教義と言語（＝標準語）を注入する場としての学校の思想に対して、地域のことを使って自分（の生活）を表現しながら生きる課題・学ぶ課題をつかむことが試みられていました。学校の思想と教育（子供を主体におく）の思想を識別して見る必要を痛感する

ものです。

子供と学校が合わなくなったら、学校のほうを変えねばならない。いくら難事業でも、思想上・見とおし上のこととしては、こう考えるしかありません。そうして、私の考えからすると、学校を変えるということは、学校の文化を変えることと学校の仕組みを変えることを両方一緒に行っていくことにほかならない、というふうになるのです。

たとえば、家庭科で「そばづくり」の授業をやるとしましょう。これは総合学習、地域学習として取り組める内容をもっています。だれがそばの実からそばを食料として発見したのか、わかりませんが、そばの栽培の歴史、食料として加工・料理してきた歴史、これらに必要な道具の歴史などを地域・日本・世界に即して勉強しはじめたら、教科の枠をこえ、またカリキュラムどおりの運行を破らざるをえないでしょう。さらに、そば粉からそばを作っていくにしても、うどん粉をまぜてこね、メン棒でのぼし、切り、ゆで、きれいに玉にして、汁をつけて食べるところまで実習してみようとする、四五分区切りの時間割ではできないことを、だれでもすぐ気づくわけでしょう。何か一つの課題に取り組もうとすると、カリキュラムや時間割による拘束が邪魔になってくるわけです。これは一つのたとえにすぎませんが、学校の文化を考えることと、学校の仕組みを変えることとは、一緒に結び

あわせて考えなければならぬ課題としてあるのではないでしょう。

学校の文化と仕組みを共に変えていく——このような学校変容の道すじのなかで、教師と子供がどのような文化を選び直し、学びながら、自分たちのなかにそれを自分の文化として創り直していくのかという問題が、最初に考えられるべき問題です。この内容に即して、教科目の枠をこえた総合学習として取りくまれたり、時間割を伸縮したりするようになってくるでしょう。

さきほどもふれたとおり、私は、文字文化と近代科学を中軸に編成されてきた学校文化の構造に対して、民衆の生活文化を再吟味して、これを軸にした学校文化の構造を組みかえていく必要を感じているものです。たとえば、ものづくりを芯にした授業は、そのさいに重要な内容になるのでしょうか。

総合学習、課題学習といった形態が重んじられてくるでしょう。

もちろん、これらは近代の諸科学を否定するものでなく、諸科学を子供の成長と生活の課題から結び直していく試みを意図しているものです。近代科学の論理は分業（＝専門）と分析の論理を特徴としています。そして今、専門化はますます細分化しています。それらの成果が大きく各学問分野別にまとめられて、教科目のなかの学習内容として取りこま

れているわけです。各分野の研究が深まれば深まるほど、その成果をもちこむかたちで、教科目ごとの教科書の内容が「高度」化してきたのが、これまでの姿でした。しかし、私は科学の論理と教育の論理は異なるべきものだと考えているのです。教育の論理は分析の論理ではなく、それを活用しながら新たな総合をつくっていく総合の論理であります。総合とは、諸科学の成果を足し算して得られるものでなく、モノやコトを関連づけてとらえていくことであります。モノやコトを関連づけてとらえていくには、なんでもかんでもを取りあげるのではなく、子供の疑問や生活から生じる大事な課題を選んで、それに焦点づけて行なうなかで、科学の成果を「自主編成」していくことが必要です。総合学習や課題学習はこうした総合の論理に基づくひとつの学習形態でありましょう。

教科目の思想は足し算の思想だと思うのです。でも、それではうまくいかないことは明らかです。たとえば、稲（および米）の例で考えてみましょう。調べていないので具体的な内容は不明ですが、後で教えていただきたいのですが、「義務教育」のあいだ、稲については家庭科で扱うだけでなく、歴史でも理科（生物）でも、国語でも扱っておりましよう。ただ、それらはまちまちの学年時に、科目それぞれの文脈のなかで互いにかかわりなく、教えられておりましよう。

そうして、多分、稲に関する部分だけを抜きだして、その知識を足し算すれば、そこに稲についてのまとまった知識の体系ができる予定になっているのでしよう。教える側の目論見はそうであつたとしても、テストが終われば忘れないと生きられないような教えられる側においては、部分化された知識を総合する余裕も力もないわけですから、目論見どおりと運んでいないのが実状でしょう。壮大なる知的浪費であると思わざるをえないのです。ところがこれを総合学習のテーマにすえて、稲の起源や分布の流れ、栽培の歴史（品種改良、生産道具、気候、地味柄……）、調理の歴史（主食や菓子、調味料など食文化の歩み）、生産関係や労働の問題などを、集中的に実習と学習を交えて取り組んでいくならば、否応なしに、稲についての総合的な知識の体系と認識が形造られていくにちがひありません。さらに、稲作―米食文化圏を見ていけば、世界へ目がひろがってまいります。実際に稲をつくり、脱穀し、調理すれば、からだを使い、道具の使用を覚ええます。地域の農民が先生になってくれます。こうするなかで、稲を焦点にして諸科学の成果が結びなおされ、子供のなかに〈総合知〉として根づいていくでしょう。

学校文化に流れている論理の基本を、分析と足し算の論理から関係性のなかでモノやコトをつかむという総合の論理Ⅱ教育の論理に変更することを思うのです。科学の成果を教え

るという上からの啓蒙の思想から子供の疑問や課題を主体においてその視点にたつて科学の成果を結び直していく教育の思想に移るべきことを思うのです。そのように思うとき、子供の疑問や課題は生活のなかに根ざしているものですから、それを引き出し、それを課題化していく大事さを感じるのです。こうすれば、そこにならず、学校文化が打ち捨ててきた民衆の生活文化が子供の関心・興味をひく学習内容として浮かんでくると思うのです。それは民衆における生活と教育の結合をもつとも原点的にさし示すことになりましょう。



参加して

◆全体会の「吉田清彦さんと語り合おう、食を見直す中から教育を考える」では、タイトルどおりになれば、とても良かった、と思います。吉田さんが話を終えて席にもどってしまったのは、教えるもの・教えられるものという関係が嫌だという意思表示だと思いが、一人ひとりが対等の立場で吉田さんと語り合うというにはふさわしい形になっていなかったと思います。吉田さんが理想とする形を実現するにはどんなスタイルがよかったのか。吉田さん自身に、教え・教えられる関係でなく、語り合う関係とはどういうものかを具体的に考えて行動してほしかったし、Weのスタイルの追求もこれからの課題だと思っております。

しかし、この全体会は「コーヒー、紅茶はどちらがカフェインが多いか」という問いに発して、みごとに教育を考える会になっていったと思います。家庭科では科学的なデータを

生活の視点で教える必要性、成分表のデータだけを頭に入れてしまっている教師の問題性を、鋭く突いていたと思います（私も紅茶に手をあげました）。

（静岡・望月一枝）

◆今回の全体会のテーマはとても親しみやすく、去年のそれよりずっと楽しみに聞きに行く気を持たせてくれ、又実際にそうでした。

食については私自身も、有機農法の野菜の共同購入をやっているものですからたいへん興味もあり、吉田さんのお話も身近な問題を語りつつ、重大な内容を含んだもので、私にはよかったです。会場の反応が今一つだったのは何故でしょう。コーヒーと紅茶の質問は作られる常識のコワサという点で大変重たい内容を言っているにもかかわらず、自分の答えの正しさを講師の質問のワルサのせいにし、その重大問題には目もくれなかった教師の態度でガツカリしてしまつたのです。

細かいこと言えば質問の仕方が悪かつたのかも知れないけど、でもあの講師の質問は、フツツの場面でフツツのしかたと思えました。もっと大切なことは別にあるのに、自分の正しさを証明するためにあんな風に講師を責める度量のなさに、教師の体質を見る思いがしました。質問のしかたが多少緻密さを欠

いていたとしても、もっと大切なことを伝えたい、伝えようと思っている講師に対する思いやり、会場の雰囲気づくりへの考慮がもっとあつていいのじゃないかと思えます。

大人にとつての食は全く個人個人の問題にとどまるとしても、知的活動を含めすべての活動の基礎となる健康な体を、育ちざかりの子供たちに与えることがまず第一の使命と考えている私には、少なくとも教育の現場にいる先生方の食に対する問題意識の薄さにア然としてしまつたのです。明日に生きる子供たちによりよい何かを与えようとするなら、食の問題——今、それが危機的であればある程——に先生方、母親、すべての子供たちのことを考える大人たちは目をつぶっていられないはずなのに……。

そしてあの場がいみじくも原子力発電所の話が出たように、食の背景には今の社会がかかえているあらゆる問題が控えていて、知れば知るほどその広がりや奥深さに驚かされるのですが……。一体あのさめた反応は何だったのでしょうか。私一人がホカホカと頭から湯気を出しているのかな？ とにかく、もっと吉田さんを囲んで話せたら良いのになあという思いが残りました。（東京・蔵合里子）

◆吉田清彦さん、小沢有作先生のお話、ありとありがとうございました。視野が広がり、自分の世界が少しだけですが、確立できたように思ひ、明日からの糧にしたいと思ひます。

(山梨・斎藤由美子)

◆小沢先生の講演、私は家庭科の位置を整理出来、得ることも多かったです。

また、交流会の時ご自分が大学で実践されていることをお話しして下さいましたが、個として自立し、スゴイ人だと思ひました。今の時代、問題に一人でも立ち向かっていく人が本場に必要だと感じます。でもちよつと意外であったのは、先生が学校メタファを私たちに書かせた時、教員も、学生生徒と変わらないと思ひ議がっておられました、私はその方が意外で、現代の矛盾がうすく学校で教師をやっている人間が、学校を理想郷、温室のように思えるわけはないし、その中で教員のノイローゼが激増している現実を先生はご存じないのだろうかと思ひました。

まだいろいろ感じましたが、主な点はこの二つです。Weにはいろいろなかかわり方をする人があつてこそ生き生きとしたものがあふれ、広がりもあると思ひますが、新しい家庭科を創る視点は貫かれていなくてはならない

と思ひます。そこをお互いどのように理解していくかが問題だと思ひます。

(静岡・加藤千恵子)

◆小沢さんの問いかけは、学校に身をおく教師の心をどこまでゆさぶつたのだろうか？

教師の職業的病である責任転嫁をやめさせれば、そこに教師の本音が出てくるような気がする。文部省を批判しても、学校制度を批判しても、何ひとつ変わっていかない事実を、これ以上やり続けるのは、ひまな人にまかせておけばいい。

楽観的に生きたいと願う教師とのつながりが、このフォーラムに参加してできたような気がする。またまた元氣になつてきた。学校制度の企画を、次回には……

(東京・平井雷太)

◆去年より楽しく思ひました。どうしても、大人数でばかりの討論ですと、話が分散し、なかなか自分の意見がまとめられず、従つて、発言しにくくなつてしまひます。その点今年の分科会方式は、それぞれの人に発言のチャンスもあり、集中した話し合いもできて充実感が残りました。

講演会については、時間の関係もあると思ひますが、お話だけではなく、実践的なこと

をやつた方がよいのではと思ひました。どちらの講演からも刺激された部分は多くありましたが、教員なんてもんはこうだといふ決めつけがあつて、「教えてあげる」的な感じになり、結局、教える、教えられるの型からぬけられなかつたのでは。来年は実践の話聞き、そこから討論へともつていけたらと思ひます。

(錦 真理)

◆教科の研修会などで、ねばならないなスタイルは好きではないので、参加したい人が参加する、話し合いたい内容の所にフラツと入つていけるような雰囲気うれしかつたです。フォーラムの参加に関しても、一泊でも可、半日でも可ということ、いろいろな状況の人たちが参加できますが、この運営が赤字にならないのか、ちよつと心配です。

小沢先生のお話は、とても興味深く、考えさせられることが多かつたと思ひます。時間に制限なくお話がきけて、話し合えれば尚よいと思ひますが(夜の「この指とまれ」には参加しました)。

皆さん、努力なさつていますね。まだまだやれることはいっぱいあるのですね。

係の皆さん、ごくろうさまでした。

(東京・佐藤真貴)

Ⅲ、いま、家庭科をどうする

「家庭科の部屋」で

入江 一恵

この夏、二通の手紙を受けとった。

「家庭科の男女共修問題もいよいよ舞台にのぼりましたね。興味深く見守っています」

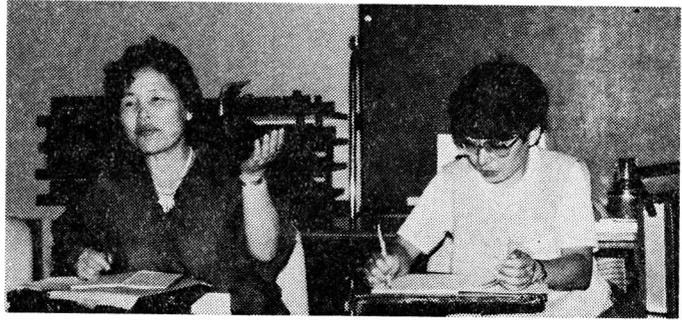
「いよいよ共修ですね。先生もますますお忙がしいのでは……」

二人とも退職した他教科の元同僚である。改めてマスコミの偉力を思いながらも、一方で、情熱が熟せば熟す程、それを阻もうとする動き、露骨な発言、今もって先へ延ばそうと

する逃げる姿勢、私の周囲にもひしひしと天王山の闘いが迫ってくる。

この重大な時に、フォーラムの初日の夜開かれた「家庭科の部屋」での司会という大役にいささか緊張気味で会にのぞんだ。与えられた時間は夜七〜九時までの一二〇分、参加者二九名。兵庫Weの会でもいつも時間不足、兵庫の二の舞をやってはいけないと肝に銘じて、一人二〜三分の自己紹介と家庭科の現状報告、最後に三〇分程度の交流討論の予定ですすめた。

はたして息せきききっての各現場の報告。岐阜の富田女子高校で一般教養科目として「女性学」を開講していると聞くと、そこに至る校内での取り組みを問いかけたくなる。神奈川では、官製の共修研究会があり、父母、教師対象にアンケートを実施、その結果が語られると、私の県では共修の内容研究を十年前から続けていながら、ここに来てアンケートをとることすら官製研究会では実



現しなかった現状を考え、それはなぜ？ 市民団体の動きと家庭科教師とのかかわりなど、すぐに質問したくなる。司会者の個人的願望はぐっとおさえて次にすすめる。

熊本の桑畑さんの迫力にはただただ——。'60年'70年代と教組を中心しながら共修をすすめる、その実績があがる中で現在は官製の研究会でも共修の話ができるといわれる。

家庭科を理解してもらうには私を理解してもらおうしかないと考え、人がいやがる部活顧問を引き受け、公開授業をして訴え、やっと三年選択家庭一般を共修にこぎつけたと語る新潟の高橋さん、ここでも必死にもがいている人がいると共感する。

しかし、なぜ家庭科教師はここまで教科内容の研究、実践以外の外濠の所でエネルギーを費やさなければいけないの



か、フツと疑問がよぎる。終わりに、「家庭科では行政、同僚の無理解がでてきて、なぜ子供の話が出てこないのか」とグサリと心臓をつきさすような小沢有作氏の発言に私はうろたえた。家庭科の問題は、フォーラムに集まった人たちの周辺でさえ、各県、各校でこんなにも状況が違っている。そして共修へ足がかりをつかむための取り組みもさまざまである。もっと聞きたい。話し合いたい。不燃焼の塊を胸に残したまま終わったが、それは次の段階へのステップとして勇気づけられ、きつと地道な闘いが各地で展開されていることを信じ、祈りたい。

討論から

三十一名が参加。まず自己紹介と家庭科の現状を報告しながらすすめられた。途中半田さんより、「問題がさまざまで、心ゆくまで話しあう時間がないが、きょう知りあえたことを問題交流をするきっかけにしてほしい。また、違う立場の部屋の人にも家庭科の問題を投げかけてほしい」と提言があった。

参加者の思いやおかれた状況をうまく伝えられるか心もとないが……（全員の意見が入らなくてゴメンなさい）。

〈各府県の様子をかいまみると〉

。埼玉 私市では、中学校の官製研究会ががちりまどまっております、違うことをするのにうしろめたさを感じる。
。大阪市の小学校の研究委員もつとめているが、新しいことを試みたり、楽しくやっという実践が切りすてら

れ、指導要録通りで技術をきっちり指導する教師がい教師という雰囲気がある

。都立高校勤務 今年のテーマとして必修にむけての研究を提案したら、指導主事から、先走らず、今の授業をしつかりやりなさいと止められた

。静岡の高校勤務 普通科受験校では専任が配置されず、時間講師ですませている。校長から、女子必修の署名をしろといわれた。女子必修死守といった感がある

。岐阜県の研究会では、女子必修が強いわれ、男女必修が育たない

。福井の中学校 男女共修に関心のある人は少ない。まわりの家庭科教師の意識として、本当は家庭科をやりたくない。他教科にかわりたいという雰囲気がある



。大阪豊中市の小学校 官製の研究会で自由な雰囲気の研究ができてはいるが、中学校での共修がたち切れになっていく。家庭科は産休に入る先生が専科にされるケースが多い。奈良の私立高校定時制 校内では、73年からの男女共修が定着してきているが、県の研究会でもっと訴えないといけない。奈良の研究会では、共修についてふれたくない状況がある。

。岡山 県の指導方針として母性主義を大切にすることがあり、共修はむずかしいが、男子に教える家庭科の教材研究講座があり、六名の同志を得て共修をすすめるための研究をはじめた。

。兵庫 73年ごろから共修に耐えられる内容を研究していったのに、共修の実践がみられない。官製研で共修のアンケートもとれず、私信でとっている。

。神奈川 官製共学研究会がある。共修問題を父母・教員対象にアンケート、家庭科教師の70%が共修に賛成、父母の60%が男子にも教えるべき。ただし四割が家庭科で二割が社会科やホームルームでという意見。

。熊本 中学校二〇八校中全面共学四校、部分共学三五校。高校六〇校中一三校が男女共学（普通科は一校だけだが）。現在では官製研究会でも共学で自主編成の教材の発表をしている。高校家庭部会でも七、八年前から共学に取り組ん

でいる（なぜ共修がすすんでいるかは、「この指とまれ」でも話された。82ページでくわしく報告する）

〈共修への校内での取り組み〉

。埼玉（柴田） 新設二年目の高校へ今年転勤、前任校でも男女共修問題の職員研修をやっていた。今年も分会合宿で話をしてくれといわれている。校内のカリキュラムに位置づくまでいっていないが、来年から選択保育・食物を男女共修でやる予定。

。新潟（高橋） 県全体として保守的な体質がある。現任校で五年目、涙ぐましい努力を続けて校内で少しずつ理解されるようになった。家庭科を理解してもらうには私を理解してもらえないと考え、人のいやがる部活顧問もひきうけ、公開授業を続け、家庭科の内容を理解してもらう。調理室や被服室の公開など、共修問題を職員会議で投票。共学に賛成四四名（来年からの共学は早すぎる二八名、すべて賛成一六名）反対七名という結果であった。来年三年の家庭一般は選択で共修となる予定。

（夜の「この指とまれ」でもさらに報告された。参加者の中でも、共修を願いながら、校内での取り組みにこれほど力を注いできたか反省させられるという声が……）

〈男性参加者よりの発言〉

。東京（小学校教師福田）家庭科の教員になって六年目、家庭科の共修に賛成。だが、男子の教師が家庭科をもっとやっていたのでは

。都立大（小沢）今日の集まりでは男女共修問題で、行政・同僚たちの無理解が出てくるが、部落・在日朝鮮人の生徒とかかわる教師の集まりでは、子どもと取り組んでどう変わったかという話が出る。ここでもそういう話が出たらさらにいい。守るのにせいっぱいで、家庭科の教育内容を学校の問題（給食、制服など）にどうせめこんでいるのが聞きたい

〈その他〉

。私立女子高校 一般教養科目として女性学を担当、家政科は実技を%やっているため、女生徒の中に作られた役割意識が強く、どうやっていくかが大きな課題

。熊本の中学 二年まで共学、一部でも別学があるとやっぱり家庭科は女子の教科だという意識がもたげてる。Weの会は家庭科教師だけでなく、一般の人が集まっているからいい会だと思ふ。子どもたちから教えられることが多く楽しい

家庭科のあり方が問い直され、せっぱつまった時期であるだけに、出された問題を深めたいと、「この指とまれ」で、話し合った。

へ「この指とまれ」（八月七日夜「家庭科の部屋」をひきついで）

十数名参加、最初大阪の神崎さんより住を教育の中でどう教えているかについて質問があり、各校の状況が一時間近く話し合われた。住宅事情の悪さに比べ、住はまだこれから手をつけていく分野であると感じた。熊本の方より、生活者を育てる、体験を通して教える、一つの領域を深めて、調べさせたり、書かせたりしているとの報告があった。

後半、家庭科にとってせっぱつまった今の状況の中で、何をなすべきかが話し合われた。共学・共修のとりくみが進んでいる熊本サークルから、これから私たちがどうしていけばいいか多くの示唆が得られた。

。熊本（桑畑）なぜ共学共修がすすんでいるか

歴史…60年代終わりから共修に取り組んでいる組合を中心とした先輩がいた。70年代はじめから実践もはじまり、その歴史をうけついでいる。家族史研究会の実践家がいる。女子教育がさかんという背景

家庭科サークル…教員二四五名中六〇名組織、数は力、現

在では官製研究会でも授業研究は共学が定着し、自主編成の教材が文部教研でもでき、他の教師にも影響を与えている。日常のサークル活動は年10回土曜の午後、夏休み冬休みには一日、中高交流会。の他、家庭部会総会・役員会へのピラマキ、新聞への投書など。

地域の親たちに支持されるような実践が共学を支える（ある事例より）…81年より全面共学していた中学校で、技術の教師の転勤により、共学できない状況が生じた。地域の親たちが共学にしてほしいと校長に頼みにいき、その問題が地方紙にのり、一般の親たちも立ち上がり共学を続けることになった。その背景に、家庭科教師が地域に出かけ、親たちにも授業でやっている家庭科の内容を教え、家庭科

参加して

◆「この指とまれ式交流会」は、Weの一人ひとりが自由に自分を主張し交流できる会とした

についての理解を深めていることがあった。一般の親たちにわかってもらえるよう、家庭科教師が努力をしていかなといけけない。

熊本の土地柄からすすんでいるのだとやらやましがっていった私は、サークルのメンバーのたくましい活動をきき、自分に何が出来るか、出来ることからやることを教えられた。

各地域の家庭科のおかれている状況には厳しいものがあるが、まず自分にやれることを始めることが状況をきりぬけるカギであることを学んだ。

文部省の家庭科教育検討委員に自分のことばで訴えるハガキを出そうとも提案された。（まとめ・小山和代）

て、もっと積極的な位置づけで夕食のあと立候補を募ったほうがよかったと思います。私が出た家庭科の交流会では、特に新潟の先生の活動に「よくやっつてはるなあ、苦労してはるんね」と言われた神崎さんの言葉が印象的でした。神崎さんの「いったい住生活はどうなっているのか」という質問から発して、こういう形で交流が深まるのが、これからのフォーラムのめざす一つのスタイルになるように思いました。（静岡・望月一枝）

◆テーマ別の交流では「家庭科の部屋」に出席しましたが、自己紹介だけに終わり、残念でした。小中高の先生方が、全員で一つのことについて話し合うことは困難だと思いました。できたら小・中・高よりひとつずつぐらゐ問題提起された後に、小・中・高の各分科会ごとに話し合い、最後にどんなことが話されたか、全体に報告したらどうでしょうか。

（山梨・斎藤由美子）

家庭科の現状を

どう切り開く

芦谷 薫

今文部省は、女子のみ必修は差別撤廃条約批准に抵触しないとの主張をとりさげ、十六名から成る検討委員会を発足させました。委員の構成は女性七人、家庭科関係者七人。この検討委員会が十二月までに月一回会合を開いて答申を出すという予定です。この答申をもとに新しい家庭科の方向が決まるもようです。

家庭科問題検討委員のところや文部省へは、全国高校長会、家庭部会、PTA連合会、指導主事等の首頭で動く家庭科教師たちから「現状維持」の要請書や要望葉書が送られているようです。

もちろん、共修を願う人たちからの要望書やたくさんの署名も届いています。さらに「現状維持」は、文部省が現行を見直すといっているのですからあり得ませんし、文部省も、女子必修を唱えている人たちも、家庭科をなくしてしまおう

とは思っていないわけですから。

そうすると、〈現状維持に近い形〉という線が浮びあがってくるわけで、形式上は男女平等、実際の現場の運用でほぼ現状通り、という形をとることが考えられます。いわゆる『第三の方法』と文部省が当初から発言してきたことですが、他教科と抱き合わせて選択必修という形です。どの教科と組み合わせるのがミソですが、仮に体育(格技)と組み合わせれば、ほとんど現行通り、苦しまぎれに芸術などということになると大混乱。

そもそも、同一教科内の選択必修ということならともかく、他教科とドッキングなんて筋が通りません。そこで、文部省は家庭科を職業教育として位置づけているので、職業科目ならばどうだ、なんてこともあり得ます。

現状維持論者の主張は、中学校の共修が不完全なのに高校では無理、臨調路線のなか、財政的に共修は無理ということですが、では、中学の今の一部乗り入れを完全共修に、とりあえず家庭一般二単位男女共修という主張にならないのが不思議です。

今あなたに出来ることは、①共修要請、共修への具体的方法をばがきに自分の言葉で書いて検討委の各氏に送る。②教師ならば、生徒父母の声、実践記録を検討委の各氏に、そして文部省に送ること。今すぐに！



討論から

●性による役割分担を変えていくという願いと、生活が軽視され、

生産や能率が重視されている今の社会を変えていこうという願いの中で、家庭科のかかわりがどうあるべきかということを考えてときに、中学校で一部分だけ共学を実施してもそれではたいして効果がないのではないだろうか。何故ならば、一部分だけ共学をしても、相変わらず女子が家庭系列を多くやり、男子が技術系列を多くやれば、結局家庭的なこと、生活にかかわることは女の仕事だ、ということが定着してしまふ。家庭科も他の教科と同様、人間形成の上で重要な教科なのだから、共学にして当然である。そして、このことを制度的に確立していかなければならない。しかし、これは家庭科教師だけの力では動かせるものでないから、地域を、一般

市民を巻き込む必要がある。いろいろな市民運動の場で、家庭科の男女共学の意義を、その人たちの運動と重ね合わせて話し、理解を深めてもらいたい。また、地域の中だけでなく、『家庭科の男女共修をすすめる会』のように、全国規模で一般市民を巻き込むことも必要。とにかくみんなでやっつけていかなければならない。

家庭科の男女共修をすすめていく上で、どのように説得したらいいかを考えたときに、正論で押していくのも一つの方法だが、生活の中の楽しみや喜びとつなぎ合わせて重要性を説いていくという方法もある。ひとりひとりが自分の生活とのかかわりの中で、家庭科とどのようにパイプをつないでいくか、ということを考えてほしい。

●家庭科の教師は枠から解き放たれてほしい。家庭科



という視点から学校の中の問題性を指摘してほしい。学校の中にある食・衣・健康といった生活文化が特殊なものになってしまっている。その特殊性を家庭科教師こそが打破することができる。また、今の家庭科は「現在」が中心だが、歴史的な流れにも着目してほしい。さらに、今家庭科が直面している問題は、世界的なものであるから、世界的視野に立って考えるべきだ。

●家庭科に対する家事・裁縫科というイメージを早く払拭しなければならぬ。まずこの垣根を乗り越えることが先決だ。また、今は家庭科が生き残るかどうかの瀬戸際であり、非常に切羽詰まった状況にある。家庭科教育に関する検討会議の委員に共修を要望するハガキを送るなどして、個人的にできることをどんどんやっつけていかなければ――。

●人間の生活の歴史、成り立つ過程をみていくのはおもしろいものだ。今の家庭科は、産業社会の結果的なことをかじっているにすぎないが、人間の生活の歴史をたどっていく中で、家庭科のイメージを広げることができないものだろうか。

●家庭科は現実を知らなすぎる。今や、過去にたちもどることはできないのだから、現代の視野でくらしを考え、健康を考えていかなければならない。現実の問題になっている親子の問題、結婚の問題、家族の問題といったことを、生徒と

いっしょに考えていけるようにならないと、今の家庭科は何の魅力もないものになり、現実の生活からますますかけ離れたものになってしまう。家庭科の視野を広げることと、現代的にすることが、今家庭科に求められていることだ。

●家庭科教師は今、家庭科が直面している問題を、危機感を持って、もっと一般の人々に広めるべきだ。今ここで、家庭科が選択にでもなったら、取り返しのつかないことになるのだから。

●他教科と違って家庭科は解放区だと言われるが、はたしてほんとうに解放区たりうるであろうか。家庭科は、その時代の政策を最も担わされてきた教科である。高度経済成長期においては、モータリゼーションを支える主婦を養成し、大量生産された商品を大量消費する消費者を作ってきた。管理教育は最も弱いというところに押しつけてくるが、もし今家庭科が選択になったら、今度はできない子、落ちこぼれた子を家庭科で面倒をみるという発想も出てくる。生徒はみじめな思いをして家庭科を選択しなければならぬ、という状況になれば、私たちがめざしている家庭科からますますかけ離れてしまう。家庭科の授業を受けた男の子の中に、「社会を急に変わることはできないが、自分の生活を変えること―家事に携わる―で性別役割分業のない社会が作れるのだ」という感想を書いた子がいた。全ての男の子と女の子がいっしょに家庭

科の授業を受けたときに初めて、人権を守る、生活を守る家庭科ができるのだ。

●教員養成大学のほとんどの学生は、家庭科を料理や裁縫の教科とらえており、彼らにとって家庭科は息抜きの時間であり、必修だから仕方なくとっているにすぎない。生活感が稀薄な今の学生の実態から、もし家庭科が選択になれば、男子どころか女子もとらなくなり、家庭科は消滅してしまうだろう。また、私たちがめざす家庭科はまさに生活を基盤にしたもののだが、もしそれが一般の人たちに理解されていないとすれば、それは家庭科教師の実践の書き方にも問題があるのではないだろうか。

●ここに集まっている人はみんな、家庭科の男女共修をやらなければならぬと切実に願い、そのために素晴らしい意見を出し合っているわけだが、ここでいくらいい討論をしてもするだけにとどまってしまつては、決して声は届かない。手紙を書くとか、電話をするとか、とにかくここでの声を届けなければ意味がない。反対派はあらゆる手を使ってつき崩そうとしている。こちらもやれることをどんどん実行していかなければ。

●熊本にある六十数校の公立高校のうち、1/6の高校で家庭一般の共学が実現している。何故これだけの高校で共学がで

きたのかというと、実施している教師の中でも、切実に共学を望み、今やらなければ、と思つているのは十名足らずである。が、この十名足らずの教師が、官制の研究会の前に善後策を練り、研究会を動かす理事をひとりひとり説得し、研究会自体を動かし1/6の実施というに至つていく。彼女たちも最初のうちは、変わり者扱いされていたが、是非とも共修を、という熱い思いがこの実行力となつていった。自分の生活と結びつけ、ひとりの人間としてどう生きるか、ということから家庭科の男女共修をすすめているわけだが、とにかく自分でできることは、最大限にやっつけていかなければならぬと思う。

●現在、自分が置かれている状況の中で、自分は何ができるかということを考えてみた。そして、これから学校にもどつたら、家庭科の共学の授業を受けた生徒たちの感想文―家庭科の授業がいかに人間らしいものだったかという素朴な意見―を検討会議の委員に送ろうと思つている。また、とかく自分というものを失つてしまふような状況にある中で、自分を見失わず、自分らしさをこそ追求していかなければならぬと、この会に参加して痛切に感じた。

(まとめ・河口真理子)



Ⅳ、語りつつ、連帯を深める

〈子どもたちと共に〉

「子どもの部屋」で

青木喜代江

参加」も今年は一歩前進した形で「子どもの部屋」として託児の態勢がとられました。Weのフォーラムのこの初めてのころみに、初めてフォーラムに参加する私が係を引き受けたのも、このような集いに何度か子連れで参加してきて、託児は不可欠の思いからでした。

フォーラムでの「子どもの部屋」は単に子どもを預かる場所ではなく、子どももフォーラムに参加するということを基本にすえて、プログラムも編成されました。申し込みの子どもの名簿作りと、やはり初対面同志、名札も必要と、プラスチックの硬さや、ピンの安全性を考えて、ビニール製の手作りを用意しました。これらを、おとなと同様、子ども一人一

昨年のフォーラムで討議され、いろいろな問題を提起した「おとなの集いと子どもの

人の封筒に入れました。また、天候の悪い場合も考えて、玩具（ブロック類）と絵本を三〇冊ばかり荷物に入れました。

子どもたち専用の部屋の確保と、遊び回るにことかかない広い敷地、子どもの相手役として大学生のお姉さん三人と保父さんの丸山さんも協力してくださるということで態勢を整え、あとは、思う存分、自然の中で解き放たれようと思ってきました。

オリエンテーションでは、「子どもは『子どもの部屋』にもおとなの集いにも出入り自由、自然の中で大いに遊ぼう」でスタートしました。しかし、この出入り自由ということ——会場に当てられた斎藤記念館は、広い東山荘の小高い場所、子どもが遊ぶ場所はくだった所にあり、木々がさえぎって見通しが悪い。行ったり来たりする



子どもたちに、一生懸命付き合ってくれた若い人たちでも、子どもの体力には負けてしまったとか。「外に出るときは、言ってからにしましょう」という約束も二十二人（二歳から小学四年生）のうち、半分は学齢前、なかなかこちらの思うようにならない。会場に行っているのか、外に出ているのか、宿舎にいいのか……、子どもの安全ということでは居場所が常に気になりました。広い東山荘に集まった多くの子どもたちから見分けがつくように、この時ばかりは、一目でわかる帽子でもかぶってしてくれたらと思わずにはいらませんでした。

二日目の分科会の野外コースには、子ども全員が参加、マイクロバスで御殿場めぐりに出かけました。地元の御殿場高校の先生方の御協力で、コース作りから、ガイドまでしていただいて、子どももおとなも十分楽しめました。

最終日の全体会では、「子どものコーナーもある」ということで参加できました。「子どもも喜んで遊び、自分も後ろめたさを感じずにフォーラムに参加できました」との感想があり、今回このような態勢がとられて、とてもよかったと思いました。しかし、フォーラムに子どもがどのように参加したかを考えると、「子どもの部屋」を位置づけられないのです。預かる場所としての側面だけで見れば、一応役割を果たしたと言えるかもしれません。

フォーラムを終えて、いろいろな感慨がわき上がりました。

私自身子ども連れで参加したのとして、子どもを連れて参加したおとな同士の交流もなかった。

「子どもの部屋」とおとなの交流の場もほしかった。

「子どもの部屋」で、子どもが主体的に取り組めるプログラムもできそうな気がしました。

結果的に、野外コースで足をくじいたTちゃん。「子どもの部屋」の前の廊下で、すべってころんでけがしたO君の二人が、幸い軽い症状ですんだものの、包帯姿で帰ることになり、Aちゃんが最終日に高熱を出してしまいました（残暑きびしい頃、みんなから元気になったとのおたよりをいただきホッとする思いでした）。今回は市の医療態勢が十分整っていたため助かりましたが、やはり子どものこと、医療態勢、応急の薬品の準備や、スケジュールについても、配慮が大切だと思いました。

「子どもの部屋」が子どもたちにとって、とても楽しいところだったのは、一生懸命遊び、絵本をたくさん読んでくれたお姉さん——市川さん、酒井さん、半田さん、この三人のおかげです。また、丸山さんの子どもに対する配慮には、さすが専門家と、学ぶところがたいへん多かったと思います。

さまざまの教訓を残して、フォーラムが終わりました。私の個人的な感想を述べましたが、今年の一步を来年につなげてほしいと願わずにはられません。

子どもたちと私 市川 敦子

私にとって、今回の夏期フォーラムでの子どもたちとの生活は、とても楽しく、また、多くのことを学ぶことのできる、貴重な経験でした。

第一日目、子どもたちに会う前、私自身、少しドキドキしていました。そして、子どもの部屋でみんなを見た時、おすまし顔、てれた笑顔など、かわいい瞳で、じっと私たちを見つめ、「おねえちゃん遊ぼうよ」と私の手をぐいぐい引っぱっていくのです。かわいい子どもたちばかりなのです。

私の最初の不安は、いつのまにか、どこかに去ってしまっ
て、一緒になって、走ったり、笑ったりしていました。

一刻もじっとしていない子どもたちは、まるで昔の自分を見ているようで懐しく、忙しい毎日でしたが、とても充実していました。

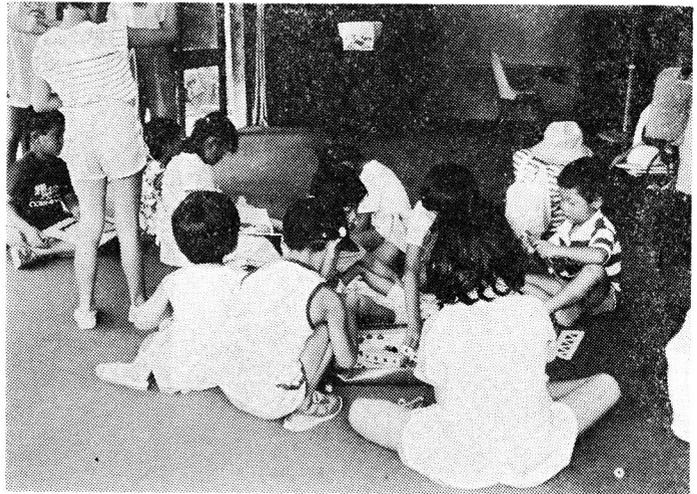
私にとって、今回のように大勢の子どもたちとの生活は初めてで、弟や妹が出来たみたいで、子どもたちに私の方が遊んでもらったようです。

子どもたちと遊んでいて思ったのですが、本当に一人一人

の子どもたちの性格が出来上がっていて、似た子は一人もいないものです。そのためか、初め、子どもたちの中で行動にぎこちなさがみうけられました。積極的な子は、消極的な子がくると、自分のわがままを少し外に表してしまっ、なかなかうちとけず、心配した時もありました。

しかし、子どもたちは、そんなこと気にかげず、いつのまにかうちとけているのです。そんな子どもたちを見ていると、その子たちにも、解決する力があるのだと、たのもしく思いました。

そしてもう一つ、子どもたちの表現力。テレビのために低下しているといわれていますが、今回の子どもたちには、こ



れはあてはまらないと思います。私が昔に忘れてしまった子どもの純粹な心が、この子たちにはあると思っています。

今回の子どもたちとの生活で、私は、親のありがたき、生きた児童観、子どもの純粹な笑顔と心を、学ぶことができませんでした。大変私にとっても、楽しい三日間でした。

子どもたちと私 酒井 貴子

私は、オリエンテーションで、石川さんに、「子どもの部屋で子どもたちと一緒に遊んでくれるお姉さん方ですよ」と紹介された時、自分に来るのだろうか？ この部屋を出たときに、子どもたちが私たちと一緒に、子どもの部屋に来てくれるのだろうか？ と、一瞬不安になりました。でも、私たちの紹介も終わり、子どもの部屋に移動するために一歩その部屋から出ようとしたとき、子どもたちが私たちのところに来てくれたので、不安が消え、ほっとしました。

子どもの部屋に行き、初め何をして遊ぼうかと私たちが考えている間に、子どもたちは、一人一人、自分でやりたい遊びを始めました。ブロックで遊ぶ子、折り紙で色々な物を折っている子、卓球をしている子、公園に遊びに行く子、皆本

当に好きなことをしていました。子どもたちを連れて公園に行ったとき、まだ子どもの名前を覚えてないので、どの子がWeに参加している子どもたちかわからず、公園でふざけて遊ぶ具から落ちて顔を抱えていた子がいるのに気付き、どうしたの？ 何していて落ちたの？ などと心配しながら聞いて見れば、他の催しに来た子どもでした。

夜の子ども時間も、子どもたちが迎えに来てくれて、一緒に子どもの部屋に行きました。折り紙を折ったり、ブロックで昼間の続きをやる子どもたち、おねえちゃん絵本読んでと本を持ってくる子どももいました。でも、やっぱり小さい子どもたちは、少したつと、お母さんいつくるの？ などと聞かれるので、「あの時計の大きい針が12、小さい針が9をさしたら、お母さんがちゃんと迎えに来てくれるから、おねえちゃんたちと一緒にそれまで待ってようね」と何度か繰り返しながら、子どもたちと一緒に、九時になりお母さん方が迎えに来るまで、子どもの部屋で待っていました。

二日目の富士山は、子どもたちみんながとっても喜んでいました。

三日目、子どもたちより先に帰るので、子どもたちに「さよなら」したり、されたりしている内に、涙が出て来てとまらなくなっていました。本当にとっても良い三日間を過ごせました。来年も、ぜひ参加したいと思っています。

子どもたちと私 半田めぐみ

「ねえ、外で遊んでいてもいい？」

最初に、子どもの部屋で言われた言葉です。確かに、今の子どもは、一人で遊ぶことに慣れていていると思います。テレビ・テレビゲーム・マンガなど、一人で楽しむことができるものが、随分あります。友達と外で遊ぶといっても、場所がない、危いなど、いろいろな理由があつて、なかなか難しいのです。野球がしたい子どもたちはリトル・リーグ、水泳したい子どもたちはスイミング・クラブ、体を動かすためには、指導者のいるところへ通う。

もしかすると、みんなであの部屋で、ガヤガヤ、ワイワイやるのは、苦痛なのかもしれないな。知らない子と顔をくっつけているより、広い外の方がいいのかもしれないな。だから、「いいよ。でも一人でつまらなくなったら、ここにおいでね」とは言いましたが、もしかして、私が考えていたような子ども部屋にはほど遠いものになるのでは？ 不安になりはじめ、三人でポーツと立っている姿をみて、「遊ばないの？」

うれしかったです。こうしよう、ああしよう、考えていても、みんなと仲良く出来ないし、この一声で、緊張感がフツととれた感じでした。このかけ声が、子どもの部屋のはじまりになったのです。

小さいころの私は、人見知りをするし、本当に一人で遊んでいた方が気楽だと思っていたので、子どもの部屋に入るよりは、親の横で、よくわからない話を聞いていた方がよかったです。ですから、子どもの部屋で楽しく遊ぶ仲間に声をかけて、一緒に遊ぶなんてことも全くできませんでした。こういう時泣いてしまうのですが、泣いても親もとにかえしてくれないので、結局うまくごまかされて泣きやむのです。

こんなことがあったらどうしよう。ごまかして、泣きやむかな……なんてことも、最後に、たいして問題なくてよかつた、という形で思いつく程度でした。昔の私では、全く味わえなかつたガキ大将気分で、みんなに接することができたのです。

結局、最後には、一人で遊ぶよりは、みんなで、とは言ってもグループに分かれがちですが、わざわざ、みんなの顔がくっつきそうな、部屋のまん中に集まって遊んでいました。もしかすると私も、一人よりも、仲間と違う遊びをしているにしても、同じ部屋で仲間と囲まれていれば、自然に、その遊び仲間に入れていたのかもしれない。

子ども連れで 参加して

◆昨年のフォーラムでは、保育のことが大きな論議になり、私も当事者のひとりとして色々考えさせられました。そのため今年は、子どもの問題をどうするかが、かなり話し合われました。子ども相手専門の人を頼む、子ども向けのプログラムやスペースをつくる、など企画されましたが、子連れでない人も含め、大人全体が子どもと接していく形になったのは一つの成果だと思えます。

私も小一の娘を連れて参加したのですが、娘の方も参加するのを楽しみにしていました。帰ってからも、一緒に部屋だった洋子ちゃんに葉書を出したり、日記に大学生のお姉さんの名前を書いたり、最後に熱を出した時お世話になった丸山さん「どうしてるかな

あ」と思い出したり、子どもなりにつきあいを持っていくのだなと思いました。

「野外コース」は、子ども向けプログラムとして、地元の強味で考えたのですが、幼児を含め二十数人が、四時間暑い中安全で楽しくかつ自然に親しめるコース。しかも大人にも満足いく。という条件を満たすのはどこかに無理があることがわかりました。反省で「大人向けのスケジュールで、小さな子にはきつすぎた」とあつた通りだと思います。交通事情などを考えると、子連れでプラプラ歩くことができないのが残念です。

ともあれ、今年は、大人の集まりに子どもが連れてこられたという窮屈さがなく、伸び伸び過ごせたように思います。ただ問題なのは、女の集会には保育態勢が欠かせない。男の集会なら不要だけど。という固定された意識と現状のうえで保育というのはやっぱりひっかかるのです。その集会でやった保育は理想的で子どもも楽しめたのはよいとしても、いつも子連れは女ばかり、では役割からの解放には向いていません。子連れで参加すれば母親のノルマは果たせたといい安心感。母親であることのあつかましさを知らず知らず公的な場で披露することの不快さも含め、

役割分担の問題として、子と親という人間関係の問題として、考えねばと思います。

『子育て中止宣言』に次の一節があり、共感しました。「父親の子育て／妻に犠牲をしいること／夫としての立場を確保している父親は／わが子に／人のふみにじり方を教えている」
(静岡・梶原公子)

◆自分一人のために、はるかこの地まで来ることは不可能でしたが、「子どもの部屋」が設けられていたので参加できました。

来年以降の希望としては、ふだん忙しくて子どもと一緒に過ごす時間が少ない人たちが飛びつくような、他の研究会では考えられない企画「子どもの部屋」を、より充実させて下さい。単なる保育所ではなく、子どもたちの顔がイキイキとかがやく、そんな場所をさらに多く設けて下さい。

家計を預る主婦としては、自分だけのために、まとまったお金を使うのは少々心苦しくとも、「子どもの部屋もあるんだから」という自己弁護ができる研究会が、とても気に入りました(参加する時、友達に「子どもの部屋がある」と話すと、「さすがWeね」という言葉が返ってきました)。Weの集いは、夢だけ

で終わらないで、現実になるところがいいですね。

(富山・大角由美子)

◆保育にあられた方々、ありがとうございます。このところ子どもづれであることが禍いして、なかなか会に出席できないでいた私にとって、子づれでも参加できるということは、大変なメリットでした。半分遊び——夏休みの夫ぬきの家族旅行——と考えていたにもかかわらず、大変勉強になった。今までのわりと惰性でやってきた私ですが、方向はそう大きくまちがっていないことを確認できました、元気が出た。今後とも、軌道修正しながら突進していきたいと思う。ありがとうございます。

(静岡・尾栢米子)

◆いままでいろいろな集会に参加し、託児をお願いしてきましたが、今度の「子どもの部屋」くらい気に入ったことはありませんでした。朝、目をさますと、まず「託児に行っていない？」の一言。思う存分遊べ、しかも安全な空間という面でも恵まれていたし、保育担当の方々への対応も、とても子どもの心をつか

んでいたように感じました。ありがとうございます。

(熊本・桑畑美沙子)

◆けんかをしたのがいやだった

(くまもと・くわはたよういちろう)

◆数年来の希望がやっと実現。参加できてうれしかったです。勉強させてもらって、今後へのエネルギーを充電し、加えて日常の雑用から解放され、優雅で、有意義でハッピーな三日間でした。

実行委員の皆様、本当にご苦労さまでした。自分の言葉で自分の考えを、皆の前で語るトレーニングを、更に重ねたいと思いましたがたかかったです。そのおかげで、ここに参加できました。そんな現実なのですね。洋子も寝ても起きて、おねえさんおねえさんで、とても喜んでいました。保母の皆様、ご苦労さまでした。来年も参加したいなあ。

(奈良・重富素子)





〈大人たちは共に〉

この指とまれ交流会を

やってみて

横山 れいこ

Weの一年目の合宿に参加した時、わたしは自分への問いかけを始めた。一人が語る言葉を聞いていました。順番で自己紹介が始まった時、わたしは、自分自身の言葉で語りたのです。自分の言葉をさがしにきましたとその時のわたしを語りました。そんなわたしにとって、そこで話される話や言葉には圧倒されるばかりで、わたしが「それ」をどう感じ、なにが言いたいのかさえ、不確かなほどでした。

二年目の江の島合宿は、どうしても休みがとれず、初日のみに参加でした。三日間のうち、たった一日だけしか参加で

きないのになぜ参加しようと思ったかといえば、「We」から離れたくないという想いが強かったからです。暑い暑い一日を、何時間もすわり続けることができたのは、「なにか」があるだろうという期待があったからで、事実刺しを実際に刺してみたり、公開授業の生徒になれたりしたのです。その反面、「学校はよみがえりうるか」という主題の議論に、わたし自身がどうかかわったらいのか。先生が、先生の言葉で学校を、生徒を語る時、勤め人で、一人身の今のわたしがなにを語れるのだろうかという強い想いがありました。男女役割分業をうちくずし、男も女も人間として自立をはたすためには、家庭科男女必修が必要だというWeの目標にはかかわれるけれども。その時も、わたしは発言する手がかりをみつけれないままでした。



そして今年三年目の夏期合宿。二日目の午後からの参加と中途半端な形の参加だったことや、野外コースに出るか、分科会に加わるか迷ったためもあり、わたし自身が話し合いの場になかなかはいってゆくことができない状態でした。一時から五時までとても長く感じられ、話の内容もよくつかめないうまに終わってしまいました。そしてその間中、わたしが考え続けていたことは、今話されている話と今の自分との接点はなにかということ。先生の立場で話される方、妻として話される方、母として、女としての話。ひとつひとつを聞きながら、わたしが今かかえているものとの接点はなんだろう。どうやって心の内におとしていったらいいのだろうかというようなことを考えていたのです。接点が見つけれないというのが実感でした。

夕食の時自然に同席となった福田さんに、自分でもおもしろくないほど強い調子でわたしの想いを話し始めていて、自分でもびっくりしてしまいました。同意が得られてホッとしていたら、たまたま隣席にいた長谷川さんが、「今の話を夜もちだしてみたら。あなたが自分でそれを言わない限り、接点はみつけれないだろう」と言われたのです。初めての合宿の時から、学校の先生が多く、しかも先生方同士、疑問をもちだせば共感できるような雰囲気や、親と子の問題、親と先生方の問題など、多数の人に共通するような問題のなかに

あって、学校からかけ離れ、一人で住み、企業の中で働くわたしは先生でもない。親でもない。ただWeの仲間の一人であるというだけでどう問題提起をしていったらいいのか、わたし自身のなかでわからぬまま一年目を終え、二年目を沈黙していたのです。先生方のものなれた話しぶりにも圧倒されました。経験をかさねてこられた方の実践の重さにもうたれ、尚、向上しようとされ続けている方にやるなあと感嘆し続けました。けれどそれら一つ一つが、わたしの問題とならない限り、接点はみつけれないのだということに、言われてみて思いあたったのです。

「誰かこの指とまれ式交流会をやる人はいませんか」との声がかかった時、うながされてたちあがり、「私自身との接点がある問題を話し合いたいのです。私のような普通の一般人をはじめてしまう方向にもしいってしまいうようなことがあったら、Weの方向も定まってしまうだろう」と話していました。学校の問題、家庭科男女共修などにわたしが無関係だというのはありません。むしろ基本的な問題だと考えています。が、それらを通りこしてきて、今ここにある自分をどう方向づけていったらいいのかということも、わたしにとつて大事なことです。わたしのなかに不自然とも思わずはいりこんでいる性別役割分業を洗い直したり、社会的に女であるわ

たしはどう位置づけられているのか、そしてそれらを少しずつでもつききずしていくにはどういう方法があるかなどを話しあってみたかったのです。とはいえ、「We」の方向も定まってしまうだろう」というようなことは、Weの仲間意識があったから言えた言葉です。三年間いろんな意味でWeに励まされ、支えられてきたから、わたしの言葉をうけとめてもらえたこととはうれしかったです。一年目も二年目も話せなかったわたし。三年目に自分で話すことができてようやく参加した実感をもてたことは一つの収穫として残りました。一年目の合宿の時自分の言葉で話したいのだといったことがようやくひとつできたという実感です。

さて、その夜の分科会には男性一人、女性十一人で合計十二人の方が集まってくださり、知った顔あり、全く知らない顔ありで、どう話を進めようかと迷ったのですが、その心配も不必要なほど話はずみしました。特に心に残った話のひとつに石川さんの「女の子を産んで改めて自分自身の人生と二重うつつになり、初めて「幸福」というものを考え始めた」という話がありました。自分の人生を自分の手でつくりあげたいと考え始めるきっかけはさまざまであっても、考え始めた時、ほんとにいるんな不自然が見えてくるような気がしません。その時どうするか。私は一体どうするのかということが

とても重要なのではないかと考えられてきました。そして十二人の人たちで話し合ったことのスタートはそこだったから共感することもできたとし、同じように考えることができたし、少しではあるけれどわかりあえたのだとわたしには思われます。

社会的な性別役割分業を考えることも重要なことのひとつですが、そうした一人一人と話し、その一人の人がどう生きてきたのか、生きつつあるのか、生きようとしているのかにふれえたことは、またひとつのみのりとなりました。そしてもしわたしがあの時、ため息をつきながらにもいわずに帰っていたとしたら、ひとつなにかを失ったかもしれない。あれだけたくさんの人たちと一緒に泊っていたながら、同じ日に同じ場所にいたというだけで終わってしまい、新しい出会いとならなかっただろうと思うと、言ってよかった、いえ、言えてよかったなあと思えてなりません。

「わたしがわたしの言葉で話をした」ということは、大切にしたいと今思っています。

最後の全体会で

フォーラムもいよいよ終盤を迎えました。三日間、頭を使い続けて、やや放心状態——。『フォーラムを顧みる』ということで、一日目の夜の交流会、そして今年のフォーラムのメインである分科会、さらに討論をより深めようという、“この指とまれ”式交流会の報告が行われました。

今年のフォーラムは、去年に比べ、話しやすい場が多く設けられ、とても参加しやすい雰囲気だったように思います。ただ、分科会報告の時にも反省として出ましたが、テーマが漠然としていてひとりひとりの話がつながらない、分科会設定の時点でもっと話し合うべきだ、ということでした。私自身も感じたことでしたが、分科会での話のひとつひとつは、なるほどと相槌を打つものばかりなのですが、それを自分とのかかわりとしてとらえようとする、どうもかみ合わない



なあ、つながらないなあ、と感じることもしばしばでした。また、今年は新たに「子どもの部屋」が設けられました。同室の五歳の男の子は、朝起きると、「僕、行ってくるよ」と飛び出して行きました。生活の中で子どもにかかわること

のない私にとって、保育ということが切実な問題として迫ってこなかったのですが、反省の中に、子どもを持たない人も子どもの部屋へ足を運んでほしかったという言葉もありました。

家庭科の教師からは、一日目の交流会には家庭科の部屋があったのに、二日目の分科会ではなくなっていた、分科会にも家庭科の部屋を設けてほしい、そしてその中で一般の人たちと一緒に考えていけるようなテーマを設定し、一般市民の人たちにもどんどん参加してほしい、という意見が出ました。それに対して市民の側の意見として、家庭科のあり方について市民を巻き込むのは、地域でやるべきことで、全国の人たちが集まってきているこの会では、家庭科の先生は先生の制服を脱いで、逆に他の人たちと接することのできる場へ飛び込んで来てほしい、ということでした。

最後に、Weの特徴は、送り手と聞き手がキャッチボールできることなのだから、そこをもっと引き出してほしかった。つまり、講演会の後の討論の時間を充分にとってほしかったという意見が、これまた時間に追われる中で出されました。こうして、来年への課題と期待を山積みにして、三日間の夏季フォーラムは幕を閉じました。

(まとめ・河口真理子)

反省会で

森林浴をしながらの反省会には十五人の方々が参加してくださいました。

はじめに吉田さんが講演について、長い話をきかされるよりは質疑応答に重点をおいて、それぞれの想いを話し合った方がいいと思うと発言され、芦谷さんは、教える教えられるという形ではなく、手でものをつくっている人とか、なにかを實踐している人の具体的な話の方がいいのではないかと言われました。

望月さんは、共修も自分の問題ではあるが、家庭科がオールマイティではなく、一分野として家庭科があっていいのではないかと言われ、石川さんも家庭科の分科会をという声もあつたが、せっかく様々の人が集まったのだから、家庭科だけに固まらずにもっと広い視野を求めたいと発言されました。

中嶋さんは、Weの合宿は一人一人がよくするものだと思う。いろんな問題を自分でこの場に注入していくことが大事なのではないかといわれました。そのいろんな問題の一つとして、神崎さんは今後の高齢化社会は今よりもっと厳しいものになると思う、学校で学ぶことを老人問題につなげていてほしいと。柳下さんは主婦だからギャップも感じたが、男も女も身辺自立のための教科は家庭科しかないのだから、お互いの相乗作用でやっていくのがいいと思う。加藤さんは、家庭科教師だが、体験に乏しいために違和感があったが、お互いにもぞをうめていかなないとダメなのではないか。

来年度に向けて錦さんは、できあがった会にただ参加するという受身の発想でない方がよいといわれ、企画は二月から始まるから、ハガキでの参加とか、自分でテーマを出す、分科会をつくるなどの方法が話されました。

参加者のアンケートも読まれ、子ども部屋をもってくれたので充分参加できた、去年の話し合い生かしてくれて好感、教員以外の参加が少ない、話が自己主張のみで残念、などがありました。合宿を全体的なものとした方がいいか分科会的なものとするか、子どもたちにカリキュラムがあった方がいいか否かなども出ました。

最後に青木さんが子どもたちの野外コースの話をされ、お母さん方も預けっぱなしというのは問題があるだろうといわ

れ、馬場さんは、子どもからおそわるものもあると思うからもっと相互のり入れもあつてよかったのではないかと発言で、一応反省会を終わりました。

来年度の合宿は、私たち自分の手でつくりあげましょう。

(まとめ・横山れい子)

実行委員長として

石川 由紀

ウイ書房とWeの会が呼びかけた⁸⁴夏季フォーラムが次回へ課題を残して三日間の幕を閉じました。「何といっても集まった人たちが素晴しかった、参加してよかった」これが私の今の気持ちです。それは企画会がスタートした四月一日から通してのことです。そのような予感があったからこそそすんなりと実行委員長(実は連絡係)をお引き受けしたのです。

⁸⁴夏季フォーラムもWeらしい「この指とまれ式」実行委員会の企画でした。⁸³夏季フォーラムと異なった形式になれた

のは、それを引き継いだからでした。

これまでのゼミナール、フォーラムを脈々と流れ続ける大テーマ、それを語り合い深めるには、又前回の反省や意見——全体会ばかりでなく分科会もあればより密に。一日目の夜に交流の場があれば早くまざり合えたのでは。フリー時間に小さな会を参加者自身が企画できたら。リクリエーションも。子どもの参加を前向きに——を生かすにはどのような設定が望ましく可能なのだろうか。こうして出来上がったのがあのプログラムでした。中身の充実度は、参加者自身が創り出し受け取るものと思っておりますが、本当に一人ひとりの中で有意義だったかしら、企画がそれを邪魔しなかったかしらと、多分四十名を越すであろう実行委の一人として、又参加者の一人として心にかかっています。

そのような中、私が一番こだわったのは子どもの参加の件でした。大人中心の会と子どもの関係について注目して十年、私なりにある結論を持っています。それは子どもが排除される場合は差別的要素を含んだものであるというものです。人種差別、身分差別、障害者差別等々、数ある差別の中に二重差別としての男女差別があり、更に弱者としての子どもがいると思うのです。ケガをした子、タンク浦を作った子、疲れて熱を出した子など出たことは、今後の保育の態勢に一考を要することとは思いますが、それでも尚、次回も子連れで

参加できる会にして欲しいと願わずにはいられません。

'84夏季フォーラムが残したものが、'85夏季フォーラムをよりよいものに育てることでしょう。

'84夏季フォーラムを顧みてこの一言に尽きます。

「皆様、ありがとうございます」。

実行委員の一人として

松本法子

会場が御殿場だったせいもあって、実行委員というよりはむしろ、浮き浮きした気楽な気分に参加したフォーラムも、終わってしまうとどうしようもないもやもやがつきまとって離れない。よくよく考えてみると、どうもフォーラム以前の私のの中のもやもやが、そのまま続いているといった感じだ。

何のためにフォーラムに行ってきたんだっけ？ そのもやもやを探り当てたかったんじゃないのか？

去年のフォーラムには初参加で、ともかくできる限り吸収しようという意気込みがあった。それは授業を受ける立場の生徒のようではあつたかもしれないが、とにかく驚くことばかりだった。良い人って集まればこんなにいるものなのか……。たぐさんの視点があることを知り、元気が出たし、先に進む掛かりみたいなのを感じた。

ところが今年はどうだ。「聞いたことがある」「こうすれば良いんだろなあ」と、変に頭の中で理解してしまっている。「答」がわかっている。

ああ、危機だ、危機だ!! 私の危機だ!! 去年から一年経った私の中で、新しい体験、頑張ってきた体験がないせいだ。書物だけ読んでわかったつもりになったってどうしようもない。

私はこの一年一体何をしてきたというのだろう。去年蓄えたはずのエネルギーをどう使ってきたんだっけ?

でも、去年もそうだったけれど、今年も「人に会えた」。いろいろな人に出会えて、話をする。フォーラムに集まってくる人というだけで気を許して話をする。食堂でも、ロビーでも、部屋でも……。人とかかわりをふやすこと、そういう場を持ち続けること。それが、生活の場へ帰ったときのエネルギーになる。そのエネルギーの質と量を維持し、高めるためにも、私は来年もフォーラムに参加するだろうし、フォー

ラムを途絶えさせてはならないと思う。私の中で堂々めぐりをしていてもやもやも、ぐるぐるまわりながらも上昇して、いつかきつと形が見えてくるのだろう。

ところで、今回は子どもの数が多かった。お世話係のおねえさんたちにも恵まれ、大成功だった。でも、この子どもたちがもう少し大きくなって、または、大きい子どもたちが集まるようになって、同じ場所で子どもフォーラムを企画するようになったら、どんなに良いだろう。そこまできなくても、希望する子は親から離れて子どもたちの部屋に寝ることになったら、ちよつとおもしろいと思う。東山荘内にはキャンプ場もあることだし、昼食だけでも自分たちで作るとか……。親についていくフォーラムではなく、自分の行きたいフォーラムとして、世話する、される役割を崩していく。

そんな中で、親たち、大人への文句が出てくるかもしれない。そしてそういうのを一緒に話し合ったりしても良い。ともかく、もっと子どもたちを巻き込んで良いんじゃないかと思う。そうなれば、子どもフォーラムの実行委員も必要になつてくると思うが……。

参加者の声



◆「二十一世紀の男と女……」、タイトルに「二十一世紀の」というのは発想としては面白いと思つたのですが、イザそのことについて考えろと言われるとイメージが現実とつながりません。私は分科会にもその交流会にも加わつてないので、外側から見た感じしかわかりませんが、やはりもつと現在の状態に足場をおいたものにすべきだつたと思います。

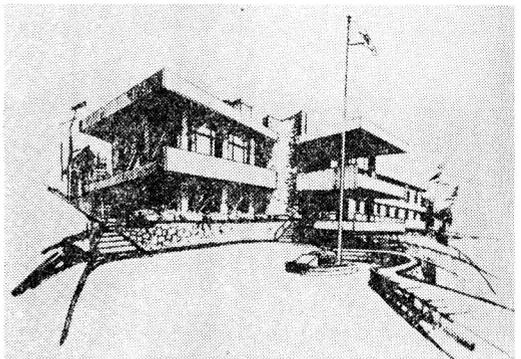
なぜなら「二十一世紀の」とすると、「ああ、とんでるカップルや、それを実践できる人たちがイニシアティブをとつて話をするんだな」という感じがするのです。この話し合いに何か縁遠いニュアンスを感じたのは私だけでしょうか。

確かにWeに集まる人たちの中にはいわゆるとんでるカップルやそれを実践する男や女が沢山います。でもそういう関係は今のこの社

会では市民権を持つところまでいっていません。少数派でもあるし……。それだけに世間からの風当りもあるでしょうが、でもこういう人たちがイニシアティブをとつてすんだことを言い、二十一世紀はこうあるべきと言つても、「なんだそうか。じゃ話したい人で話せば」と言う思いになつてしまふのです（ヒガミ、無責任と言われますが）。

なぜそうなるか。いくら結婚の制度そのものを否定し、役割分業を否定しても、現実的に「制度」によつて社会は成りたち、その中で我々はここまで生きてきたし、また今後も生きていく。そして日々その「制度」のもたらす害や見えざる網の目にしはりつつけられており、その中であがき抵抗し闘っているわけです。

私の場合もとんでるカップルじゃないし、



役割分業の中で毎日（でもないが）悶々としているのです。でも女の立場からすれば、女の大多数がそうなのじゃないか。同じ問題をかかえ、男女関係のことと必ずにているのじゃないかと思うのです。今の時点、とべる人たちはひとまずおいておくのです。そして女の大多数が告発したいがんにがらめの生き方を、今度は男の立場で話しあつていく。女性問題はすなわち男性問題だという視点から、そして一組でも対等平等な男女関係が創造できると実践していく……。そうなるような話しあいをして欲しいのです。

どうやって今の役割分業の呪縛からとき放たれていくのか、男も女も……。そこをこそ現状では話したい人が多いのではないでしようか。私はそうなのですが。

今回は保育体制が整ったので、多くの子供の参加があり、良かったなと思います。でも子供をつれてくるのはすべて女。女が外泊する時、何と「育児もしなくては泊られない女が多いことか。私も含めて。男だけの集会なら決してあり得ないことなのに、中には子供を喜んで連れてきた女もいるでしょうが、ほんとはのびのびと子供のことを忘れてフオーラムに来たかったが……、と言う人もいたでしょう。これも役割分業の呪縛です。家事・育児をキチツとあととくされなくこなさなければ自分の自由な行動もままならない女と、自分の行動をまず何より優先できる男。これを許容しているのは、男と女のふたりの関係もあるが、何よりも、社会そのものなのだから。そういう現状のシガラミをひきずっている女たちが、「二十一世紀の」と、とんでる話をするのも良いかも知れませんが、現実的ではありません。

私ももつと役割で固定されない男と女の関

係をと願わないわけはありません。今回だつてやはりつれあいはインターハイと称して、家事・育児はふり向きもせず、秋田へ単身一週間出かけています。その後私はやりくり算段でフオーラムへ。そこへ「二十一世紀の男女関係」と言われたって、「じゃあ今の二十世紀、一九八四年の男女関係はどうなるの？ここを問わなきゃつながらないのじゃない？」という気持ちだったわけです。

最後の「フオーラムを顧る」のところでも吉田さんから、「家庭科共修は地域でやってゆけばよい」という発言が出て、女の人からは反論が出ました。女の人の中でもWeは家庭科共修問題と結びつけると、自分に関係ないという人は沢山いますから、ましてや男の人にもつとそうだと思います。でも、Weが家庭科の共修問題を一つの主軸に据えていることはゆずれないと思います。

私、男の教員を何人かフオーラムに誘いました。その内の何人かが部分的に来てくれました（たとえ義理でも）けれども、「男と女……」とか教育問題には関心を示しても、「食」のことは「場ちがいなところに来た」という感想を聞きました。食のこと家庭科

男と無縁場ちがい。それから野外コースにだけは参加してくださった方も、講演や討論なんて「とてもとても（女の集会に出れるものではない）」と言われてしまいました。

食のことなどに携わってこなかった今、もうでない男に、消費者問題なことであれ関心にはわかにはわかないのです。ましてやWe自体が女の集会と思われていては、もつとそうでしょう。食べること、着ること、子供を育むことなどの生活文化は、やはり今でも女のものなのです。そして教育問題は男のことなのです。だから参加してくれた男の教員は、関心の視点がはつきり違いました。吉田さんの「共修は地域で」の発言も何かそのニュアンスが感じられます。

私としては「食は男の関心事じゃない」などと言われた時とてもショックでした。「とてもとても」と言われた時もやっぱりなあと思いました。けれど生活文化を学校教育に根づかせることが必要と、小沢先生も指摘されたのですし、それを具体化させるのが家庭科であるのなら、共修問題は必ず闘わねばならないことです。この線はWeとしてゆずれないと思います。

しかし、男の人に拒まれるのも悲しいこと

ですが、参加後はWeに對し何らかの理解を深めてくれたようです。共修は家庭科教員だけの女性問題ではないのだという段階をふんだ理論づけを、キチツと整理しなければとも思っています。

(静岡・梶原公子)

◆木立ちの中の反省会で言いつくせなかつたことを書きたいと思えます。私がどうだったかというのと、夏季フォーラムがどうだったかと二つに分けて書きたいと思えます。

〈まず私にとってどうだったか〉

一年ほど前、個人的な事情で大変つらく苦しい状況が続いていた時、『人間って不思議』という本に出会いました。いまの自分をどうしたらいいのか自分で自分をもて余していた時のことです。『人間って不思議』を読んで、そんなどろどろした状況から、すうつと浮かび上がってこられた、助かったという思いがありました。その思いを手紙に書こうかと思いましたが、やっぱり書き手に直接逢いたいと考えました。

参加したもう一つの動機は、私には生活指導教師として、生徒とぶつかり合った十年の歩みがあるのですが、生徒の自立を励ました

めに、家庭科の教師としていま何が自分に必要なのかを見つめることでした。この二つをフォーラムに求めてきました。(中略)

家庭科の教師としては、フォーラムで様々な努力をしている家庭科教師に出会ったこと、家庭科に熱い思いを寄せ、行動的に闘っている人を知ったこと、人間らしくらしさと実践している人の感覚を感じたことは、いまの自分を見つめる力になったと思っています。(中略)

夜の「この指とまれ式交流会」で、「なぜ住居の教育が進まないのか」という話をしていた時、大学の先生の発言で、「大学で研究して現場におろす」という発想に違和感のある自分を見つけました。もちろんその先生は、研究者と現場教師の対等な関係の共同作業とおさえていらっしやると思っただけです。……

管理教育を超えるには、学歴主義とでもいうような価値観を越えなくてはならないと思えます。高校より大学の先生が、私学より公立の先生が、農業高校より進学校が、家庭科の教師より受験科目の教師が、市民より教師が、できない子よりできる子が、という価値観は、学歴主義を貫く現場にいる教師の中に

しみついているように思えます。

そういう意味で、そういう見方にとらわれない見方をしたのは、高校生や、教師でない人に多かつたように思います。教師のそういうにおいをかざわけて「教師は教師という制服を脱いでほしい」と、吉田清彦さんは言ったのではないのでしょうか。(中略)

〈夏季フォーラムについて〉

オリエンテーション……各分科会の呼び込みはよかつたと思えます。これは全日程について言えることですが、Weの考え方を日程やフォーラムのやり方に表すスタイルの追求は、これからも大切な視点だと思えます。その意味でフォーラムの司会や報告に多くの人々が登場したことは、子供の参加の位置づけと共に、そのスタイルの一つとも言えます。ただ担当者に、「オリエンテーションで発表してほしい」と事前に言っていないというのは、生活のいろいろなもの振り切つて、時間とお金をかけてくる人の立場を大切にするという思想が生かされていないと思えます。

事前に打ち合わせをしており、親と教師の部屋のように、担当者が間に合わない場合は代わりの人とか文章とかを準備しておくこと

が必要だと思えます。(一日目、二日目についてはそれぞれのパートに)

三日目の「フォーラムを顧みる」「いま家庭科をどうする」について、両方とも司会がとてよかったと思えます。お二人のよさが出た司会だった、という気がします。発言も今までのフォーラムの成果に立って、柴田さんの「自分のやること・やれることが見つかった」、吉田さんの「家庭科、時間がないんでしょ」という言葉など。このフォーラムを通じて一人ひとりが持つて帰れる課題や歩みよりをつかめたことはよかったと思つています。

このように参加した人が課題をつかめるフォーラムとは、「I am OK, You are OK」の交流をどういうスタイルとどういう内容で創り出すかにかかっていると思えます。これは日本的な「和」の世界ではなく、互いに研ぎ合わせるような対等のぶつかり合いを組織することだと思えます。

フォーラムで交流したことにより、どう自立を育みゆくのか……。つかむ課題とは「自立した男と女になるために」「人間らしい生活をするために」「差別のない社会を育み創り出すために」「新しい家庭科を創るために」

自分は何ができるのか、何をすればいいのかをつかむことだと思えます。次のウェフォーラムに期待し、もっと積極的な参加をしたいと思つていきます。

(静岡・望月一枝)

◆去年の「フォーラムを顧みて」の中で出てきた「子どもとの共参加」が実現したこと、「この指とまれ式交流会」「分科会」形式などより多くの立場での参加、発言の機会が計画されたこと、よかったです。

保育者の感想の中にもあったけれど、保育者の分科会や交流会への参加をどんなふうにしたらよいか、今後の課題だなと思つていました。

フォーラムに参加する人が、お互いにできるだけ自分の発言ができるように配慮する、これマナーなんだな、と自分を含めて、参加者を見ていても、反省しました。

御殿場の高校生たちと同室で、少し話すことができたのですが、教師という立場を離れて、ひとりの女と若い女たちで話ることができたことがよかったです。

前回に比べて、一年ぶり久しぶりに会った人などいろんな人と話をする事ができて、

おもしろかった。建物の構造上なども原因かもしれないけれど、ロビー、食堂、ペランダなどに人が集まりやすかったので、なおそのような機会が多かったのかも！

(東京・芦谷薫)

◆一年間の胸はり裂ける思いを持つて集まってきた皆さんが、その胸のうちをすべてはき出して、新しい出発のスタートを切る、素晴らしいフォーラムだと思います。私自身は高校の家庭科の中にドツブリつかって、それだけに夢中になっているみたいなどころがあるのですが、他の職に就いている方、主婦の方の落ち着いた発言に、私の未熟さなど、反省すべき点を感じています。もっと広い場で、自分自身を鍛えること、それが今日からの課題です。

いろいろありがとうございました。楽しいフォーラムでした。

(新潟・高橋素子)

◆昨年のフォーラムを参考にして「子どもの部屋」ができたのは、親にも子にも、そして参加者にとって、とてもよかったです。このヒヤク的前進を評価したいと思います。同様に

体を動かすスケジュール（早朝ハイク、おどり）も感謝します。

食事もあまり残さず、安くておいしく感謝します。

夜は暑く、ベッドは息苦しく、タタミが恋いしかった……。広い場所はとてもすてきだけど、アルコールが恋しかった……。

交流会から分科会へのひきつぎは、話が途中で切れず、このスケジュールはよかったです。ありがとうございます。

（大阪・神崎房子）

◆とても充実したフォーラムだったと思います。小沢先生の講演、その後この指とまれの話し合いにも参加しましたが、やはり力づけられました。

家庭科の中で生きること、今のような学校社会で生きること（自分も、子どもも幸せになれる矛盾のない生き方をめざして）の基本が自立にあることを確かめられました。これからも迷いながら生きていくと思えますけれど、自分らしく、自分の足で立って。

新設校の年長婦人教師としての役割が期待されていると感じられますが、どんな期待をかけられようと、私らしく生きていきま

いと 생각합니다。

自分らしさをとりもどせ、というテーマがフォーラムに参加する前と今とでは、違った響きで受けとめられます。すなわち、いくらか成長した、わかった……。いうことでしうか。

（埼玉・柴田栄子）

◆途中参加で勝手な話をしてしまったかな、なんてちよつと反省しています。ただ私個人としては、話せてよかったなと思っています。Weの合宿でこんなに話したのははじめてでしたし。私自身が話さない限り、疎外感をなくすことはできないということ、話してみたら意外に反応が返ってきたということなど、ほんとによかったです。

特に今回感じたことの一つに、年上の方々の考え方の柔軟さということがあります。安全な部分で固めてしまおうとしている自分にあたらしい新鮮な空気を吹き込んでくれた、という感じがします。これからも、私は、私なりのWeとかかわりを保つていこうと思っています。そう思えたことは収穫です。

家庭科の男女共修があと一歩というところまで迫ってきたいま、Weがその力強い後だて

としての力を発揮してほしい（したい）。共修によって育つものはとても大きいのではないかと期待しています。（一個人として）その仲間入りしつづけたいです。

（千葉・横山れい子）

◆一日だけの参加で、残念残念な念念でした。教師以外の参加者のことも考えて、時期を選んでほしかったと思います。

Weの集まりは、それぞれに個性的な人ばかりであるけれども、また発想や方向性において、ある程度同じ者同士であるから、今更何を話そうか、ということにもなりがちです。けれども、それだから自己弁護などのヨロイをまとうことなく、安心して自己を顧みながら語り合える場になり得るのでしょう。

（東京・川名はつ子）

◆前半「全体会」の後「分科会」、のプログラムなのですが、いつも時間切れ。せっかくなので、素晴らしい講師のお話に対し、もっと対話を深めるために、「分科会」の一つに、全体会を引き継ぐ会をぜひ用意して下さい。より充実するのではないでしょう。

来年も同じ場所で開いて下さるとありがたい

いと思います。交通の便、家族連れ（いつも夫を連れて来たいと思っているが、説得力に欠けるので）で来られるかどうかなど、分かっていますと、次回の参加にたいへん好都合なのです。

「団塊の世代」という言葉を知らない教師の方が一人といわずいらっしやったことにビックリしました。今の日本の社会構造について語る時、必ずといっていいほど出てくる単語をご存じなかった。（これだけをとって断言するのは間違いを承知の上で）もっと先生方に広い視野を持ってほしい。社会の現状を知らずして、学校も、生徒も、人間についても語り、考え、よりよい方向を見出すことはできないと思います。Weフォーラムが、これからも教師と市民が自由に語り合い、刺激合う場を提供し続けて下さることを願っています。

読みづらい姓を持つ私は、私自身を伝えたい、これからもコミュニケーションしたいと思う人に渡そうと、今年も手作りの名刺を持参しました。そんな人に出会えそうな場を持っていくことにしている名刺を、今回も二枚使いました。一枚は、無農薬野菜、食品の安全について話し合った方、もう一枚は、もうじき

籍を抜くという女性。日常の生活の場では、なかなか出会えない話せる仲間、フォーラムのおかげで出会うことができました。ありがとうございます。

（東京・蔵合里子）

◆昨年は椅子にすわって、人の話を聞くことが多くて、とてもつらい思いをしました。その点、今年は話し合いが「テーマ別の交流」「全体会」「分科会」「この指とまれ式交流会」「全体会」と数多くもたれたことは、参加者の欲求不満を解消するということで、とてもよかったです。

ただ難しいのは交流会の進め方です。「家庭科の部屋」では、各県の家庭科の共修情況報告だけで終わってしまいました。「二十一世紀の男と女の関係」ではせっかくレポートが出されていたのですから、これらを総括して、二、三の柱を立てて話し合えば、結論は明確に出ないまでも、参加者が何を話し合おうとしているのか、もつとはっきりしたと思うのです。全く自由な話し合いは「この指とまれ式交流会」で充分です。でも、この話し合いもつと可能性がありそうです。参加者の顔ぶれによって何ができるか、主催者側で

セットしてみてもよいのではないですか。『We』の執筆者を中心に「○○さんを囲む会」というように……。もちろん、自然発生的な会（今回では、横山さんを囲む会のよう）は歓迎してよいと思います。

吉田清彦さんと小沢有作さんのお話はとてもよかったです。ただ全日程の中でこれらがどう位置づけられるのか、もう一つはつきりしませんでした。自分が実行委の一人でありながら、企画の段階でしっかり意見を出さなかつたことを反省しています。

いずれにしても、自分たちの手で創る『Weフォーラム』に一歩ずつ近づいていきたいものです。

（東京・福田三津夫）

◆昨年はほとんど受身でしたが、今年是自己なりに問題をとらえて考えることが、少しはできたと思います。分科会・交流会「この指とまれ」式交流というのは、とてもよかつたのではないのでしょうか。本音が言える・聞けるような会だつたと思います。

今すぐに結論を出せませんが、いくつかの意見を自分で選ぶなりして、自分の考え、生き方を決めていかねば、と思います。

子供のお世話は大変だったと思います。お疲れさまでした。

(熊本・古澤久子)

◆このフォーラムに来て、もつともつと、自分の感覚をときずまさなければならぬと痛感しました。

「自分らしさをこそ」。自分らしく生きるために、生き方をもう一度みつめ直したいと思っています。そして生き方を考える家庭科にできるように努力します。

(福井・片山朋子)

◆とてもとても楽しい二日半でした。朝からハイクをしたり、踊ったり、が、去年とくらべて一味違った喜びでした。頭だけでなく、体で表現するのは、なんと心地よいことでしょう。福田さん夫妻に心より感謝。

次によかったのは、多くの人と知りあえ、話しあえたことです。今後も交流していきたいと思う人ともたくさん出会いました。その意味でも参加者名簿がとても役に立ちます。

小沢さんのお話は、久しぶりに歴史を展開していただいたようで、根っこの部分をゆらして下さいました。"この指とまれ"交流会

での小沢さんの話も、個の自立と、教師としての自立が問われていることを、改めて考えさせてくれました。来年はもつともつと多くの人を連れてきて、新しい文化へ向かっての大交響曲を奏でたいと思います。

(埼玉・中嶋里美)

◆去年の緊張したフォーラムに比べ、今年は気楽に参加できました。

家庭科にかかわって生きている者としては、もつと家庭科のことを話し合えなかったらどうかと思います。フォーラムに参加している家庭科教師以外の方々に、家庭科とは何か、親として、男として、家庭科に何を求めているかなど出し合えば、と思いました。分科会に、交流会の「家庭科の部屋」が発展していくものがあればよかったです。と思います。

小沢先生の話、熊本のサークルで求めている実践を理論づけられたようで、心強い限りでした。吉田さんの話にしても"科学を生活の次元につなげて授業を組織する"ことの必要性を痛感させられるものでした。熊本に帰り、古沢さんとサークルに報告し、サークルの実践をさらに深めたいと考えています。

実行委の皆さん、お世話になりました。

(熊本・桑畑美沙子)

◆近頃のせいもあり、会議や研究会では、たいていメガネをかけて参加するのが、いつもの私の姿でしたが、今回は裸で参加したいという内なる願いが強かったせいか、気がついた時はメガネをかけないで通っていました。最後の日になり、みなさんの名前を知りたいと意識してメガネをかけたのです。

参加したみなさんは、とても心やさしい人が多いように思いました。特に男性にそれを感じ、夫婦で参加された方がうらやましかったです。

なぜな学園の作品は、あたたか味があつてとても気に入りました。お世話になった方々へのおみやげにたくさん購入しました。来年は場所を変え、また違った土地に行ってみたいと思います。

(富山・大角由美子)

◆「おしきせの教育」に参加して、自分は管理教育に抵抗してやっていると思ってきたけれど、知らないうちに子供を管理している自分に気づいた。自分たちの目ざす学校とは何

なのか、もっともっと討論しあい、自己批判していかなくては、と思った。

フォーラムに参加して、元気が出ました。ありがとう！

(大阪・北川好美)

◆子どもたちの受け入れ体制がしつかりできていて、この会に参加したことが、子どもにとってもいいと思った。これは、まだ子どもにない私にとっても、心強く思った。

最後に決意を發表された方の「自分にできることは」のところで胸が熱くなり、この思いを兵庫の方で伝えたいと思った。

(兵庫・小山和代)

◆大部分が教師として生きてきている参加者の中で、主婦である私とのギャップをまず感じました。生き方の違いは、意識(考え方)の差であることを改めて痛感。自分の関心事について話し合いたいと思うのは当然ですが、やはり限られた人たちの会であったと思います。八日の話し合いの中で出た意見のよいうに、もっと交流の時間があつたら、参加者のいろいろな生き方、考え方がうかがえることができたと思います。(神奈川・柳下雅子)

◆種々な生き方をしている人たちの話は、日ごろから教師臭さが身にしみている自分、少しでも洗い落としてくれたように思った。

会に集まる人たちのことをあまり知らなかったのも、やはり教育とか教師とかに関する分科会を選んでしまったが、これからはそんなわくにとらわれずを選びたいと思う。

分科会はもっと多くあつて、少人数で話し合えたらいいと思った。

(大阪・岩瀬志津子)

◆日ごろWeを読んでいるうちに、一度行つてみようという気になつて参加しました。特別な活動をしていたわけではないので、初めは何か入り込みにくいところがありました。とにかく全国でがんばつていらつしやる方々のご意見をたくさん聞くことができて、今後の私の生き方に、何かプラスになつたのではないかと思います。

(京都・藤原成子)

◆若い男性、教員でない人の参加が少ない。テーマからいっても、テーマの内容を固定化しないためにも、

今後課題と思う。その面でも今後協力したい。

自然環境はともかく、昨年の江の島のほうが宿泊、会議場としてはベター！

(東京・石井宏和)

貴重なご意見ありがとうございました。来年のフォーラムに生かしましょう。あなれもぜひご参加を。

(編集部)



新しい家庭科

Vol. 3 No. 9 1984年12月20日発行
¥700(年間購読料・増刊号含¥6000)
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 振替 東京6-59867
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

近刊！ ウイ書房があなたに贈る2冊目の単行本



長谷川 孝

子どもって 不思議

— 学ぶことは生きること —

B6判 208ページ 予価1300円 送料 250円

おずかしかったけど すこしわかったよ
すばらしい聴き手でありがとう

なによりもおとなたちが
ブルドーザーのような教育にならされて
こどもたちは、だけど
とびきりに生命あふれて
はちきれぬくまなびのこころを
いっぱいにくらませて
きぼうはそこにあるのです
ルビコン河の岸におとなが立ち惑うとき
こどもらがおとなたちを励まして
ともにつくりだすくまなびの文化

〔日吉南小の子どもたちとの授業記録〕
「1たす1は2にならない」より

〈もくじ〉

- I 学びの名手たち
- II 教育を超える視点
- III くまなびの文化を考える
- IV 教師を志すあなたへ

1冊目の単行本は

半田た子



ご注文は、最寄りの書店に。(地方小出版流通センター扱)
ウイ書房に直接お申し込みの場合は、送料をお添えの上
振替で。(書名明記)



182 東京都調布市西つじヶ丘2-25-14 Tel03(326)1380

46判344ページ 定価1500円 送料300円

ウイ書房 振替口座 東京6-59867